

武蔵国分寺跡発掘調査概報

XIII

ーリクルートコスモスマンション建設に伴う調査ー

1988年9月

国分寺市遺跡調査会

序 文

昭和49年11月より始まりました武蔵国分寺跡の継続的な調査は、昭和61年4月より国分寺市遺跡調査会に継承され、今日に至っております。その間、僧寺・尼寺の寺域および寺地の確認調査を始め、下水道工事や個人住宅建設に伴う事前調査など300箇所にも及ぶ発掘調査がなされ、おおくの成果が蓄積されてまいりました。また昭和61年よりは、主要遺構の確認を主たる目標とした第2期調査が開始されました。こうした結果、武蔵国分寺跡の規模や変遷、あるいは集落構造が序々にではありますが明らかにされつつあります。また当該時代に限らず、市内の遺跡の調査・研究も進められ、地域の先史・古代史の解明への努力が続けられております。

今回の調査は、武蔵国分寺跡北方に位置した場所でなされたものであります。調査報告に示されていますように、縄文時代の遺構・遺物が主体でありましたが、また武蔵国分寺跡の集落構造を把握する上で一助となるものであります。

最後になりましたが、株式会社リクルートコスモスおよび調査団、そして国分寺市教育委員会の方々にはご協力とご援助を賜り、心よりお礼申し上げます次第です。

昭和63年9月

国分寺市遺跡調査会

会長 星野 亮勝

例 言

1. 本書は、東京都国分寺市西元町に所在する武蔵国分寺跡において昭和48年以来実施されている調査のうち、リクルートコスモスマンション建設に伴う調査の成果をまとめたものである。
2. 調査地は国分寺市泉町1丁目2818番地に所在し、全面積は1200.2m²である。
3. 発掘より調査報告書作成に係る費用はリクルートコスモス株式会社が負担した。昭和62年6月1日付けで締結した委託契約に基づき、国分寺市遺跡調査会が事業を実施した。
4. 現地における調査は昭和62年6月3日より、同年7月30日まで行い、報告書作成は昭和63年8月31日まで国分寺市遺跡調査会事務所でおこなった。なお、本調査は第288次調査として、実施されたものである。但し、同調査地区において昭和61年3月12日より同年5月30日まで実施した第249次調査の成果についても並記し、調査地区の更なる理解に努めた。
5. 発掘調査は広瀬昭弘、三木弘が担当し、上村昌男がこれをたすけた。
6. 本書の執筆・編集は滝口宏団長をはじめ、永峯光一、坂詰秀一、大川清各委員の助言と援助のもとに、三木弘が担当し、広瀬昭弘（Ⅳ-3（1）、4（3））、上村昌男（Ⅱ）が分担した。
7. 出土遺物の整理のうち、実測・トレース・写真撮影は、三木弘、東清子、久保井滋乃が主としておこなった。遺物図面・図版、遺構図面・図版の作成は下記に記す全員があたった。
8. 発掘調査・報告書作成の過程で次の方々の御教示・御協力を賜りました。厚くお礼申し上げます。（敬称略）
安孫子昭二、伊藤富士夫、岡崎完樹、加藤秀之、富樫雅彦、西脇俊朗、早川泉
9. 発掘調査ならびに整理作業に参加、協力いただいた方は下記の通りである。記して感謝いたします。（敬称略）

〔発掘作業〕

秋池勝利、雨宮毅、井口正利、川島寿則、佐藤満、豊島威信、長島且典、馬場明弘、増田政之助、松沢英明、松田薫、和気順一

株式会社リクルートコスモス、株式会社間組、森永建設、田中開発工業

〔整理作業〕

大沢華子、岡ミサオ、川岸みつ子、久保井滋乃、桑名俊子、宍戸和子、鈴木洋子、高橋より子、千葉則子、永沢昭子、野中節子、東清子、八高昭枝、若林雅子

凡 例

本文

1. 遺構は、各遺構ごとにほぼ発見順に連続番号を付し、下記に遺構番号を冠して表示する。なお本文中には「S I 360 住居跡」・「S K 897 土坑」の様に記述した。

S I 住居跡・工房跡 S K 土坑 P 炉穴・小穴

図面・図版

1. 遺構

- ①遺構配置図表示の数字は、発掘基準中心点からの距離を表す。発掘基準中心点と僧寺金堂中心点の位置関係は、前者の南北基準線上、中心点南26.276mに後者がある。また僧寺中軸線の方位は発掘南北基準線と一致し、真北から7° 08' 03"、磁北から0° 38' 03" それぞれ西偏する。
- ②断面図表示の数値は水系レベルで、海拔高を示す。
- ③スクリントーンの指示は次のとおりである。

 IV・V層  焼土・焼け面

- ④縮尺はつぎのとおり統一したが、一部異なるものがある。

遺構配置図 1/200、住居跡・土坑ほか 1/50

2. 遺物

- ①写真図版のうち出土遺物は、図面番号と対照にした。例えば「8-10」とあれば「図面8-10」のことを示す。
- ②縮尺はつぎのとおり統一した。

図面 縄文土器・石器 1/3 (小型石器 2/3)

図版 縄文土器・石器 1/2 (小型石器 1/1)

本文目次

序	
例 言	
凡 例	
I 調査に至る経過	1
II 調査地区の概観	6
1. 調査地区の位置・立地	6
2. 層序	9
III 発掘経過	11
IV 縄文時代	15
1. 検出遺構	15
(1) 住居跡	
(2) 土坑	
(3) 炉穴	
(4) 小穴	
2. 遺物包含層の発掘	29
3. 出土遺物	30
(1) 土器	
(2) 石器	
(3) 礫	
4. 小結	45
(1) 検出された遺構と遺物	
(2) 調査地区付近の歴史時代遺構の分布について	
(3) 出土土器について	
(4) 挟入磨石	
(5) 陥穴と貯蔵穴	

挿図目次

第1図	遺跡の位置 (1/25000)	4
第2図	調査地区の位置 (1/5000)	5
第3図	層序 (1)	9
第4図	層序 (2)	10
第5図	先土器時代調査深掘り区位置 (1/400)	12
第6図	調査地区主要遺構配置図 (1/20000)	15
第7図	調査地区遺物分布図 (1/400)	27
第8図	縄文時代遺構分布図 (1/300)	46
第9図	寺域北方歴史時代遺構分布図 (1/5000)	50
第10図	抉入磨石遺存状態概念図.....	57
第11図	土坑内覆土模式図.....	63

表目次

第1表	調査地区付近の検出遺構.....	7
第2表	工程表.....	14
第3表	検出遺構一覧.....	15
第4表	S I 360・361 住居跡内小穴一覧.....	17
第5表	土坑一覧.....	19
第6表	小穴規模分布① (長径、短径)	26
第7表	小穴規模分布② (深さ)	26
第8表	小穴長・短径比分布.....	26
第9表	発見遺物一覧.....	30
第10表	石器一覧.....	35
第11表	礫項目別属性分析.....	43
第12表	礫大きさ分布.....	44
第13表	調査地区付近縄文時代遺跡一覧.....	48
第14表	寺域北方住居跡一覧.....	51

図面目次

- 図面 1 遺構配置図
- 図面 2 S I 360 住居跡実測図
- 図面 3 S I 361 住居跡実測図
- 図面 4 S I 360・361 住居跡、土坑実測図
- 図面 5 土坑実測図
- 図面 6 土坑実測図
- 図面 7 土坑、炉穴実測図
- 図面 8 縄文土器 (1)
- 図面 9 縄文土器 (2)
- 図面10 縄文土器 (3)
- 図面11 縄文土器 (4)
- 図面12 縄文土器 (5)
- 図面13 縄文時代石器 (1)
- 図面14 縄文時代石器 (2)
- 図面15 縄文時代石器 (3)
- 図面16 縄文時代石器 (4)

図版目次

- 図版 1 第288 次調査地区全景
 - 1. 調査地区全景
- 図版 2 調査地区全景
 - 1. 調査地区全景
 - 2. 調査地区全景
- 図版 3 調査地区全景
 - 1. 調査地区全景
 - 2. 調査地区全景 (第249 次)
- 図版 4 調査風景
 - 1. トータルステーション (南から)
 - 2. 写真实測 (西から)
 - 3. ゴンドラ撮影 (西から)

- | | | |
|------|----------------------------------|----------------------------|
| | | 4. 覆土水洗 |
| | | 5. 調査風景（南から） |
| | | 6. 調査風景（北から） |
| 図版 5 | 遺物出土状況 | 1. 遺物出土状況（南から） |
| | | 2. 遺物出土状況（西から） |
| | | 3. 遺物出土状況（北から） |
| 図版 6 | S I 360 ・ 361 住居跡 | 1. 全景（北から） |
| | | 2. 全景（南から） |
| | | 3. 全景（東から） |
| 図版 7 | S I 360 ・ 361 住居跡 | 1. 遺物出土状況（北から） |
| | | 2. 遺物出土状況（西から） |
| | | 3. 住居内小穴（P-2）（北から） |
| 図版 8 | S K 897 ・ 898 土坑 | 1. S K 897 土坑全景（北から） |
| | | 2. S K 897 土坑東西土層断面（北から） |
| | | 3. S K 897 ・ 898 土坑全景（北から） |
| 図版 9 | S K 898 ・ 899 土坑 | 1. S K 898 土坑全景（北から） |
| | | 2. S K 898 土坑南北土層断面（西から） |
| | | 3. S K 899 土坑全景（西から） |
| 図版10 | S K 900 土坑 | 1. S K 900 土坑全景（西から） |
| | | 2. S K 900 土坑全景（北から） |
| | | 3. S K 900 土坑東西土層断面（南から） |
| 図版11 | S K 901 土坑 | 1. S K 901 土坑全景（西から） |
| | | 2. S K 901 土坑全景（北から） |
| | | 3. S K 901 土坑南北土層断面（西から） |
| 図版12 | S K 902 ・ 903 土坑 | 1. S K 902 土坑全景（西から） |
| | | 2. S K 902 土坑南北土層断面（西から） |
| | | 3. S K 903 土坑全景（北西から） |
| 図版13 | S K 1043 ・ 1044 ・ 1045 ・ 1046 土坑 | 1. 全景（南から） |
| | | 2. 全景（北東から） |
| 図版14 | S K 1043 ・ 1044 土坑 | 1. S K 1043 土坑全景（南から） |
| | | 2. S K 1043 土坑南北土層断面（西から） |

- 図版15 S K 1044・1045土坑
- 図版16 S K 1046土坑
- 図版17 S K 1047・1048土坑
- 図版18 S K 1048・1049土坑
- 図版19 P 187 炉穴
- 図版20 先土器時代調査
- 図版21 縄文土器 (1)
- 図版22 縄文土器 (2)
- 図版23 縄文土器 (3)
- 図版24 縄文土器 (4)
- 図版25 縄文土器 (5)
- 図版26 縄文時代石器 (1)
- 図版27 縄文時代石器 (2)
- 図版28 縄文時代石器 (3)
- 図版29 縄文時代石器 (4)
3. S K 1044土坑全景 (南から)
1. S K 1044土坑南北土層断面 (東から)
2. S K 1045土坑全景 (北から)
3. S K 1045土坑東西土層断面 (南東から)
1. 全景 (北から)
2. 全景 (東から)
3. 南北土層断面 (西から)
1. S K 1047土坑全景 (北から)
2. S K 1047土坑南北土層断面 (西から)
3. S K 1048土坑全景 (北から)
1. S K 1048土坑南北土層断面 (南西から)
2. S K 1049土坑全景 (東から)
3. S K 1049土坑南北土層断面 (西から)
1. 焼土検出状況 (南西から)
2. 完掘状況 (南西から)
3. 南北土層断面 (南西から)
1. 深掘り区全景 (南から)
2. 深掘り区全景 (東から)
3. 標準土層 (No.17深掘り区) (東から)

I 調査に至る経過

昭和62年4月18日付、国教社文収第219号122（株）リクルートコスモスより国分寺市泉町1丁目2818-2・7・9・12・13番地においてマンション建設を行う旨、文化財保護法に基づく文化庁長官宛に届出がなされた。

届出地は、第249次（信濃建設分譲住宅建設に伴う調査）において敷地内の一部分を調査済みであり、縄文時代早期の住居跡、土坑、小穴が発見され、遺物として縄文土器、石器、礫が出土している。

また調査地北側においてマンション建設に伴う発掘調査を実施しており、平安時代の骨蔵器、先土器時代の礫群と石器が検出されている。

今回の計画においては敷地全体に建物の建設が予定されているため、事前に本調査を実施することで届出人と協議を行った。

協議の経過は以下の通りである。

第1回協議、昭和62年5月7日

設計事務所より、マンション工事内容の中で、設計G L、建物の基礎構造、給配水関係について説明をうける。

調査地周辺地域の埋蔵文化財発掘調査状況を提示し、事前に調査が必要な地域であることを説明した。次回の協議までに調査実施要綱を作成し再度協議をおこなうこととなる。

第2回協議、昭和62年5月15日

調査実施要綱の説明をおこなう。内容は、歴史時代、縄文時代の調査については敷地全体を対象に実施し、先土器時代については建物の基礎部分の中で影響のある部分のみおこなうという計画である。

届出人は、調査の内容については了解がとれたが、調査の期間について、来年4月入居予定の計画であり、工事の工程を逆算すると、8月後半には着工しなければならないため、発掘調査期間短縮の要望があった。

期間短縮の方法として、届出人より土木労務委託と、遺構遺物の記録作業を写真測量実測やトータルステーションを実施することで、再度調査計画をたてなおし協議を行うこととなった。

第3回協議、昭和62年5月28日

再度、土木、写真測量実測委託を計画にもりこんだ調査実施要綱を作成し、届出人に提示し了解をとる。

以下は調査計画にて合意した内容である。

①建物基礎部分の全体である1270㎡について歴史時代、縄文時代の調査をおこなう。先土器時代については、建物の基礎部分が深くなる内の200㎡についてトレンチを設定し深掘りを実施する。

②調査期間は昭和62年6月1日より昭和63年8月31日とする。その内訳は現地調査実働59日、室内整理作業146日である。現地作業の終了日は昭和62年8月31日までとする。

③遺構の記録、出土遺物の実測は写真測量実測やトータルステーションを使用する。

④調査地の表土掘削作業、残土搬出処理作業、保安施設設置作業については届出人が行う。

⑤発掘調査に必要な作業員は届出人より提供してもらおう。作業の内容は遺物包含層の掘削、遺構覆土の掘削、先土器調査のための掘削などである。

⑥現地調査体制は調査員1名、発掘作業員4名でおこない、主として遺構の確認、土層断面の区分と記録、遺構遺物の写真撮影をおこなう。

⑦届出人にて行う作業については、調査費に組みこまないこととする。

⑧室内整理作業については、一部現場においておこなうが、発掘調査終了後に国分寺市遺跡調査会事務所にて実施する。

⑨室内整理作業員の体制は調査員1名、発掘作業員3名、整理補助員2名、整理作業員2名でおこない、水洗、註記、接合、復原、実測、拓本、トレースなどの作業をおこない報告書の作成までとする。

⑩整理作業の中で前回第249次で調査した箇所の遺構、遺物につき今回のものといっしょに整理し報告する。

なお昭和62年6月1日付国遺調第1号にて(株)リクルートコスモスと埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結した。調査費用は10664000円である。

国分寺市遺跡調査会組織

(昭和63年9月現在)

会 長	星野亮勝	国分寺市文化財保護審議会委員長
副会長	滝口 宏	東京都文化財保護審議会会長
理 事	永峯光一	東京都文化財保護審議会委員
”	坂詰秀一	”
”	大川 清	国土館大学教授
”	本多良雄	国分寺市長
”	内野孝治	国分寺市教育委員会委員長
”	興津精二	国分寺市教育委員会教育長
”	浅見正平	国分寺市社会教育委員会議長
”	藤間恭助	国分寺市文化財保護審議会委員
”	佐藤敏也	”
”	松井新一	”
”	吉田 格	”
”	佐々木護	東京都教育庁社会教育部文化課副主幹
”	進藤文夫	国分寺市教育委員会社会教育部長
監 事	星野亮雅	国分寺市社会教育委員会議副議長
”	亀田侑男	東京都教育庁社会教育部文化財課長
”	関 茂雄	東京都教育庁社会教育部文化財係長

武蔵国分寺跡調査・研究指導委員会

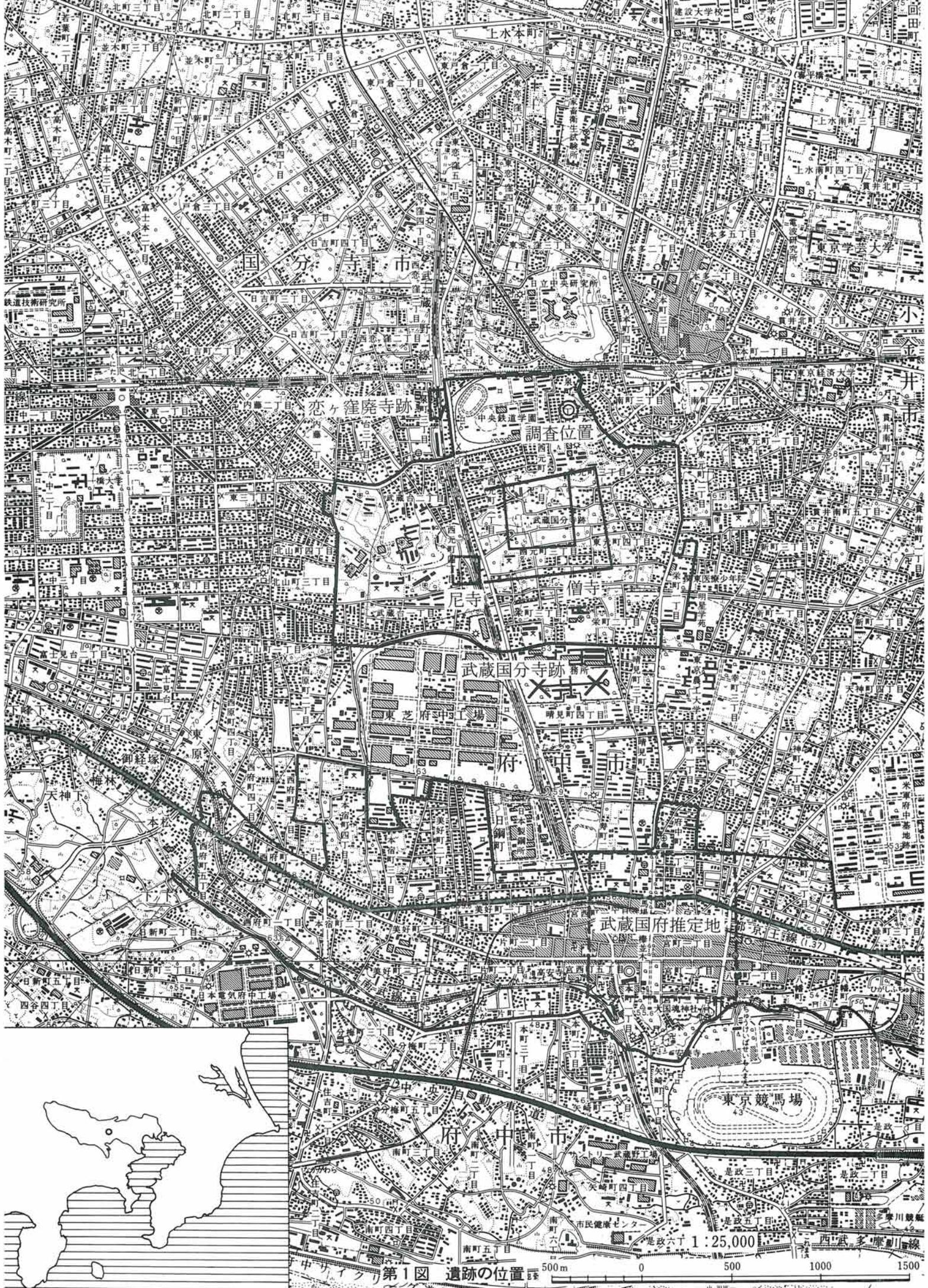
委員長	滝口 宏	(考 古)
委 員	永峯光一	(”)
	坂詰秀一	(”)
	大川 清	(”)

事 務 局

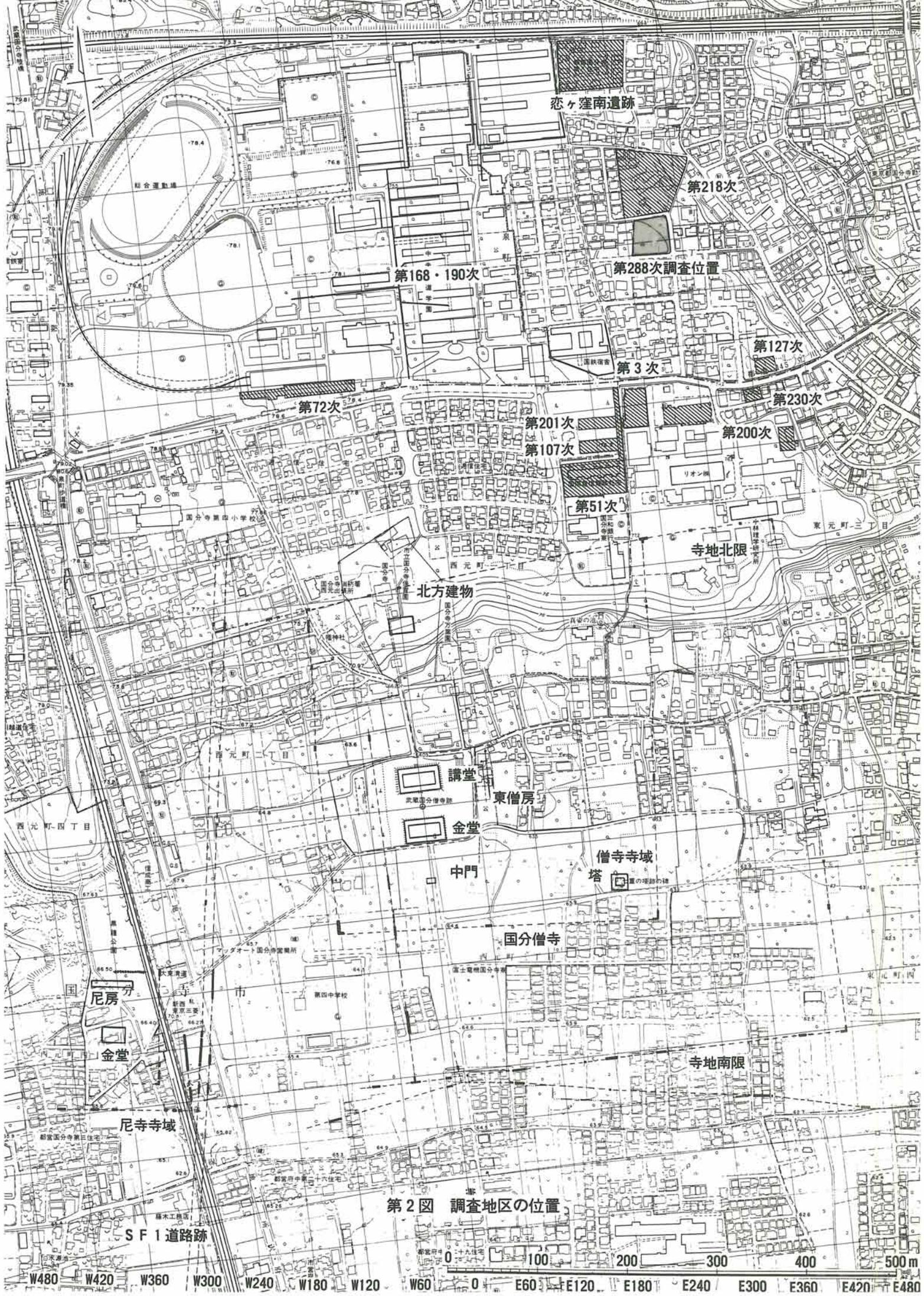
事務局長	野口武夫	国分寺市教育委員会文化財課長
事務局員	田倉武市	国分寺市教育委員会文化財課庶務係長
”	鈴木 晃	国分寺市教育委員会文化財課庶務係員
”主任	石川茂明	

調 査 団

調査団長	滝口 宏	東京都文化財保護審議会会長
主任調査員	有吉重蔵	国分寺市教育委員会文化財課文化財保護係長
調査員	福田信夫	国分寺市教育委員会文化財課文化財保護係員
	広瀬昭弘	”
	上村昌男	”
	上敷領久	国分寺市教育委員会遺跡調査員
	三木 弘	神奈川歯科大学非常勤講師
	滝島和子	国土館大学卒業生



第1図 遺跡の位置 500m 0 500 1000 1500 1:25,000



第2図 調査地区の位置

Ⅱ 調査地区の概観

1. 調査地区の位置・立地

本調査地区は国分寺市泉町1丁目2818番地に所在する。調査地区の北側250mにはJR中央線が、また南側150mには都道145号（国分寺－国立）線が、それぞれ東西方向に走っている。

調査地区は海拔標高75mほどの武蔵野台地の武蔵野段丘面に立地している。武蔵野台地は、南を多摩川に、北を荒川、入間川に挟まれた洪積台地で、東に向かうにつれて緩やかに標高を減じている。この武蔵野台地には、古多摩川の浸食により高さの異なった幾つかの地形面が形成されており、高位面より下末吉面、武蔵野面、立川面と呼ばれている。

武蔵野面と立川面との間には、国分寺市付近で比高差12mほどを測る国分寺崖線が走行している。この段丘崖線は通称「ハケ」の名前で親しまれ、立川市北東部より始まり、東は世田谷西端まで蛇行しながら延びている。当調査地区付近では、北西から南東方向に切り込んだ野川による開折谷である幅60mの恋ヶ窪谷により武蔵野段丘面が分断されている。本調査地区はこの恋ヶ窪谷から西側にあがった位置にある。そしてさらに、その北方100mには恋ヶ窪谷から派生した小支谷が約40mにわたって西方に入り込んでいる。

国分寺崖線や恋ヶ窪谷の下辺にそって湧水泉が点在している。したがって崖線からは400mほど奥まった地点にあるとはいえ、恋ヶ窪谷やその小支谷が近くに入り込んでいることから、水の便には事欠かなかったものと考えられる（註1）。

さて武蔵国分寺跡は、僧寺金堂を中心として東西2.0km、南北1.5kmほどの範囲で遺構の分布が認められているが、僧寺や尼寺の主要遺構は立川段丘面に位置している。しかし、僧寺々域を区画する溝跡は武蔵野段丘面にまで延びている。一方、本調査地区は僧寺中軸線より北へ586～623m、東へ306～346mの位置にあり、寺域外北方にあたる。調査地区の中心は金堂より直線距離で約715m、また僧寺々域の区画溝よりは320mほどの距離がある。

このように僧寺々域よりさらに北側に位置する本調査地区であるが、この周辺においても幾つかの調査が実施されている。すなわち、第3次調査、第51次調査、第72次調査、第107次調査、第127次調査、第168・190次調査、第200次調査、第218次調査、第230次調査および恋ヶ窪南遺跡の調査などである。このうち第168・190次調査は本調査地区の南西から西側にかけて、第218次調査と恋ヶ窪南遺跡が北側に位置した調査範囲であるのを除けば、いずれも南側の崖線近くでおこなわれた調査である。

こうした調査にもとづき武蔵野段丘面での遺構の在り方を概観しておく（第1表）。まず発掘された歴史時代の遺構についていえば、竪穴住居跡は僧寺中軸線の北456～480m付近を、掘立柱建物跡は同574～578m付近を北限としている。こうした寺域外北側に位置する竪穴住居跡や掘立柱建物跡には重複あるいは建替えは概して認められない。但し第185次調査（南部地区22号下水道工事に伴う調査）のうち当調査地区の南側でおこなわれた試掘調査の結果では僧寺の北535mの地点においても住居跡が確認されている。したがって一部の地区ではこのように僧寺よりかなり北方に離れて住居が建てられていたものといえる。なお本調査地区の北側の第218次調査や恋ヶ窪南遺跡の調査、さらに東元町3丁目の武蔵野台地縁辺において火葬墓が検出されている。

縄文時代については、まず第51次調査地点を中心に国分寺崖線上の武蔵野段丘面に広がる多喜窪遺跡C地点や、その東側の恋ヶ窪谷の東向き緩斜面に分布する同遺跡D地点が挙げられる。両地点とも早期～中期（D地点は後期まで含む）の遺構・遺物が検出されている。しかしD地点においては遺構や遺物がいずれの時期にあっても散在的であり、地点の相違とともに、C地点とは異なった様相を示している。なおC地点には第200次調査のA地区が、D地点には同B地区が含まれよう。本調査地区の北250mには早期後葉～末および中期初頭を中心とした恋ヶ窪南遺跡が、旧都営国分寺第八住宅を中心として広がっている。早期末の住居跡21軒をはじめ、中期初頭の住居跡3軒、集石土坑11基、土坑46基、炉穴1個が検出されている。このほか第168・190次調査でも袋状土坑をはじめ12基の土坑、2基の集石が発見されている。このように縄文時代の遺構は国分寺崖線、恋ヶ窪谷およびその小支谷にそった武蔵野段丘面縁辺、あるいはそれより少し奥まったところに分布している。

次 数	歴 史 時 代	縄 文 時 代	先土器時代
第3次	住居跡7, 土坑4		
第51次	住居跡4, 掘立柱建物跡1, 溝跡2, 道路状遺構1, 土坑9	竪穴住居跡1, 配石跡1, 埋壺2 集石(土坑)10, 土坑20	ユニット3
第72次	住居跡7, 掘立柱建物跡1, 溝跡2, 土坑19	土坑4	
第103次	住居跡2		
第107次	住居跡5, 道路状遺構1, 土坑3	土坑4	ユニット1
第127次	(小穴5)	(小穴27)	
第168・190次	住居跡3, 掘立柱建物跡2, 溝跡9, 土坑10	集石2, 土坑29	
第200次	住居跡2, 掘立柱建物跡4, 溝跡1, 土坑23	竪穴状遺構1, 集石3, 土坑9	ユニット1
第201次	住居跡4, 掘立柱建物跡1, 火葬墓1, 土坑8	土坑2	
第218次	火葬墓1	土坑1	ユニット5 磔群3
第230次	住居跡3	集石1	
恋ヶ窪南	火葬墓1	竪穴住居跡24, 炉穴1, 土坑46, 集石土坑11	

第1表 調査地区付近の検出遺構

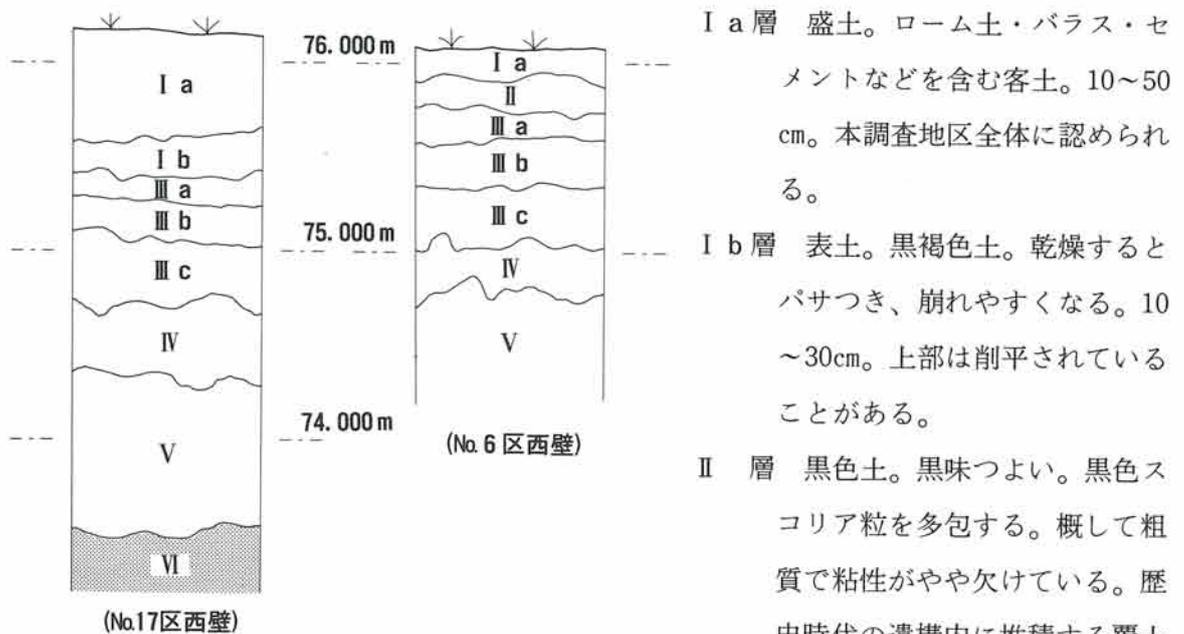
先土器時代に関しても、第51次調査、第107次調査、第200次調査および第218次調査において遺物ユニットが検出されている。したがって縄文時代の遺構と同様、武蔵野段丘面の縁辺にそって分布していると考えられる。但し、縄文時代の遺構の分布に比して、先土器時代の遺物分布の様相は狭小であり、段丘面の奥には余り入り込んでいないものといえる。

(註1) 第168・190次調査において、僧寺中軸線の北721～730m、東145～157mに位置するS X 34不明遺構が発見された。この遺構は報告書の中でもふれたが、恋ヶ窪谷の小支谷にそった流水路の可能性が高い。したがって武蔵野段丘面から崖下に幾筋もの水の流れがあったと考えることができよう。なお先の報告では本遺構を歴史時代のなかで紹介したが、Ⅲ a、Ⅲ b層に対応するレベルで検出されていることから、縄文時代に遡る可能性は充分にある。

2. 層序

既に述べたように本調査地区は武蔵野段丘面上に位置しているが、東側に近接して恋ヶ窪谷が東方向に走り、また北側には恋ヶ窪谷より派生した小支谷が入り込んでいる。そのため調査地区の地形も北東方向に傾斜し、ことに北東隅より南および西側3m以内は傾斜が顕著になっている。なお調査地区の南西隅と北東隅とでは約1.6mの比高差がある。

しかしまた、地形にレベル差があるにもかかわらず、調査地区内の層序はどの部分でもほぼ等しい。以下に基本層序を記すが、本調査地区の場合、調査以前に掘削・盛土がなされていた。そのため影響がⅡ層あるいはⅢa層までおよび、観察しえない部分もあった(第3・4図)。



第3図 層序(1)

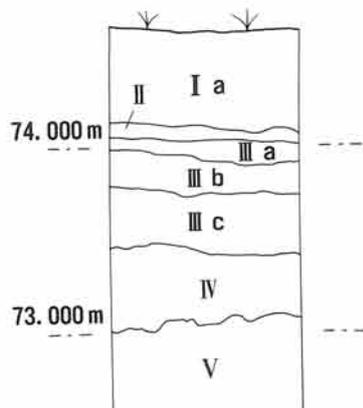
含する。大体10~20cmの堆積幅をもつ。

III a層 黒褐色土。やや茶褐色味をおびる。締まりよく、粘性もある。II層やIII b層との境は漸移的である。堆積幅は10cm前後であるが、地点によっては薄くなる。そしてまた、本調査地区でもこのIII a層が薄層であることが層序のひとつの特徴である。縄文時代の遺物を出土する層でもある。

III b層 暗茶褐色土。下部になるほど褐色味を強くし、粘性も増す。縄文時代の遺物を多く含む。歴史時代の遺構の大半は当該層上面で検出が可能となる。

III c層 茶褐色土。ローム漸移層。縄文時代の遺物を若干含む。ことに上部において顕著である。縄文時代の遺構は当該層上面で検出が容易となる。

IV 層 暗黄褐色ローム。ソフトローム。III c 層との境はやや不明確である。当該層上面で縄文時代の遺構検出は網羅しえる。



(No.18区北壁)

第4図 層序(2)

V 層 黄褐色ローム。ハードローム。下部にいくほど黄褐色味が乏しくなり、また灰色味を増す。よって色調から二分できる可能性はあるが、その境は極めて漸移的である。赤色および黒色スコリア粒を多包する。

VI 層 暗褐色ローム。立川ローム第1黒色帯。スコリア粒は細かく、粒子の密度は高い。また粘性も強い。

Ⅲ 発掘経過

昭和62年6月3日よりリクルートコスモスマンション建設に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施した。本調査地区はその一部が前年の第249次調査（信濃建設・菱和住販分譲住宅建設に伴う調査）として発掘されている。したがって今次は、現表土面から各層までの深度や各時代の遺構の在り方などをほぼ把握したうえで調査を開始することが可能であった。

調査はまず重機（ユンボ）による現表土層（Ⅰ層）の除去から始まった。3日目から重機を2台にし、8日間で表土層の掘削は終了した。

表土層除去作業がほぼ半ばに達した6月5日より、発掘作業員によりⅢb層までの遺物包含層の発掘がすすめられた。Ⅲb層上面まで掘り下げた段階で歴史時代の遺構の確認作業をおこなった。先の第249次調査では当該時期の遺構は未発見であったが、近在する第218次調査や恋ヶ窪南遺跡の調査では火葬墓が単独で発見されており、本調査地区でもあるいはそうした遺構の存在の可能性を否定できない状況にあった。しかしながら、結果的には歴史時代の遺構を認めることはできなかった。

歴史時代の遺構が存在しないことを確認したのち、ふたたび遺物包含層の発掘をすすめ、6月10日頃より縄文時代の遺構確認作業をおこなった。本調査地区周辺では、縄文時代中期以降の遺構はⅢc層上面でほぼ確認されうるのにたいし、それ以前の時期のものはⅢc層下面あるいはⅣ層上面まで掘り下げなければ確実に捉えることは難しいという状況にある。よって縄文時代の遺構確認作業も層位を異にして二度おこなった。その結果、Ⅲc層上面では一部の土坑などが不明瞭な状態で認められたが、その輪郭を確実に把握するまでにはいたらなかった。よってⅢc層下面まで掘り下げ、各遺構の輪郭を明らかにすることに努めた。またこの段階になって、小穴の多くも検出された。遺構確認作業は6月19日頃にほぼ終了した。なお表土層除去後からⅢc層下面までの遺物包含層掘削の過程において出土した遺物は極力その場に残した。そのため遺物が検出された部分は土柱となって残り、場合によっては遺構確認作業に支障をきたすこともあった。

こうした遺物は6月23、25、26日の3日間にわたり、コクサイ航測株式会社に委託したトータルステーションにより取り上げた。そのさい、発掘基準中心点からの距離および海拔標高を付与した。なおその後に出土した遺物については従来通り調査地区内の基準杭からの測り込みによって位置をおとした。

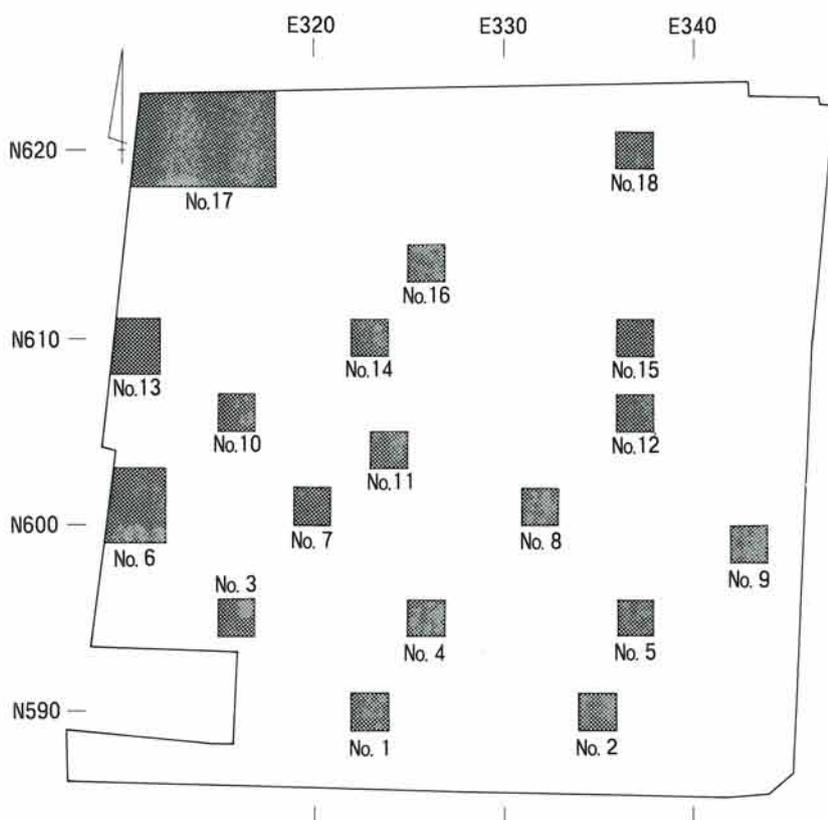
遺構の発掘調査は6月19日から実施した。トータルステーションがおこなわれるまでは、残した遺物やその下の土柱に影響を受けない小穴の発掘をしたにすぎなかったが、遺物取り上げ後発

掘作業は本格化した。遺構は201 個を数えたが、その96%が小穴であるため発掘や覆土の観察は割合に順調にすすめることができた。但し、7基の土坑はいずれも深く、また開口部径が1 m前後であったり、狭長な形態であるため作業はしづらく、そのうえ複数の作業員が入りきらない規模のものであったため、土坑の調査には約2週間をついやした。

各遺構の平面図作成作業は、7月8日にコクサイ航測株式会社に委託した写真測量によった。但し土坑などの主要遺構および不整形な小穴については写真測量と前後する時期に従来の測り込みによる平面図実測をおこない、写真測量の成果を補った。ところで、写真測量によって描かれた平面図の可否を判断するまでは遺構をそのままの状態に遺存させておかねばならなかった。しかし、つづく先土器時代の調査のために調査地区内に幾つかの深掘り区を設定せねばならず、そこで深掘り区にあたった部分の遺構も一応測り込みにより平面実測図を作成した。写真測量による平面原図が完成したのは実施の3週間後であり、7月29・30日にその修正作業をおこなった。

調査地区の全体写真もコクサイ航測株式会社に委託して、7月10日にクレーン車の上よりおこなった。また先の写真測量において撮影された遺構写真も利用することができた。

先土器時代の調査は7月14日より開始した。すなわち、調査地区全体に散在させた18箇所の試掘区を設定し、建物の基礎による影響深度まで掘り下げた(第5図)。その深度は浄化槽部分



第5図 先土器時代調査深掘り区位置

(No.17区)でVI層(立川ローム第1黒色帯)中程までに及んだが、その他では概ねV層上面あるいはその中程までとなった。調査の結果、No.6区より礫5点、No.13区よりチップ(黒曜石)1点が出土したにすぎず、明瞭な先土器時代の遺物群を捉えることはできなかった。この先土器時代の試掘作業は7月28日に完了した。なおその前日の27日に試掘区の全景写真を撮影した。

写真測量による平面実測図の修正作業と並行して、

発掘器材の点検・整理をおこない、7月30、31日の両日で器材を搬出し、発掘現場事務所を片付けた。

以上の経過により第288次調査は昭和62年7月31日に終了した。こうした経過については第2表にまとめ、また先土器時代の試掘区位置については第5図にあらわしたのであわせて参照されたい。なお発掘調査が当初の予定よりも早く終了することができたのは、歴史時代の遺構が皆無であったこと、縄文時代の遺構もそのほとんどが小穴であったこと、縄文時代の遺物も散在的に分布しているにすぎず、1㎡あたり0.86点（但し第249次調査分を含めると1.48点）という少量にすぎなかったこと、そして原因者側より発掘作業員の労務提携を受けたことなどが要因として挙げられよう。なお発掘調査全期間中の実働日数は48日、国分寺市遺跡調査会発掘作業員延数260人、提携発掘作業員延数387人を数える。

最後に、今次の調査で用いた写真測量とトータルステーションについてふれておく。これらの方法は各地の発掘調査で既に利用されているが、国分寺市遺跡調査会では前者は4回目、後者は初めての試みであった。こうした方法は時間の短縮を目指したものといえようが、しかしまたその成果の精度と修正の必要性、成果の提出される時間を考えると、なお課題は大きいといえる。

年 月 日	6月					7月					員数	
	5	10	15	20	25	5	10	15	20	25		30
実作業累計日数	5	10	15	20	25	30	35	40	45			48
表土除去	[Bar chart showing work from June 5 to June 10]											6
包含層発掘	[Bar chart showing work from June 5 to June 15]											14
遺構確認	[Bar chart showing work from June 10 to June 15]											9
土坑調査	[Bar chart showing work from June 20 to June 25]											15
小穴調査	[Bar chart showing work from June 15 to June 20]											16
トータルステーション	[Bar chart showing work on June 20 and 25]											3
写真測量	[Bar chart showing work on July 10 and July 25]											3
全体写真	[Bar chart showing work on July 10 and July 25]											2
壁面土層観察	[Bar chart showing work from July 10 to July 15]											2
先土器時代調査	[Bar chart showing work from July 15 to July 20]											11
(人) 発掘作業員数 □ 調査会作業員 ▨ 提携作業員												
	調査開始					クレーン全体写真による						

第2表 工程表

IV 縄文時代

1. 検出遺構

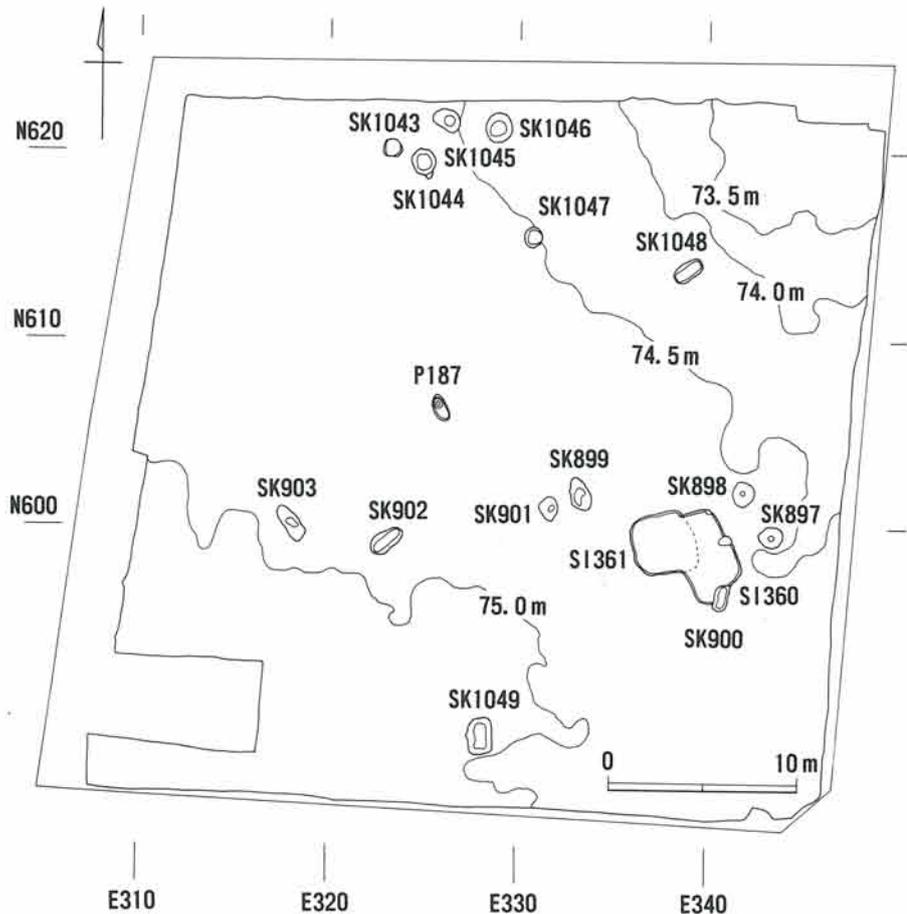
本調査によって検出された遺構は、土坑7基、炉穴1個、小穴193個を数えた。いずれも縄文時代に属するものであり、縄文時代以後の遺構は発見されなかった。また、先におこなった第249次調査では住居跡2軒、土坑7基、小穴33個が既に発見されている。したがって本調査地区での遺構全体数は、住居跡2軒、土坑14基、炉穴1個、小穴226個となる(第3表)。

	第 249次	第 288次	計
住居跡	2	0	2
土坑	7	7	14
炉穴	0	1	1
小穴	33	193	226

第3表 検出遺構一覧

遺構の分布は調査区全体に広がっているが、西端の12mより東寄りでは遺構数はやや減っている。それは東側にいくにつれ、恋ヶ窪谷に向かって傾斜していることにも起因しよう。但しその範囲内には、重複した2軒の住居跡が認められている。また土坑は北側の群集した一群と、南半の散在的に分布したものとがある。(第6図)。

調査区内には数箇所
で攪乱が認められた。
ことに北側では5m以
上のものであり、幾つ
かの遺構が破壊されて
いる可能性はある。し
かも北側では土坑が割
合に集合していること



第6図 調査地区主要遺構配置図

から、そうしたものを考える際の有効なデータを失っているおそれはある。

ところでいずれの遺構もⅢ b 層下部やⅢ c 層上部では捉えることができず、Ⅲ c 層下部～Ⅳ層最上部においてはじめて明瞭に確認しえた。すなわち、この確認面レベルの低さは検出遺構の時期とかかわっているものといえる。なお遺物は大半がⅢ b 層に包含されており、Ⅲ c 層上部にも若干認められた。

(1) 住居跡

住居跡は 2 軒検出されている。ともに前年の第249次調査において発見されたもので、本調査区の中央やや南東寄りに位置している。2 軒は重複した関係にある。また東側の S I 360 住居跡は S K 900 土坑に切られている。両住居跡ともⅢ c 層下面まで下げてはじめて輪郭があきらかとなったが、Ⅲ c 層中程でも不明瞭ながら確認されている。よって住居跡の掘り込みはⅢ c 層上面あるいはそれより少し高位からなされたものと考えられる。

S I 360 住居跡 (図面 2、図版 6・7)

2 軒の住居跡のうち、東側に位置するものである。西側で S I 361 住居跡と、南側で S K 900 土坑と重複している。S I 361 住居跡との先後関係については、両者の床面レベルが等しいことから、薄層であるが住居跡内覆土の状況から判断した。すなわち、S I 361 住居跡の西側の壁ぎわでみられる 2 層 (黄褐色土) が東側 2.9～3.3m の S I 361 住居跡の中央にあたる部分においても認められた。しかもその 2 層は、S I 360 住居跡の覆土である 4 層 (黒褐色土) を切り込んでいるように観察される。また 2 層の西端と東端の距離はいま述べたように約 3.3m を測るが、これは S I 361 住居跡の南北方向の距離 3.2m とほぼ一致する。こうしたことから、S I 360 住居跡が S I 361 住居跡よりも先行するものと判断した。

形態や規模については、S I 360 住居跡によって約四分の一ほどが崩されていることから明示しがたいが、P 1 を本住居跡の柱穴の 1 つとして捉えることで大まかには理解できる。すなわち、長軸を N-18°-W にむける長方形を呈し、各隅は丸味をもっている。また南西隅は張りだしており、やや不整な形をつくっている。東辺 3.7m、南辺 2.5m、西辺推定 4.8m、北辺推定 2.8m をそれぞれ測る。

壁高は確認面より 0.1m を測るにすぎないが、本来はもう少し高いものであったと思われる。なおⅢ c 層上面から床面まではおよそ 0.3m を測る。構築時にはⅣ層を 0.1m ほど掘り込み、Ⅳ層面を平坦にしてそのまま床面としている。壁ぎわ付近を除き、床面は全体的に堅固である。

壁の立ち上がりは不明瞭である。その立ち上がりの弱いことに加え、壁ぎわにロームブロック

を含む黄褐色土（5層）が堆積しているため、壁の把握はむづかしかった。ことに南から東側にかけての壁の立ち上がりは弱く、いっそう理解を困難にした。ただ、壁ぎわの5層には黒褐色土が混入しており、それを手掛かりにして壁を捉えた。

住居跡内には10個の小穴が認められたが、そのうち柱穴とすることができるのは先のP1と、東壁中央にあるP8の2個にすぎない。これらを除くと柱穴とするには明確さを欠く。但し、P

No.	最大径	最小径	深さ	覆土	備考	No.	最大径	最小径	深さ	覆土	備考
1	23	20	32	Ⅱ b		13	22	20	10	I	
2	16	15	6	I		14	36	34	25	Ⅱ a	
3	24	18	9	I		15	24	21	10	I	
4	36	22	8	I		16	22	20	10	I	
5	32	24	13	I		17	20	17	18	I	
6	35	33	6	I		18	20	19	28	Ⅱ a	
7	24	20	14	I		19	—	36	9	Ⅱ b	
8	69	44	74	Ⅲ a		20	53	26	16	Ⅲ b	
9	23	21	6	I		21	28	26	10	I	
10	46	35	14	Ⅱ b		22	46	44	5	I	
11	30	27	37	Ⅱ a		23	140	116	41	Ⅱ b	住居跡より後出
12	30	20	10	I							

(I = 単一層、Ⅱ = 二層に分かれる、Ⅲ = 三層に分かれる)
 (a = 柱痕状の堆積層みられる、b = 水平堆積層のみ)

第4表 S I 360・361住居跡内小穴一覧

10は浅いながらも位置的には可能性があろう。しかしP10を柱穴とするとしても、本住居跡の形態に沿って柱穴が配されるという状況は認められない。なおP8では柱痕状の堆積層がみられた。しかしP10では暗黒褐色土と暗黄褐色土の順次堆積がみられる。そしてこれら3個の小穴を除く7個の小穴では、黒褐色土の単一層であった（第4表）。

周溝や炉址は検出されなかった。そのほか、入口部を示す構造なども認めることはできなかった。

住居跡内覆土は、大半を占める1層（黒褐色土）と、壁ぎわ1.0~1.2mに堆積した2層（黄褐色土）、および床面上の3層（暗黄褐色土）からなる。

本住居跡の覆土より出土した遺物はⅡ群に属する土器細片1点（8-9）のみであった。床面直上で出土したものではあるが、この細片1点のみをもって本住居跡の時期を決定することは避けなければならないであろう。ただ、S I 361住居跡、およびS K 900土坑により切られていることから、両者よりも先行することは明らかである。

S I 361 住居跡 (図面 3、図版 6・7)

S I 360住居跡の東側に重複した住居跡である。先に述べたように本住居跡が後出する。そこで覆土の様相を手掛かりにして、規模や形態を理解することが可能である。すなわち、南東隅は重複のため判然としないが、北東隅および南西隅は明らかに捉えられることができ、また覆土の観察から、土層断面のA'-Aラインで西壁より約3.3mのあたりに東壁が立ち上がっていることを知りえる。こうした点を結ぶことにより規模や形態を捉えた。

まず規模についてであるが、北辺2.6m、西辺2.9m、南辺推定2.8m、東辺推定3.3mを測る。平面は不整形を呈し、各隅は丸味をもっている。長軸をN-11°-Wにとり、S I 360住居跡とは7°の開きがある。

床面の状況はS I 360住居跡とほぼ変わらないが、ただ本住居跡にあっては硬質化した部分は割合に広がっている。

壁はS I 360住居跡よりも明確に捉えることができ、ことに西壁では明瞭に立ち上がっていた。

住居跡内には13個の小穴が認められたが、うちP23は明らかに後出したものである。つまり、住居跡確認面と小穴の掘り込み面とが一致しており、少なくとも住居跡がある程度埋没した段階で掘り込まれたものといえる。残りの22個の小穴のうち、柱穴と考えることのできるものはP11、P14、P18があり、やや浅いがP20も位置的には可能性がある。先のS I 360住居跡と同じく、本住居跡においても柱穴と考えられるものは並ばない。またP11、P14、P18では柱痕状の堆積がみられた。またP20では(暗)黄褐色土と黒褐色土が順次水平堆積をしている。これらを除くといずれも黒褐色土の単一層であった(第4表)。

本住居跡でも周溝や炉跡は認められなかった。

住居跡内覆土は、大半を占める4層(黒褐色土)、壁ぎわ0.4~0.5mに堆積した5層(黄褐色土)、床面上に散在的にみられる6層(暗黄褐色土)からなり、S I 360住居跡でみられた堆積状況と類似している。

住居跡内の覆土より出土した遺物は11点を数える。そのうち土器片は3点にすぎず、以下石鏃片1点、磨石1点(15-29)、フレイク3点、チップ2点、礫1点である。土器片は図示しえないほどの極小の破片であるが、1点は表裏に条痕が、1点は表面に擦痕が認められる。残りの1点は表裏とも無文である。これら3点はⅢ群に属するものとみることができよう。また遺物のうち2点の土器片や磨石は明らかに床面より浮いた状態で検出されている。

このように遺物、ことに土器は位置的状況に加えて、その僅少さからも、本住居跡の年代の決め手とするには弱い。ただ、覆土中に他類の土器を全く含まないことからすると、なお早期後葉~末に比定しうる可能性は残されている。

(2) 土 坑

検出された土坑は14基（第249次調査で7基、第288次調査で7基）を数える。それらは平面形、掘り込みの様相、堆積土などから幾つかの類にわけることができる。またこの調査区における分布の様子においても若干の違いは認められる。そこで各々の規模や平面形については第5表にまとめることとして、底面の状態、掘り込みの様相、覆土および遺物について各土坑ごとに説明を加えていく。

No.	上 面			下 面			深さ (cm)	平 面 形	
	長径 (cm)	長軸方向	短径 (cm)	長径 (cm)	長軸方向	短径 (cm)		形 状	長径/短径
897	126	東-西	105	28	南-北	26	38	不整円形	1.2
898	132	南-北	114	24	北西-南東	18	40	不整円形	1.2
899	188	南-北	100	97	南-北	56	30	長円形	1.8
900	148	北東-南西	80	110	北東-南西	48	69	長円形	1.9
901	129	南-北	98	46	北東-南西	26	26	不整円形	1.3
902	197	北東-南西	108	184	北東-南西	41	92	長円形	1.8
903	206	北西-南東	85	68	北西-南東	40	19	長円形	2.4
1043	94	東-西	92	80	東-西	80	144	円形	1.0
1044	138	南-北	125	99	南-北	80	142	楕円形	1.1
1045	135	北西-南東	110	68	北西-南東	62	144	楕円形	1.2
1046	143	東-西	140	94	北東-南西	82	134	円形	1.0
1047	104	南-北	88	96	南-北	75	65	楕円形	1.1
1048	172	北東-南西	86	160	北東-南西	46	70	長円形	2.0
1049	204	南-北	151	145	南-北	61	82	長円形	1.4
備考	・長径=最大長、短径=長径に直交する最大長 ・円形=指数1.0、楕円形=指数1.1~1.3、長円形=指数1.4~を目安にする。								

S K 897土坑
 (図面4、図版8)
 調査区の東端に位置し、S I 360住居跡の東1.5mにある。平面形は東西方向にやや張り出す不整円形を呈している。底面は狭小で、湾曲している。断面形はスリバチ状を呈しているが、壁は少し起伏をもって立ち上がっている。

第5表 土坑一覧

ことに開口部より

15cmのところでは段が付き、開口部に向かって開き気味に立ち上がっている。覆土は上層の黒褐色土（1~3層）と下層の黄褐色土（4・5層）とに大別できる。しかし上層においても、ローム土を混入する2層は1・3層に比してやや異質的といえる。遺物の出土は認められなかった。

S K 898土坑（図面4、図版8・9）

本土坑も調査区の東端に位置し、S I 360住居跡の北東1.2m、S K 897土坑の北西1.5mにある。開口部は南側に少し張り出している。本土坑の底面も狭小で、湾曲している。掘り込みは、南側

でやや開き気味であるが、全体的に壁は内彎しており、断面碗状を呈している。底部は明瞭には捉えがたく、壁との境が判然としない。覆土は上層のローム土を含む黒褐色土（1・2層）と壁ぎわ・底部上の黄褐色土（3・4層）からなる。黄褐色土は壁などの崩落土と考えられ、それに黒褐色土が混入していることからすると、基本的には黒褐色土のみが土坑の覆土であったといえよう。遺物の出土は認められなかった。

S K 899土坑（図面5、図版9）

調査区の中央やや東側に位置し、S I 361住居跡の北西2.3mにある。北東側が僅かに攪乱されているが、本来の形状をそこなうほどのことはない。底面は平坦である。壁は直線的に立ち上がるが、北から南にかけてやや開き気味である。壁と底面の境は割合に明瞭である。覆土はローム土・ローム粒を混入する上層の黒褐色土（1～3層）と壁ぎわ・底部上の黄褐色土（4・5層）からなる。全体的に堅く締まっている。遺物の出土は認められなかった。

S K 900土坑（図面5、図版10）

調査区の東側に位置し、S I 360と重複している。覆土の切り合い関係から本土坑があきらかに後出する。底面は平坦である。掘り込みの様相は、短辺側の壁が直線的であるのに対して、長辺側は僅かに湾曲して立ち上がっている。また下部ほど湾曲の度合いは強い。壁の下端は丸味があるが、底部との境は明瞭である。覆土は壁ぎわの壁体崩落土を除くといずれも水平堆積をなしている。覆土は上層の黒褐色土（1・2層）、ローム土・ローム粒を含む黄褐色土からなる中層（3層）、そして底面上のローム粒を多包した下層（4層）の三層に大別される。全体的にローム粒が散在し、下層ほど顕著である。本土坑からも遺物の出土は認められなかったが、炭化物が若干検出された。

S K 901土坑（図面5、図版11）

調査区の中央やや東側に位置し、S K 899土坑の西1mにある。S K 899土坑と同じく北側に攪乱を受けているが、本来の形状はほぼ保たれているといえる。また南側にある小穴を切っている。底面は狭小で、湾曲している。壁は二段に立ち上がっているが、西側を除くと段はあまり明瞭ではない。底面は狭小なため断面はいびつなスリパチ状を呈している。また短径方向の立ち上がりは若干丸味をもっている。覆土は基本的に、壁ぎわの黄褐色土（2・3層）と覆土の大半を占める黒褐色土（1・5層）からなり、スコリア粒を多包した4層は後出的な掘り込みに伴う堆積土であると考えられる。しかしこの掘り込みは土坑の本来の形状を崩すまでにはいたっていない。

本土坑からも遺物の出土は認められなかった。

S K 902土坑 (図面 5、図版12)

調査区の中央僅か南西側に位置する。底面は平坦である。壁は西側長辺を除くといずれも垂直的に立ち上がっているが、南西側の一部では底部がオーバーハングしている。また西側長辺では開口部より54cmまでは逆ハ字状を呈して、そののち垂直に落ちている。壁下端は幾分丸味があるが、底面との境は明確に捉えられる。覆土は壁ぎわの崩落土(10~11層)を除くと基本的には水平堆積をなし、それらは三層に大別することができる。まず底面上のローム土・ローム粒を含む(暗)黄褐色土(7~9層)、細ローム粒を含む暗黄褐色土(5・6層)、上層の黒褐色土(1~4層)である。黒褐色土層には茶褐色土ブロックが点在しているが、ローム土の混入は認められなかった。遺物の出土はなかったが、炭化物が検出されている。

S K 903土坑 (図面 5、図版12)

調査区の中央やや西側に位置し、S K 902土坑の3.5m西側にある。底面は軽く湾曲するが、いびつである。壁の立ち上がりは起伏しており、底面との境は不明瞭である。短径方向のほうが立ち上がりはゆるやかである。覆土はいずれも暗黄褐色土であるが、壁ぎわ・底面上にある下層(3層)と、ローム土を混入した上層(1・2層)とに大別できる。出土遺物はなかった。

S K 1043土坑 (図面 5、図版13・14)

調査区の北端に位置している。このあたりには本土坑を含め4基の同形態の土坑が認められる。開口部、底部ともに円形を呈しており、かなりの部分で底面が開口部よりも広がっている。底面は平坦である。掘り込みの様相は、開口部より32cmまでは僅かにすぼまりながら落ちている。がそののち開き、底面より20cmほどのところで東西98cm、南北95cmを測り、上面幅を上回る。そして幾分丸味をもって底面にいたる。覆土は壁ぎわの1層を除くといずれも水平堆積をなしている。また1層は壁の崩れである。水平堆積層はいずれも黒褐色土であるが、幾分明暗の差はある。また包含粒子の在り方や締まり具合などから2層(スコリア粒を多包する)、3~7層(粒子量少なく、締まり弱い)、8・9層(締まり良い)に大別することができる。土器片3点(Ⅲ群-1、3、8類各1点)、礫3点が出土した。

S K 1044土坑 (図面 6、図版14・15)

調査区の北端に位置し、S K 1043土坑の60cm東側にある。北側がP 11と重複しているが、本来

の形態を損なうまでにはいたっていない。また北東側で僅かに張り出すが、極めて浅いものである。底面は僅かに湾曲しているものの、ほとんど平坦である。壁は開口部に向かって直線的に立ち上がっている。また底面より20cmほどまでは、壁は割合に垂直的である。覆土は、壁の崩落土である1・9層を除くと、三層に大別できる。まず底面上の8層（締まり良い）、その上の5～7層（包含粒子量少ない、締まり弱い、暗味強い色調である）、そして上部の2～4層である。この上層部のうち、2層と3層は土質が似ており、包含粒子量により分層されたが、同一層の部分的な差異である可能性がある。よって本土坑でも基本的に覆土は水平堆積しているといえる。出土遺物は割合に多く、土器片9点（Ⅱ群1点、Ⅲ群-3類1点、Ⅲ群-9類7点）、礫9点が検出された。

S K 1045土坑（図面6、図版15）

調査区の最北に位置し、調査範囲ラインの僅か20cm内側にある。またS K 1043土坑とはP11をはさんで対しており、南西側の一部分がP11によって切られている。しかし形状の把握などにはほとんど影響しない程度のものである。底面は平坦であるが、南～西側にむかってすこし高くなる。壁は、開口部より約50cmは逆ハ字状にすぼまりながら落ちていくが、そののち底面までは垂直的である。壁と底面との境は比較的明瞭である。覆土は、壁の崩れである1層を除くと水平堆積をなしている。いずれも黒褐色土を基調としているが、包含粒子量が多く締まりの良い上層（2～4層）、締まりにやや欠ける中層（5・6層）、そしてやや明るい色調を呈し、粒子量が多く、締まりも良い下層（7・8層）に大別することができる。そしてまた、上層は覆土の約半分を占めている。全体としてローム粒・スコリア粒を含んだ覆土であるといえる。遺物としては礫9点が検出された。

S K 1046土坑（図面6、図版16）

本土坑も調査区の最北に位置し、S K 1045土坑の東1.3mにある。底面は幾分湾曲している。壁は直線的に立ち上がるが、東から南にかけての立ち上がりはややゆるやかとなり、上面は開き気味となる。なお底面が湾曲しているために壁との境は不明瞭である。覆土は、壁ぎわの崩落土である1層を除くといずれも水平堆積あるいはそれに近い状態を示している。それらは黒褐色土を基調としているが、包含粒子量が多く締まりの良い上層（2～4層）、締まりに若干欠ける中層（5～7層）、そして粒子量の少ない下層（8層）に大別することができる。全体的に粘性のある土質である。出土遺物はやや多く、土器片14点（Ⅲ群-3類3点、Ⅲ群-6類1点、Ⅲ群-7類1点、Ⅲ群-9類8点、Ⅳ群1点）、礫16点を数える。

S K 1047土坑 (図面 6、図版17)

調査区の中央北側に位置し、S K 1046土坑の南 5 mにある。底面は平坦である。壁は直線的に立ち上がり、しかも西側を除くと垂直的である。一方、東半では開口部より 38cm以下でオーバーハングしている。底面と壁との境は割合に明瞭である。本土坑では壁の崩落土はみられない。覆土は互層に近い状況を示しているが、基本的には水平堆積であるといえる。覆土は四層に大別できる。まず粘性を欠く上層 (1・2層)、粒子量がやや多く、黄色味のある色調を呈する中層上半 (3～5層)、カーボン粒を含む中層下半 (6層)、そしてローム粒を多包し、締まりの良い下層 (7・8層) となる。このように上層を除くと包含粒子量が多い。また下半にはカーボン粒が認められるが、カーボン粒が認められるのは本土坑だけである。

S K 1048土坑 (図面 7、図版17・18)

調査区の北東側に位置する。底面は平坦である。掘り込みの様相は、短辺側では垂直に落ちているのに対して、長辺側では開口部より 40cmまでは逆ハ字状にかるく開き、それ以下では垂直的に落ちている。底面と壁との境は明瞭である。覆土は、壁の崩落土である 4層を除くと基本的には水平堆積をなす四層に大別できる。すなわち、包含粒子量の少ない上層 (1層)、スコリア粒がやや目立つ中層上半 (2・3層)、包含粒子量が多い中層下半 (5～7層、但し部分により粒子別の多少差はある)、そして粘性のある下層 (8層) となる。全体的に締まりの良い土質である。遺物の出土は認められなかった。

S K 1049土坑 (図面 7、図版18)

調査区の南端中央部に位置する。西辺中程が僅かに張り出しているが、ほぼ長円形を呈している。底面は平坦である。西側の張り出した部分を除くと壁は逆ハ字状に直線的に落ちている。なお西側以外では、開口部より 30cmまでは立ち上がりの傾斜が強い。一方、西側では逆に上部のほうが開き気味に立ち上がり、下部が垂直的に落ちている。壁と底面との境は明瞭であるが、ただ西側のみは丸味があり幾分わかりづらくなっている。覆土は、壁ぎわに壁体の崩落土が堆積しているが、これを除くと水平堆積する四層に大別することができる。まず包含粒子量のやや少ない上層 (1・2層) がある。この上層土は包含粒子量や締まりの点で異なる二層からなっているが、この違いは切断面の部分差であり、堆積状況からは基本的に同一層であると考えられる。次いでローム土を僅かに含む中層上半 (3層)、包含粒子量の多い中層下半 (4・5層)、そして粒子量が少なくなる下層 (6～8層) となる。遺物の出土は認められなかった。

(3) 炉 穴

今次の調査において炉穴が1個発見された。また、北方の恋ヶ窪南遺跡でも1個発見されている。本調査地区発見の炉穴をP187と遺構番号を冠した。

P187炉穴（図面7、図版19）

調査区のほぼ中央に位置する。規模は、上面長径144cm、短径77cm、下面長径32cm、短径22cmを測る。長軸を北西－南東に向ける長円形を呈している。焼土は小穴全体にみられるのではなく、北側の一部分にかたまっている。すなわち、小穴の一段低くなった部分に焼土があり、その広がり長径62cm、短径47cmを測る。焼土域の底面は開口部より26cmを測るが、非焼土域の深さは11cmほどである。いま述べたように、小穴は二段に掘り込まれているが、覆土の様子が上段と下段とで明らかに分かれることから、あるいは上段は後出的な掘り込みかもしれない。下段の掘り込みをみると、壁は内彎しながら立ち上がっている。底面は南側に高い。壁と底面との境は不明瞭である。覆土は、包含粒子の少ない黒褐色土よりなる上層（1・2層）と焼土を含む下層（3～5層）とに分かれる。下層は全体的に焼土や炭化物を含むが中間の4層で最も顕著である。焼土は割合に締まっており、散在的な分布状態とは異なる。出土遺物としては礫2点が認められたにすぎない。

(4) 小 穴

本調査地区において、226個の小穴を検出した。検出面および覆土の土質より、いずれも縄文時代のもものと判断したが、具体的な時期については不明である。

遺物を出土したものは7個にすぎない。しかもその内4個は礫のみの出土であり、土器片を出土した3個には条痕文系土器がみられた（註1）が、いずれも小破片であり、かつ量的にも乏しい。このように土器を出土した小穴であっても時期比定の根拠は弱く、ましてや土器の出土をみないものについては全く手掛かりを欠く。しかしまた、住居跡や土坑、炉穴など条痕文系土器期に比定される遺構が調査地区全体に広がっていることから、小穴のあるもの、または多くのものが当該期に属するかも知れないという推測ができる。

規模についてみると、短径の最小15cm（最大174cm）、長径の最大218cm（最小18cm）、深さは最小8cmから最大70cmを測った。だが各分布の中心は、短径では20～40cm、長径では25～45cm、深さでは10～25cmにある（第6・7表）。

長・短径比（短径÷長径）をみると、最小41パーセントを測るが、分布の中心は66パーセント～100パーセントの範囲にある。なおより細かく示すと、50パーセント以下のものは3個、51～65パーセント22個、66～80パーセント91個、81～99パーセント124個、100パーセント8個を数え、

円形に近いものが割合に多い（第8表）。

断面形は大きく7形態が考えられ、不整形を加えて8種類に分けることができる（註2）。そのうちa形39個（15.6%）、b形51個（20.4%）、c形36個（14.4%）、d形（12.4%）、e形5個（2.0%）、f形46個（18.4%）、g形30個（12.0%）および不整形12個（4.8%）となる。このようにb形がやや多いといえるが、b形と不整形を除くと各形態とも大差のない個数である。なおa形には円形に近いものが多く、d形やf形には長円形のものが多い。

覆土の様相については、基本的に①ローム土が堆積したのち黒褐色土が堆積する、②黒褐色土の単一堆積層、③ローム土の再堆積単一層に分けることができる。その各々の比率は、①59.0パーセント、②17.4パーセント、③23.6パーセントとなり、①が過半数を占めている。これは、小穴の掘削→壁の崩れ→浮遊した腐蝕土の堆積という順序が本調査地区では一般的であり、小穴内への堆積にはやや時間があつたものと考えられる。

分布についてみると、調査地区全体に散在しているが、東側および中央部には少ない。一方、やや密集して認められるのは北側中央以西（僧寺中軸線東112m以西）および南側中央以西（同109m以西）である。が、そうした小穴群も建物跡の構成素となるような配列は認めがたい。また、そのように集中した北側ではS K 1043～1047の袋状土坑が、南側ではS K 902、1049土坑が位置している。だがこうした土坑と結びついて何らかの機能を果たしていたものかは判然としない。ただし、S K 902、1048土坑などが陥穴であるとすれば、そこに獲物を導く囲いのようなものが存在し、小穴をその柱痕とみることができるかも知れない（それを示す状況的証拠はなく、全くの想像にすぎないが）。

以上小穴にかかわる要素（遺物、大きさ、形状、覆土、分布）についてみたが、今回はそれらをクロスさせ、有意性を抽出するまでには至らなかった。だが、こうした小穴に対する追及を無意味なものとするのではなく、第一に柵列跡などの認定しづらい構造物の解明への手掛かりを得るために、そして第二には大小を問わず遺構として認定されたものである、などという点から基本的に成果を提示する必要性があろう。そしてこうした作業は常に積み重ねられていかなければならないのである。

（註1）土器を出土した小穴は、P10、P64、P78であった。

（註2）小穴の断面形は以下のように分類した。

a形＝開口部幅に比して、深さのある砲頭形を呈すもの。

b形＝断面U字形を呈するもののうち、浅いもの。

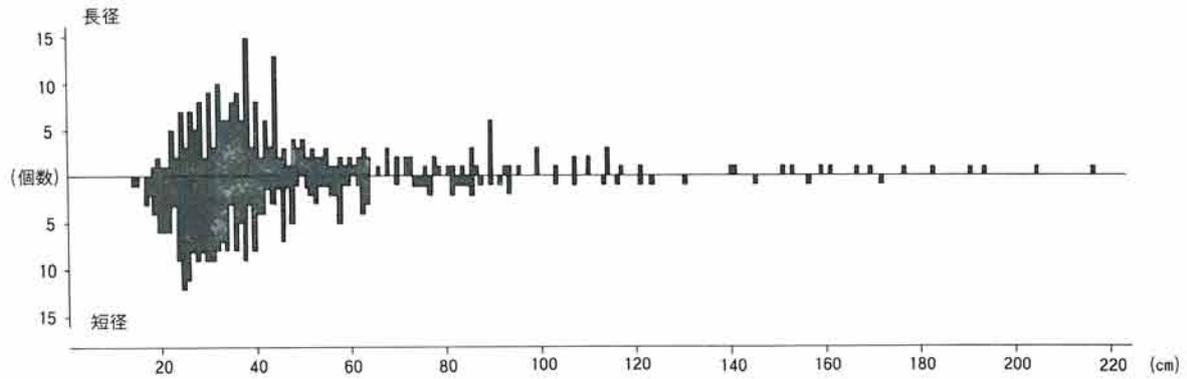
c形＝断面U字形を呈するもののうち、深いもの。

d形＝壁が比較的垂直に立ち上がり深さのある、鍋形を呈するもの。

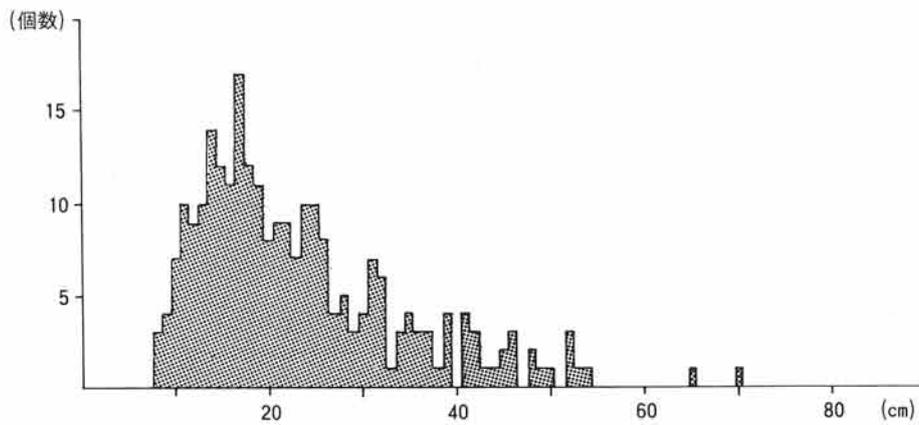
e 形=開口部幅に比して底面の狭い、スリバチ形を呈するもの。

f 形=壁が比較的垂直に立ち上がるが浅い、皿形を呈するもの。

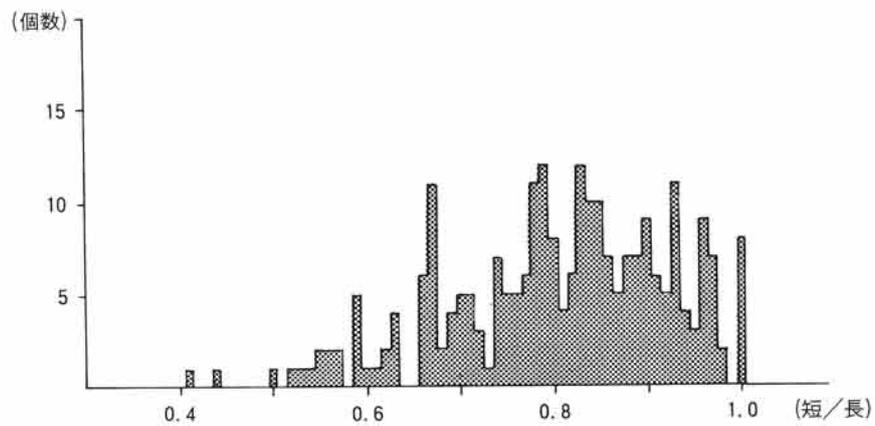
g 形=開口部幅が狭く、かつ浅い、碗状を呈するもの。



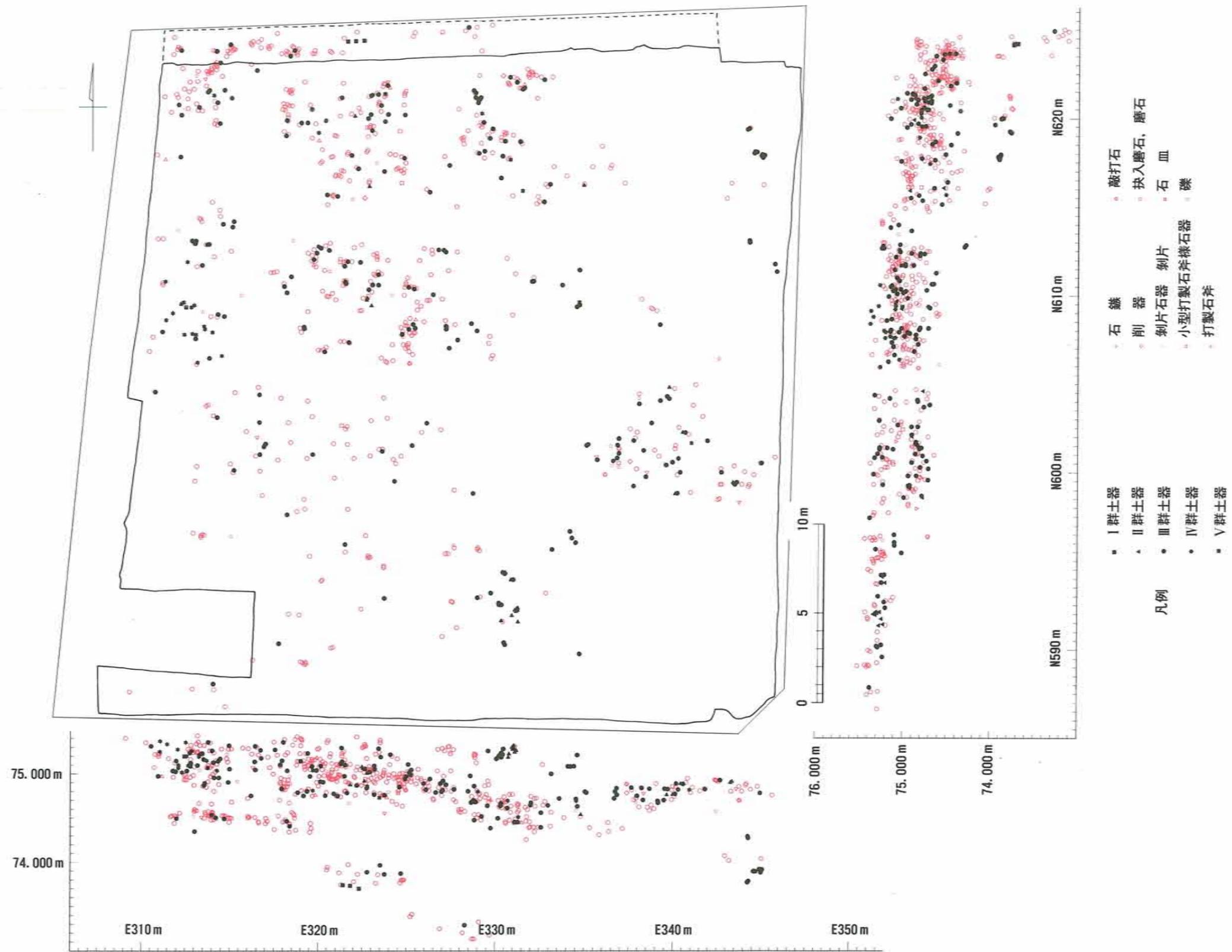
第6表 小穴規模分布① (長径, 短径)



第7表 小穴規模分布② (深さ)



第8表 小穴長・短径比分布



第 7 図 調査地区遺物分布図

2. 遺物包含層の発掘

包含層中の遺物は検出地点を確認して取り上げることに努めたが、出土遺物の全てについて行うことはできなかった。がしかし、過半数のものについては検出地点を明らかにすることができ（第7図）、不完全とはいえ大体の傾向は把握できよう（註1）。それによらず、土器、石器および礫とも調査地区北西部分にやや集中しているといえる（註2）。

土器についてみると、北西部分と南東部分に集まっているが、南西隅には分布は認められない。また遺構との関係でみると、住居跡や後述するローa類土坑（所謂陥穴）付近には少なく、イーa類土坑（所謂貯蔵穴）がまとまっている付近に多く分布していることがわかる。さらにみると、Ⅱ群土器は全体的に散在しているが、N590、E320の地点に僅かながら集まっている。Ⅲ群土器は遺物分布域全体に広がっている。またⅣ群土器はN605、E310の付近にまとまる。

垂直分布では最大約2.0mの幅があるが、そこには落ち込み中の遺物も含まれているので、概して1.0mほどの分布幅といえよう。また、地形が北東方向に傾斜しているので、土器も北および東方向に下降して分布している。

石器、礫においては、北西部分に集中しているが、概して西半に多いということが出来る。また土器と同様調査地区南西隅には分布はみられなかった。なお石器の各器種にあつては、特にまとまっているようなものは認められない。

垂直分布においては、土器の場合と同じく2.0mの幅がみられるが、やはり1.0mの間に集中している。また地形に沿って分布の傾斜がみられる点も土器の場合と同じである。

このように、土器や石器、礫いずれもが約1.0mの堆積幅中に包含され、しかも後に示すようにこうした遺物の大半がほぼ同時期のものであることは、堆積層の形成が比較的短時間に進んだものと考えられる（註3）。

また平面分布の様子からすると、遺物のまとまりが調査地区西半、ことに北側にみられることは、北西側に人の行動範囲の主体があつたことが予測されよう。

（註1）土器ではⅠ群3点、Ⅱ群21点、Ⅲ群205点、Ⅳ群28点、Ⅴ群1点、石器では石鏃4点、削器2点、剥片石器・剥片24点、小型打製石斧様石器1点、打製石斧9点、敲打石1点、抉入磨石・磨石8点、石皿7点、および礫557点である。

（註2）第7図は、第288次調査で実施したトータル・ステーションによる遺物の取り上げに加え、第249次調査で得た遺物分布状態のデータを入力して図化したものである。したがって本調査地区の検出地点を確認された包含層中遺物を網羅したことになる。

（註3）遺物接合事例を提示しなかったが、やはり遺物分布幅内での接合事例は少ないながらも認められ、しかもその幅の上・下端での事例も存在している。

3. 出土遺物

	土 器					石 器											
	I群	II群	III群	IV群	V群	I類	II類	III類	IV類	V類	VI類	VII類	VIII類	IX類	フレーク	チップ	礫
MK-249	4	7	216	13	1	3	2	0	0	5	0	3	2	4	12	5	565
MK-288	0	18	274	37	1	1	0	2	3	6	1	2	9	5	25	2	649
計	4	25	490	50	2	4	2	0	3	11	1	5	11	9	37	7	1214

第9表 発見遺物一覧

(1) 土器 (図面8~12、図版21~25)

調査により出土した土器の総数は471点である(第9表)。この内、住居跡や土坑といった遺構に伴うものは極く一部であった。そこで、ここでは調査地区遺物包含層中出土の土器と一括して取り扱うことにする。

出土土器は大きくは縄文早期に属するものと中期に属するものに分けられ、これを以下のように分類した。

第I群 縄文早期前半燃糸文系土器

第II群 縄文早期前半沈線文系土器

第III群 縄文早期後半から終末の土器

第IV群 縄文中期初頭五領ケ台式土器

第V群 縄文中期中葉勝坂式土器

このように分類された出土土器の内訳をみると、第III群の早期後半から終末に属する貝殻条痕文系土器群が数量的にややまとまりをみせ、次いで第IV群が50点ほどを数えるが、第III群以外は少量に留まっている。先述のように分布的には西半にやや多いとはいえ、調査地区全体に広がる。またII・IV群を除くとまとまりをみせることはない。

第I群 縄文早期前半燃糸文系土器 (4~6)

燃糸文を全面に施文した土器である。3点とも同一個体の可能性が高い。燃糸文は節が細かいRの燃糸で、軸に対し密に巻かれており条間も狭い。胎土には小石や砂粒を含み、淡褐色を呈する。内面の整形は平滑である。

第II群 縄文早期前半沈線文系土器 (7~17)

竹管または棒状工具による沈線文や貝殻腹縁文を施した土器である。7は口縁下に竹管または棒状工具による沈線文が引かれ、その下部に太い竹管状工具による刺突文が加えられている。刺突文の下部にも細い沈線が看取される。8~10は二本一組の細沈線で区画を行い、その内に貝殻

腹縁文を施した土器である。細沈線は横方向が多く、斜めにも引かれる。9はS I 360住居跡出土である。11は細沈線間に幅広で浅い沈線をもつ。丸味をおびた沈線である。8～11は胎土に細砂粒を少量含み、淡褐色を呈する。器内面は平滑に整形されるが、表面は内面ほど丁寧ではない。12～14は同一個体片で、太沈線と細沈線が組み合わされて施文されている。沈線は横方向に引かれるが、斜め方向の沈線も認められる。概して太沈線が深く、細沈線が浅い。12は口縁下に太沈線が斜めに引かれている。口唇部には矢羽根状の刺突文が加えられている。15～17も同一個体片と考えられる。細く浅い沈線を横方向に引き、その下部に太沈線を鋸歯状に引いている。太沈線に沿って竹管状工具による刺突文が縦列に施されている。12～18は胎土に白色砂粒を少量含み、赤褐色を呈するやや厚手の土器である。

第Ⅲ群 縄文早期後半から終末の土器（1～3、18～70）

第Ⅲ群土器は、出土土器の中では量的にまとまりがある。器面に貝殻条痕文を施した土器を主体とするが、仔細にみると幾つかに分けることができる。

a類 口唇部に刺突文をもつ土器（18～21）

口縁部破片4点で口縁が直立あるいは弱く外反する土器である。器面には文様が認められず、横方向の擦痕状整形痕が僅かに看取されるのみである。刺突文は平坦な口唇部に篋状工具によって左から右へ連続的に加えられている。21は他例より太い工具を用い、口唇部を刻むように斜め方向に加えられている。刺突方向も右から左方向で他例と異なる。いずれも胎土には細砂粒と繊維を少量含有する。

b類 貝殻腹縁文をもつ土器（1～3、22～25）

1は口縁より胴中程までの破片で、想定復原図を作成した。口縁は21cm位で、やや丸底状の尖底となる深鉢である。現存高は20.5cmを測る。平縁の口縁下に貝殻条痕による斜格子目文が施され、その下に貝殻腹縁による連続山形文が2列表出される。口縁下の斜格子目文と連続山形文との間はきれいに区切られており、口縁下の条痕文施文後、連続山形文施文範囲を丁寧に整形してから貝殻腹縁による連続山形文を表出していることがわかる。胴部にも元来は貝殻腹縁文が施されていたが磨り消されており、胴部上半部に浅い痕跡が認められるのみとなっている。なお、内面には横位あるいは斜位の貝殻条痕文が口縁より胴上半にかけて施されている。口唇部は平坦であるが、口唇端は内外ともやや張りだし隆帯状になっている。口唇上には貝殻条痕文が施され、端部には貝殻腹縁文が押圧されている。茶褐色を呈し、少量の繊維を混入する。2は1より小振りの土器で、同様に想定復原図で表した。推定口径15cm、現存高10cmを測る。口縁は平縁で、小さな山形突起が付く。口縁に沿って一本の隆帯が廻り、上部無文帯と下部文様帯とを画している。

口縁に付く突起より山形に伸びる隆帯も横位に廻る隆帯に連なっている。いずれの隆帯にも貝殻腹縁が押圧されている。横位に廻る隆帯の下は1と同様の文様帯が表出されている。すなわち、貝殻条痕による斜格子目文と貝殻腹縁による連続山形文である。条痕文施文後器面を丁寧に整えながら連続山形文を施している点も1と同様である。但し、2の土器は連続山形文に2本の横走る貝殻腹縁文も併せて施しており、菱目状のモチーフになっている。口唇部も1と同様で、端部が隆帯状に張り出し貝殻腹縁の押圧を加えている。口唇上には貝殻条痕文が施されている。器内面は横位の貝殻条痕文を施した後、磨り消しを行っている。口縁内面は丁寧に磨り消されているが、胴部には条痕文の跡が看取される。22、23も2と同一個体。茶褐色の色調で砂粒をやや多く含む。24、25は貝殻腹縁文が表出された土器である。3は本調査地区ではなく、近接する第185次調査出土の土器である。推定口縁25cm、現存高20cmで、1や2よりも大きい深鉢である。口縁下に貝殻条痕による斜格子目文を表出するが、1、2のような連続山形文は施文されていない。条痕文はまず右下がりに施文し、その後左下がりに適当な間隔をもたせて施文している。器内面には斜め方向の貝殻条痕文が施されているが、口縁部内面では磨り消されている。口唇部には刻目が付けられている。

c類 隆帯をもつ土器 (26・27)

26は低平な隆帯を貼付し、隆帯上には押圧文が付けられている。この押圧文は絡条体圧痕文かもしれないが断定はできない。胎土に石英粒を多く含み繊維も混入され脆弱な土器である。27は厚手で焼成のよい土器。低い隆帯が付き、その上に半截竹管状工具で刺突を行っている。胎土には少量の繊維を含む。

d類 貝殻条痕文をもつ土器 (28~47)

器面に貝殻条痕文を施した土器群である。28~35は器面外面に条痕文をもつ土器。28の口縁部では、器外面に左下がりの条痕文が密に施され、内面は横方向になっている。31の土器は幅が広く粗い条痕文である。全体としては器外面では斜め方向、内面では横方向の条痕文が多い。胎土には少量の繊維を含むが、一見では混入しているか否か判然としないものがある。36は斜格子文が表出されるものでb類に属しよう。37は細かい条痕文が途切れながら施文される。胎土には比較的多くの繊維を混入する。38~43も条痕文が施される土器であるが、器面の荒れなどにより文様が不明瞭である。39、41は擦痕状となっている。42は器外面には太く間隔のあいた条痕文が施され、内面は横方向の擦痕が認められる。44~47は器外面が無文で、内面に条痕文をもつ土器である。44は1と同一個体と思われる。外面の条痕文は磨り消され平滑であるのに対し、内面には横方向の条痕文が看取される。45~47は厚手の土器で、内面に条痕文が施される。器面には凹凸があり、胎土には繊維を含む。褐色を呈する。34はS K1043土坑、37がS K1044土坑出土。

e類 無文の土器 (48~63)

概して厚手の土器群で、胎土には繊維を含む。48~53は器面調整が粗く、凹凸があり擦痕も認められる。胎土の繊維もやや多い。56~59、63は器面調整が丁寧であり、平滑な器面となっている。これらの土器は淡褐色や赤褐色の色調をなし、前者の茶褐色とは顔つきが若干異なる。

f類 その他 (64~70)

64、65は非常に薄手の土器である。64は平滑な器面に縄文が弱く施文されている。65は無文で僅かに擦痕が認められる。64は褐色、65は茶褐色を呈する。薄手の土器はこの2点のみである。66は弱く外反する口縁部破片で、無文である。胎土に繊維を含み器面には凹凸が認められる。他の出土土器とは異なった土器である。67~70は底部または底部近くの破片である。尖底あるいは丸底状となる。

第Ⅳ群 縄文中期初頭五領ケ台式土器 (71~84)

五領ケ台式に属し、地文に縄文をもつ土器である。71~74は同一個体。半截竹管による2本一組の沈線が口縁に沿って廻り、胴部にも同様の沈線が横位あるいは縦位に引かれている。地文として縄文が施文されているが、原体は不明。74は曲線を描くようである。71の口唇部には刻みが加えられている。胎土には白色砂粒を多く含み、焼成はあまりよくない。76、77は口縁部内面および口唇部にも縄文が施文される土器である。2点ともLRの縄文を横位に回転施文している。口縁は平坦である。器形は浅鉢状になるかも知れない。78~84は地文として縄文を施文した土器。器面全体に施文されるのであろうが、78、80のようにまばらに施文されるものもある。84は底部片で、該期特有に底部がやや張り出す。底部近くまで縄文が施文される。これら第Ⅳ群土器の施された縄文のうち、原体が判明したものはLRのみである。但し、78~84には同一個体片も含まれていよう。

第Ⅴ群 縄文中期中葉勝坂式土器 (85、86)

85は深鉢形土器の胴部片である。隆帯および沈線による文様表出がなされているが、全体の構成は明らかでない。隆帯上には矢羽根状の刻みが付けられている。胎土には雲母片を多く含む。86は浅鉢の破片である。

(2) 石器 (図面13~16、図版26~29)

石器については、図示し得た38点の内、1点を除いていずれも遺物包含層中で検出されたものである。したがってここでは出土地点にかかわらず、器種ごとに説明を加えることにする。

検出された石器はおよそ9類に分けることができた(第9表)。

I類 石鏃

II類 削器

a 刃部が割合に長いもの

b 刃部が短いもの

III類 剥片石器

IV類 小型打製石斧様石器

V類 打製石斧

a 短冊形

b 撥形

VI類 敲打石

VII類 抉入磨石

VIII類 磨石

IX類 石皿

a 僅かながら窪みのみられるもの

b 窪みのみられないもの

石器それぞれの大きさや重量、遺存状態、石材などについては表記(第10表)することにして、各石器の特徴を以下に記していく。

〈I類 石鏃〉

1は先端部を僅かに欠いているのを除けば完形である。大きさの割りには厚みがある。素材の頂部を整えて厚さを調整している。裏面のほとんどは剥離された状態のままであるが、ただ右側辺には細部調整が密に加えられており、側辺が鋭く作り出されている。基部は僅かに抉り込まれている。

2は表裏面とも細剥離が丁寧になされてはいるが、全体にはややいびつな形状となっている。側辺には細部調整が密に施され、直線的な仕上げが意識されている。基部は若干抉り込まれている。

3は表裏面とも丁寧に剥離作業がなされ、整った形に仕上げられている。二等辺をなす両側辺はともに僅かに彎曲し、先端は広鋒状となっている。身の断面は紡錘形を呈している。基部は明瞭に抉り込まれている。全体に摩滅している。

4は小剥片を利用して作られたものである。表面には細剥離が若干施され、厚みが整えられている。裏面には、側辺を除いて、主だった剥離作業は加えられていない。両側辺とも丁寧な細部

図面	図版	種類	最大長	最大幅	最大厚	重量	遺存状態	石材	備考
13-1	26-1	I	1.1	1.5	0.6	1.1	完形	黒曜石	
13-2	26-2	I	1.9	1.6	0.4	0.7	完形	黒曜石	
13-3	26-3	I	0.4	1.7	0.6	1.3	完形	黒曜石	
13-4	26-4	I	1.6	1.2	0.3	0.3	完形	黒曜石	
13-5	26-5	II-a	3.7	3.5	0.7	10.0	完形	チャート	
13-6	26-6	II-b	4.1	3.0	1.3	12.0	完形	チャート	
13-7	26-7	III	4.9	7.2	1.4	54.0	完形	頁岩	転用品か？
13-8	26-8	III	10.1	7.7	1.4	131.0	完形	頁岩	
13-9	26-9	IV	7.0	5.3	1.6	62.0	完形	頁岩	S K1046覆土中
13-10	26-10	IV	6.1	5.4	1.5	44.0	完形	頁岩	転用品
13-11	26-11	IV	7.2	5.5	2.3	99.0	完形	砂岩	未製品か？
13-12	26-12	V-a	16.1	9.3	5.1	920.0	完形	砂岩	
13-13	26-13	V-a	10.0	5.5	2.0	122.0	1/2 欠	粘板岩	
13-14	26-14	V-a	10.7	5.1	1.6	100.0	完形	砂岩	
13-15	27-15	V-a	10.3	4.4	2.6	112.0	完形	砂岩	
14-16	27-16	V-b	12.0	6.4	2.3	178.0	完形	砂岩	
14-17	27-17	V-b	13.6	6.5	2.2	224.0	完形	頁岩	
14-18	27-18	V-b	9.1	5.5	1.4	76.0	完形	頁岩	
14-19	27-19	V-b	13.1	6.7	3.4	205.0	完形	砂岩	未製品
14-20	27-20	V-b	9.5	8.7	2.0	86.0	4/5 欠	砂岩	
14-21	27-21	V-b	3.5	4.1	1.0	14.0	4/5 欠	頁岩	
14-22	27-22	VI	11.5	4.8	2.5	213.0	完形	砂岩	
14-23	27-23	VII	9.1	18.6	2.0	520.0	完形	砂岩	
14-24	28-24	VII	10.3	9.4	3.4	435.0	完形	斑レイ岩	
14-25	28-25	VII	5.0	10.4	2.9	232.0	3/4 欠	斑レイ岩	
15-26	28-26	VII	7.4	12.4	3.8	378.0	1/2 欠	斑レイ岩	
15-27	28-27	VII	9.1	8.3	2.3	217.0	2/3 欠	斑レイ岩	
15-28	28-28	VIII	9.9	8.1	5.2	545.0	1/3 欠	斑レイ岩	
15-29	28-29	VIII	10.7	12.5	4.3	1850.0	完形	斑レイ岩	
15-30	28-30	VIII	9.8	8.1	5.9	560.0	完形	斑レイ岩	
15-31	29-31	VIII	8.6	7.6	3.8	340.0	完形	砂岩	
15-32	29-32	VIII	7.4	7.7	5.5	255.0	1/2 欠	斑レイ岩	
15-33	29-33	VIII	6.1	7.5	2.9	204.0	1/2 欠	砂岩	
16-34	29-34	VIII	1.1	11.9	4.1	500.0	2/3 欠	斑レイ岩	
16-35	29-35	IX-a	12.4	20.1	3.7	1280.0	1/2 欠	斑レイ岩	
16-36	29-36	IX-a	8.5	15.2	2.7	600.0	1/2 欠	斑レイ岩	
16-37	29-37	IX-b	14.6	14.6	5.8	1180.0	1/3 欠	斑レイ岩	
16-38	29-38	IX-b	16.4	15.7	10.2	3530.0	1/2 欠	斑レイ岩	

第10表 石器一覧

調整がなされ、直線的に仕上げられている。平面形は整った二等辺三角形を呈しているが、材の形状のため、裏面側に僅かに彎曲している。基部は若干挟り込まれている。

〈Ⅱ類 削器〉

5は刃部が割合に長いものである。節理剥離した剥片に、さらに剥離作業をおこなって身厚を薄くしている。そして一辺を除いて細部調整を加えることで、刃部を作り出している。細部調整は連続的におこなわれている。図下側では使用による刃潰れが認められる。

6は刃部の短いものである。中央方向への剥離を刃部から左回りに続け、左上端で止めている。さらに刃部となる部位に細部調整を集中して加えている。三方向に突き出た形状となっているが、その最も長い部分を基部とすることにより石七と同様の使用が可能となる。刃部を除くと各端は厚みを持ち、鋭さにも欠けている。

〈Ⅲ類 剥片石器〉

7は打製石斧の基部破片を転用し、それに刃部を付けた剥片石器と考えられる。刃部は本来基部である長辺に沿っておおまかに剥離して端部を尖らせ、そこに若干の細部調整を加えることで作り出されている。刃部から側辺にかけても細調整がなされ、現基部を除いて全体に鋭く作られている。刃部右側では使用による多少の潰れがみられる。

8は剥離作業があまりなされておらず、刃部も明瞭には作り出されていない。したがって未製品の可能性が高い。なお石材は少し軟質である。

〈Ⅳ類 小型打製石斧様石器〉

9は撥形を呈する小型打製石斧様の剥片石器である。表裏面とも丁寧に調整がなされ、ことに側辺および刃部は細調整が密に施されている。刃部は弧状を呈し、また側辺は直線状となっている。裏面より刃部にかけて尖っていくが、刃部は鋭さをやや欠く。基部は小さい。

10は打製石斧の基部を利用したものと考えられる。裏面の剥離面をそのまま利用し、切断部に細部調整を加えることで刃部を作り出している。刃部は割合に鋭くなっている。

11はおおまかな調整がなされているだけで、刃部や側辺には細調整は加えられていない。したがって未製品とみるべきかも知れない。基部左半分には細調整が認められ、基部から刃部方向に調整が進められたことがわかる。撥形の形状が目指されていたものと考えられる。

〈Ⅴ類 打製石斧〉

12はやや大型の短冊形打製石斧である。剥離作業は全体におおまかで、刃部にもそれほど細部調整はなされていない。刃部左側が少し薄くなっているが、全体に肉厚で、重量は全体にかかるようにバランスがとられている。原石面は極めて擦れており、この磨耗状態や形状からすると縦斧として使用された可能性が高い。

13は刃部を欠損した短冊形打製石斧である。側辺の作りは悪く、基部も表面に原石面を残し明瞭には形作られていない。こうしたことから、あるいは製作途中で破損したものかも知れない。但し側辺の細部調整は明瞭に認められる。

14は基部を僅かに欠いている以外は完形の短冊形打製石斧である。刃部は斜めに切れ上がっている。側部は丁寧に形作られている。基部寄りの原石面がわずかに磨耗している。この磨耗は使用時のものと考えられる。

15も短冊形を呈している。表面は風化が進んでいるが、右側辺の割り込みは石材本来の形態によるためと考えられ、短冊形が意識されて製作されたものといえる。刃部は弧状を描く。刃部への調整はあまりなく、鋭さを欠いている。刃部に比して側辺の調整は丁寧である。

16は撥形の打製石斧である。刃部への調整は顕著ではなく、形を整える程度に終わっている。しかし割合に鋭く刃が作られている。剥離作業は比較的大まかになされ、そのままを器面としている。

17も撥形の打製石斧である。右側辺は石材の形状をうまく利用して若干の調整を加える程度であるが、左側辺は表裏面とも丁寧に調整が施されている。また右側辺にむかって身厚が薄くなっているため、細部調整を若干加える程度で刃部を作り出せている。刃部は弧状を描いている。

18は小振りの撥形打製石斧である。刃部および側辺の細部調整は丁寧になされている。刃部は斜めに切れ上がっているが、これは破損のためではなく、本来的にこのような形状が意識されていたものと考えられる。身厚は乏しい。

19は石材に僅かな調整を加えた程度で終わっているものである。刃部は表面側からの細部調整の途中で終わっている。右側辺は大きく2度、左側辺は1度の剥離がなされている以外、調整は認められないが、形は整っている。打製石斧とするには刃部左側の調整が最小限度必要であろうから、未製品と考えたい。

20は打製石斧の基部破片である。現状では、再調整が加えられて転用品とされた痕跡はみられない。この基部幅からするとともに大型の打製石斧であったものと思われる。基部の調整は大まかであるが、形状は整っている。

21も基部の破片資料である。裏面の片側半分は非常に擦れている。細部調整は丁寧におこなわれ、基部は尖り気味に作られている。

〈Ⅵ類 敲打石〉

22は自然礫の一端を敲打面としたもの。剝離作業は一切加えられていない。敲打面の対端にも僅かな傷がみられるが、本品のやや窪んだ形状からすると、上下を逆にすると少し握りづらくなってしまう。

〈Ⅶ類 抉入磨石〉

23は表裏面、側辺ともに擦れて磨耗している。抉入部には刃潰しがなされ、しかも磨耗している。抉入部は対となるもので主要剝離作業が表裏逆となっている。抉入部の磨耗は深部ほど顕著であるが、抉り初めの部分でも擦れており、また剝離面にも磨耗が多少及んでいる。抉入深部はかなりの磨耗で、強い或いは頻繁な擦過が加えられたと考えられる。なお表裏面は横位の磨耗である。石質のきめは細かい。

24は一辺を除く各辺および表裏面が擦れており、ことに表裏面は顕著である。石材が彎曲しているため表面は凸面、裏面は凹面となっている。しかし、それにもかかわらず両者とも磨耗している。このことから、平坦な面に対してだけではなく、彎曲したもの或いは可変性のもも対象であったのではないかと推測される。抉りのない二辺はともに調整剝離面がわからないほどに磨耗している。本品は方形を呈し、他の抉入磨石とは形態を異にしている。

25は全体の4分の1ほどの破片資料である。破損面を除いて全面磨耗しているが、側辺の磨耗は他例に比して小さい。抉入部もあまり磨耗してなく、剝離面はさほど不明瞭ではない。なお短辺側の抉入部よりも長辺側のほうがより擦れている。

26は石材を剝離整形して、側辺を直線的に仕上げ、全体を長方形に作り上げたものである。端部の抉りに比べて側辺の抉入は粗くなされている。端部の抉入部分の磨耗はあまり進んでいないが、側辺および表裏面はよく磨耗しており、剝離面を留めない部分もある。したがって抉入部の磨耗は側辺や表裏面のそれとは異なった性格のものであった可能性も考えられる。

27は3分の1程度の破片資料である。表裏面および側辺は擦れているが、抉入部はあまり磨耗していない。表裏面の磨耗は著しく、抉入部の剝離部分端まで及んでいる。本品は比較的扁平なものである。

〈Ⅷ類 磨石〉

28は両側辺および先端部が均等に擦れているが表裏面の磨耗は認められない。左側辺がかなりの使用を受けたらしく、平坦になっている。先端部の欠損は、その部分に磨耗がみられないことから廃棄時以後のものと思われる。

29は側辺および表面が擦れており、また裏面は多少窪んでいる。但し裏面の窪みは凹石のそれのような顕著なものではない。また側辺部では剥落面においても擦れが認められることから、長期間に亘り使用されたことがうかがわれる。

30は磨耗が部分的にしか認められない。これは、石材が脆く、擦るたびに器面が剥落したためと思われる。なお表裏面の各々一箇所に窪みがあるが、窪みの縁辺が少し磨耗していることから、凹石が転用された可能性がある。

31は側辺が全面的に磨耗している。但し磨耗は極めて狭い範囲である。表面も若干擦れており平坦になっている。本品は焼成を受け黒ずんでいるが、器面が黒光りしていることから、表面の擦れは焼成後かも知れない。

32は石材が脆く、表面は細かく剥落し、また多数の細亀裂が入っている。したがって磨耗部分も明らかにはしがたい。こうした石材の特徴からすると、粗い研ぎに使用されたものと思われる。破損面縁辺は磨耗していないことから、破損後は使用されなかったといえる。なお本品も焼成を受けており、黒ずんでいる。

33は側辺全体および表面が磨耗している。磨耗は著しく、側辺は直線的に、表面は平坦面となっている。表面では側辺近くまで磨耗範囲が延びているが、側辺の磨耗範囲とは直接にはつながっていない。裏面も若干擦れているが明瞭ではない。焼成を受け、僅かに黒ずんでいる。破損後は使用されていないようである。

34は表裏面とも極めて擦れている。破損部分の縁辺は僅かながら磨耗しており、破損後も少しは使用されたものと考えられる。また破損後に焼成を受けている。

〈Ⅸ類 石皿〉

35は表面がよく擦れており、若干窪んでいる。裏面も僅かに磨耗しているが、表面ほど平滑ではない。したがって裏面の磨耗は使用時の台面との摩擦によるためかも知れない。側辺も擦れており、破損後磨石として使用された可能性がある。

36は表面の擦れはさほどでないが、しかし少しながら窪んでいる。また裏面も台面との接触のためか少し擦れている。側辺も若干擦れており、破損後磨石に転用された可能性がある。なお破損後焼成を受けており、全体に黒くなっている。

37の表面は擦れているが、あまり滑らかではなく、窪んでもいない。右側辺は僅かに擦れているが、自然面のままである。一方左側辺は若干剥離が加えられており、形が幾分調整されたものと考えられる。

38は表面がよく磨耗しており、側辺近くまでその範囲は延びている。また裏面も僅かに擦れて

いる。本品は身厚のある石皿である。縁辺が破損しているため原形を推測しがたいが、自然礫をそのまま使用したのではなく、多少の剝離作業が加えられ、形が整えられたものと思われる。なお破損時、或いは破損後に焼成を受けたものであり、全体的に赤化し、破損部面にもススが付着している。

(3) 礫

今次調査において、1281点の礫が出土した。その内56点が遺構内覆土中に混入されていた以外、全て調査地区全域におよぶ遺物包含層中のものである。本調査地区では集石は認められず、したがって検出された礫は一定の構成体をなすものではない。つまり、人為的搬入ののち、廃棄を経て非意図的に拡散したものといえる。

集石が目的意図の最終形態を留めているのに対し、遺物包含層の礫は、礫個々の搬入目的や廃棄過程が異なっていると予測されるので、各礫に認められる特徴は個々間で意味を異にすることになる。つまり、包含層中の礫のいずれもが、同一でないにしろ、集石から散ったものでない限り、定量的な特徴の抽出をおこなっても有意性を表示し得ないかも知れない。しかしまた、集石からの散ったものとともに集石とは異なる用途目的で搬入された礫があるとしても、遺物包含層の礫の特徴を捉えることはそれ自体必要であろうし、また対照資料とすれば集石構成礫の特徴はより鮮明になろう。こうした点に立ち、今次調査で出土した礫の分析をおこないたい。なお集石構成礫との比較を均一化するために第168・190次調査や第200次調査でおこなったのと同じ分析項目を設定し（註1）、各次調査で検出された集石との比較を通じて検討していく（第11表）。

まず破損率をみると、複数の軽破損剥片がほぼ半数を数え、次いで重破損剥片が三分の一を数える。つまり、重・軽破損はともかくとして、剥片が多いことが挙げられる。一方、集石における破損率は各集石でその特徴を異にしており、S S 24・25では破損率の高い資料が、S S 27・28・29では低いものが多いという傾向が認められ、前者には剥片が多く、後者では核が多い。とすれば、今次調査資料は前者の様相に近いようにも見受けられる。だがS S 24・25では破損程度が進行し、原石面をほとんど留めない剥片の多い点が異なっている。

大半のものが焼成を受けているが、表面の焼成が勝るものと、剝離面も同程度に焼けているものが同数近い。集石ではS S 28を除くと剝離面が表面と同程度に焼けているものが大半を占め、またS S 28でも過半数に達している。これは、礫の剝離が被熱前あるいは過程中に生じたのであり、被熱後に剝離したのではないことを示している。それはまた、今次調査資料は、被熱後に剝離したもの、被熱過程で亀裂が生じていたが剝離するまでに至らなかったものの存在が考えられる。しかも非焼成のものが4.6パーセントにすぎないことは、遺物包含層中の礫の多くが集石か

ら飛散したものである可能性を高める。

ススやタール状物質の付着は70.6パーセントのものには認められない。この点はS S 24・25・28にも共通している。また焼成面とスス・タール状物質付着の合致度も僅かに合うという程度のものが71.9パーセントであり、この点も集石と共通している。このように、スス・タール状物質付着に関する点からも、今次調査資料が本来は集石構成礫であったことを窺わせる。

形態については長円形・非扁平のものが過半を占めている。また、S S 24・25もほぼ同じ様相を示しているが、これは破損状況において相似た様相であったことの反映であるとみることができよう。

大きさについて（第12表）は、長径は4.0～5.9cm、短径では3.0～4.9cmにピークをもち、その前後で緩やかに減少する下降曲線を描いている。したがって、量は別にして、大きさにはバラエティーのあることが知られる。こうした分布状況はS S 29にもみられる。しかしS S 27・28では一定の範囲に集まる傾向（S S 27では3.0～8.9cm、S S 28では2.0～5.9cm）がみられ、礫の大きさがある程度選択されていた可能性が考えられる。すなわち、非意図的集まりと意図的集積との違いといえよう。

重量については、大きさと対応することから、そこにみられる傾向は大きさの分布と対応している。しかし、集石に比べ小さいものが多い、あるいは逆に大きいものが多いといったような状況は認められず、集石構成礫の大きさの分布範囲の中に遺物包含層出土礫もあてはまる。

このようにみえてくると、今次調査で出土した遺物包含層中の礫のうち、少なくとも焼成を受けているものは、本来集石を構成していたものが飛散した結果であると考えられる。しかも剝離が主として被熱後に生じたものであるとすれば、集石そのものが機能を失なう以前に廃棄あるいは散ったものといえるのである。

一方、非焼成礫は62点を数えた。そして、その82.0パーセントは重破損剝片である。このことは、意図的に本調査地区に搬入されたというよりも、それらもやはり飛散の結果であるといえよう。しかもかなりの破損を受けていることは、長時間にわたって飛散していた可能性を窺わせる。つまり、当初の搬入原因は知り得ないものの、破損・廃棄の後、長時間流転して埋まっていったものと考えられるのである。

以上のことから、遺物包含層中の礫は、集石から散ったものが大半を占め、それ以外に浮遊状態にあった剝片が加わるというような状況を認めることができよう。但しこうした状況は本調査地区に限ったことであり、地点によっては結果の異なることは十分に予測され、そうした差異を積み重ねていくことで生活行動の様相を予測することも可能となつてこよう。

（註1）礫の属性項目は以下のようになる。

[破損率]

- ① 完形品
- ② 破損品の内、一回性の軽破損で核資料であるもの。
- ③ 破損品の内、一回性の軽破損で剥片資料であるもの。
- ④ 破損品の内、複数回の破損を受けているが、程度は軽く、核資料であるもの。
- ⑤ 破損品の内、複数回の破損を受けているが、程度は軽く、剥片資料であるもの。
- ⑥ 破損品の内、重破損の核資料であるもの。
- ⑦ 破損品の内、重破損の剥片資料であるもの。

[焼成]

- ① 焼成を受けていないもの。
- ② 表面のみ焼成を受けているもの。
- ③ 表面および剥離面にまで焼成が及ぶが、剥離面の焼成は表面ほどではないもの。
- ④ 表面および剥離面にまで焼成が及び、剥離面の焼成は表面程度のもの。

[スス・タール状物質の付着]

- ① 付着の認められないもの。
- ② 表面のみ付着が認められるもの。
- ③ 表面および剥離面まで付着が認められるが、剥離面の付着は表面ほどではないもの。
- ④ 表面および剥離面まで付着が認められ、剥離面の付着は表面程度のもの。

[焼け面とスス・タール状物質の付着との合致度]

- ① ほぼ合致する。
- ② 僅かに合致する。
- ③ 合致せず。

[形態]

- ① 円形を呈し、扁平なもの。
- ② 円形を呈し、非扁平なもの。
- ③ 長円形を呈し、扁平なもの。
- ③ 長円形を呈し、非扁平なもの。

[石材]

- ① 砂岩系
- ② チャート系ほか

破 損 率	第288次	5.3	3.1	2.1	8.6	48.7	0.5	31.0
	SS24	9.2	2.9	2.7	11.2	3.4	75.6	
	SS25	5.7	3.4	3.8	2.3	9.0	-0.9	74.9
	SS27	6.6	10.0	-1.7	31.7	15.0	13.3	21.7
	SS28	27.6	9.5	25.7	17.2	12.4	7.6	20.0
	SS29	8.4	9.9	1.5	21.9	14.1	9.9	34.3
	凡例	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦

焼 成	第288次	4.6	13.8	37.2	44.4
	SS24	2.8	4.1	-0.2	92.9
	SS25	2.3	4.4	-1.6	91.7
	SS27	1.7	6.6	-3.4	88.3
	SS28	12.4	21.9	4.8	60.9
	SS29	-1.0	10.9	-2.3	85.8
	凡例	①	②	③	④

ス ス ・ タ 付 着	第288次	10.6	12.4	40.3	36.7
	SS24	83.0	3.3	8.0	5.7
	SS25	80.9	11.1	5.6	2.4
	SS27	35.0	31.7	33.3	
	SS28	72.4	23.8	2.9	
	SS29	22.0	29.8	31.1	17.1
	凡例	①	②	③	④

焼 成 と ス 合 致 率	第288次	21.2	71.9	6.8
	SS24	40.0	54.5	5.5
	SS25	26.1	69.7	4.2
	SS27	97.4	2.6	
	SS28	3.4	62.1	34.5
	SS29	22.3	51.4	26.3
	凡例	①	②	③

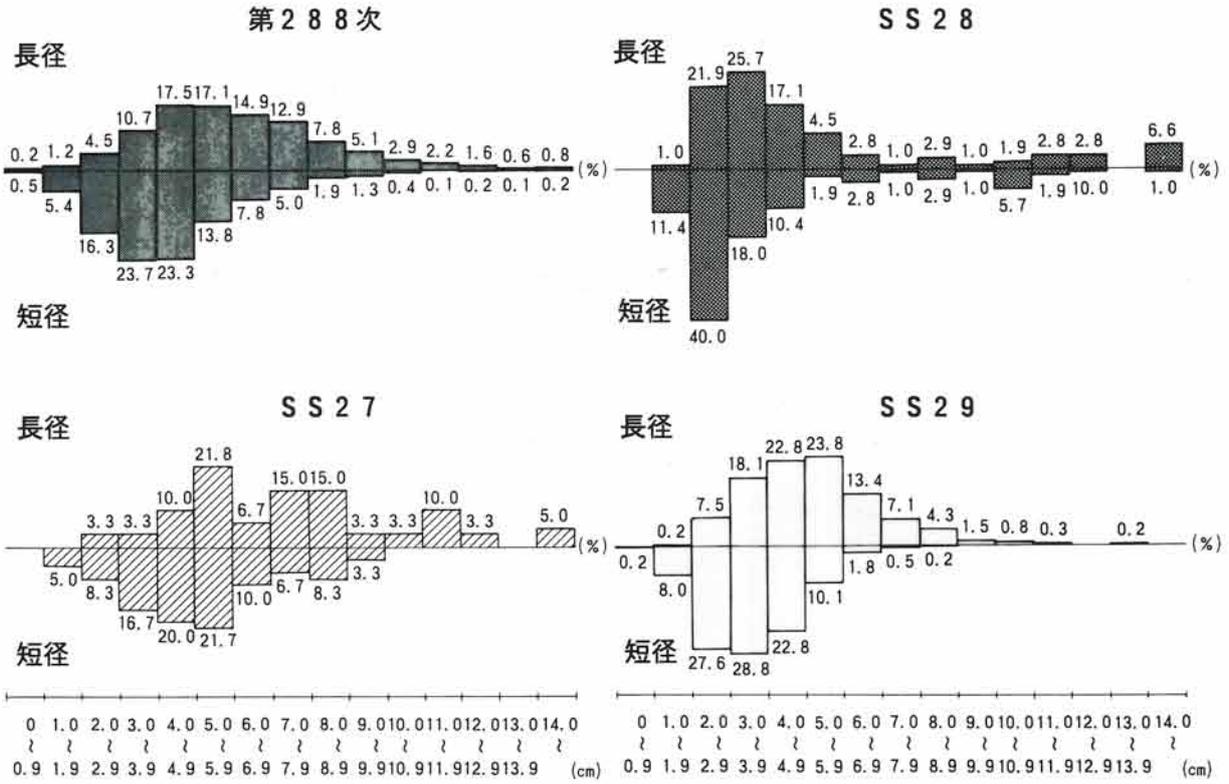
形 態	第288次	3.0	11.8	20.1	65.1
	SS24	6.1	15.5	17.2	61.2
	SS25	3.8	12.9	17.8	65.5
	SS27	15.0	15.0	51.7	18.3
	SS28	16.2	15.2	46.7	21.9
	SS29	12.7	22.0	35.5	28.8
	凡例	①	②	③	④

石 材	第288次	79.5	20.5
	SS24	71.5	28.5
	SS25	72.9	27.1
	SS27	78.3	21.7
	SS28	81.0	19.0
	SS29	93.7	6.3
	凡例	①	②

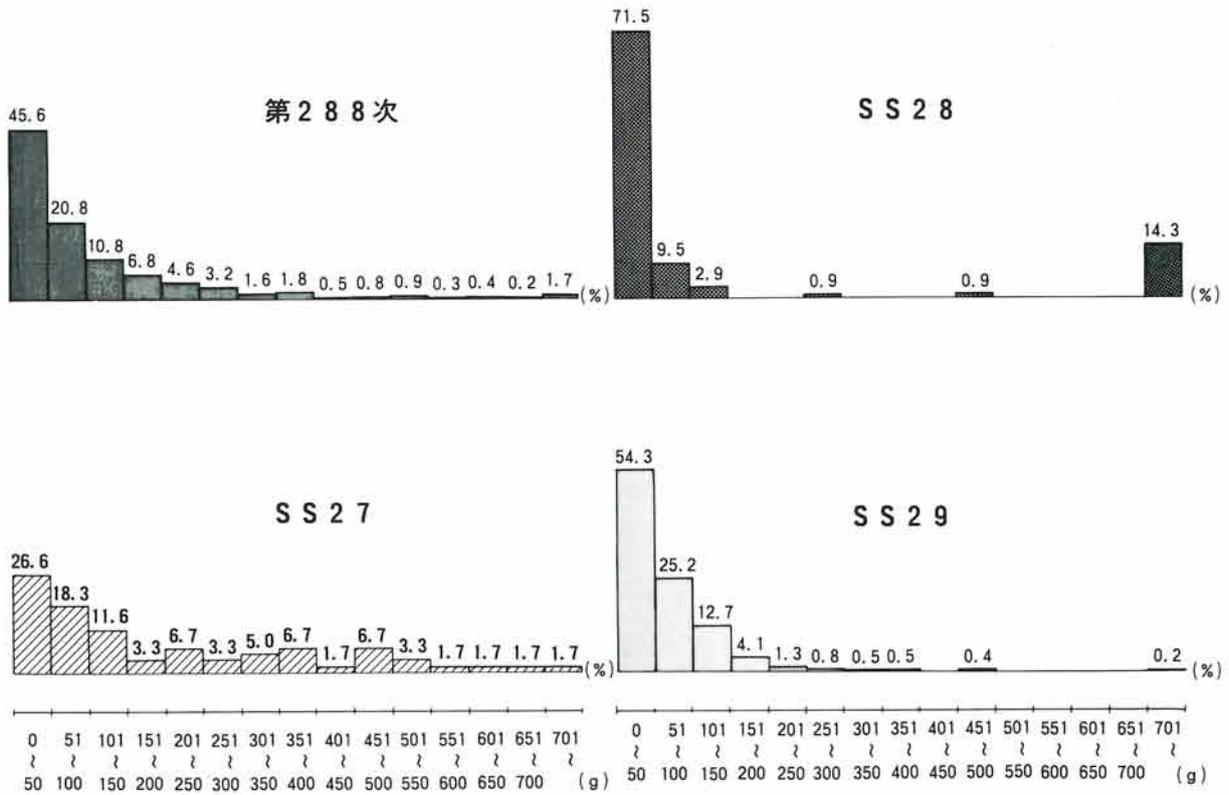
(凡例は註(1)を参照)

第11表 礫項目別属性分析

長径・短径



重量



第12表 碟大きさ分布

4. 小 結

(1) 検出された遺構と遺物

まとめとして改めて記すが、本調査区域において検出された遺構は住居跡2軒、土坑14基、炉穴1個、小穴226個であり、遺物については、土器破片総数471点（撚糸文系4点、沈線文系25点、条痕文系390点、五領ケ台式50点、勝坂式および阿玉台式2点）、石器および剥片総数92点（石鏃4点、削器2点、剥片石器2点、小型打製石斧様石器3点、打製石斧11点、抉入磨石5点、磨石11点、石皿9点、剥片44点）、礫1214点となる。

さて、最も問題となるのは、検出された遺構の時期についてであろう。がしかし、遺構各説でも示したように、時期を決める手掛かりは極めて乏しい。すなわち、土器破片471点、石器（および剥片）92点の出土をみているにもかかわらず、そのほとんどが遺構に伴わない、堆積土中に含まれていたものであるためである。

土器破片では82.8%が条痕文系土器である。次に多いのは五領ケ台式土器であるが、それは総数の10.6%にしかすぎない。なお、この数値は破片数を基準としたものであるが、破片の遺存状況においては各類ともさほどの変わりはない（条痕文系の2例を除きいずれも復元し得ない）ので、均等な比率比較が可能であると考えられる。したがって、縄文時代においては少なくとも早期前葉から中期前半にかけてヒトの活動域にあたっていたが、そのピークは条痕文系土器の時期、すなわち縄文時代早期後葉（あるいは末葉）であったといえよう。

その点については石器からも首肯される。二等辺三角形状を呈し基部に浅い抉り込みもつ石鏃（小薬氏のいうC群a類、以下同様）、剥片の側辺に調整を加えただけの剥片石器（D群b類）、小型打製石斧様石器（D群c類）、抉入磨石（B群b類）、扁平で窪みの目立たない石皿（B群d類）など、縄文時代早期後葉に特徴的な石器が認められる。しかも総数（剥片を除いて）に対する割合は、石鏃8.3%、剥片石器4.2%、小型打製石斧様石器6.3%、抉入磨石10.4%、石皿4.2%となるが、これらの時期的な限定性をある程度有する石器は、石器総数の33.4%に達している。土器と違って時期比定の難しい石器資料において、かなりの高率で時期が予測され得る状況にあるといえるのである。

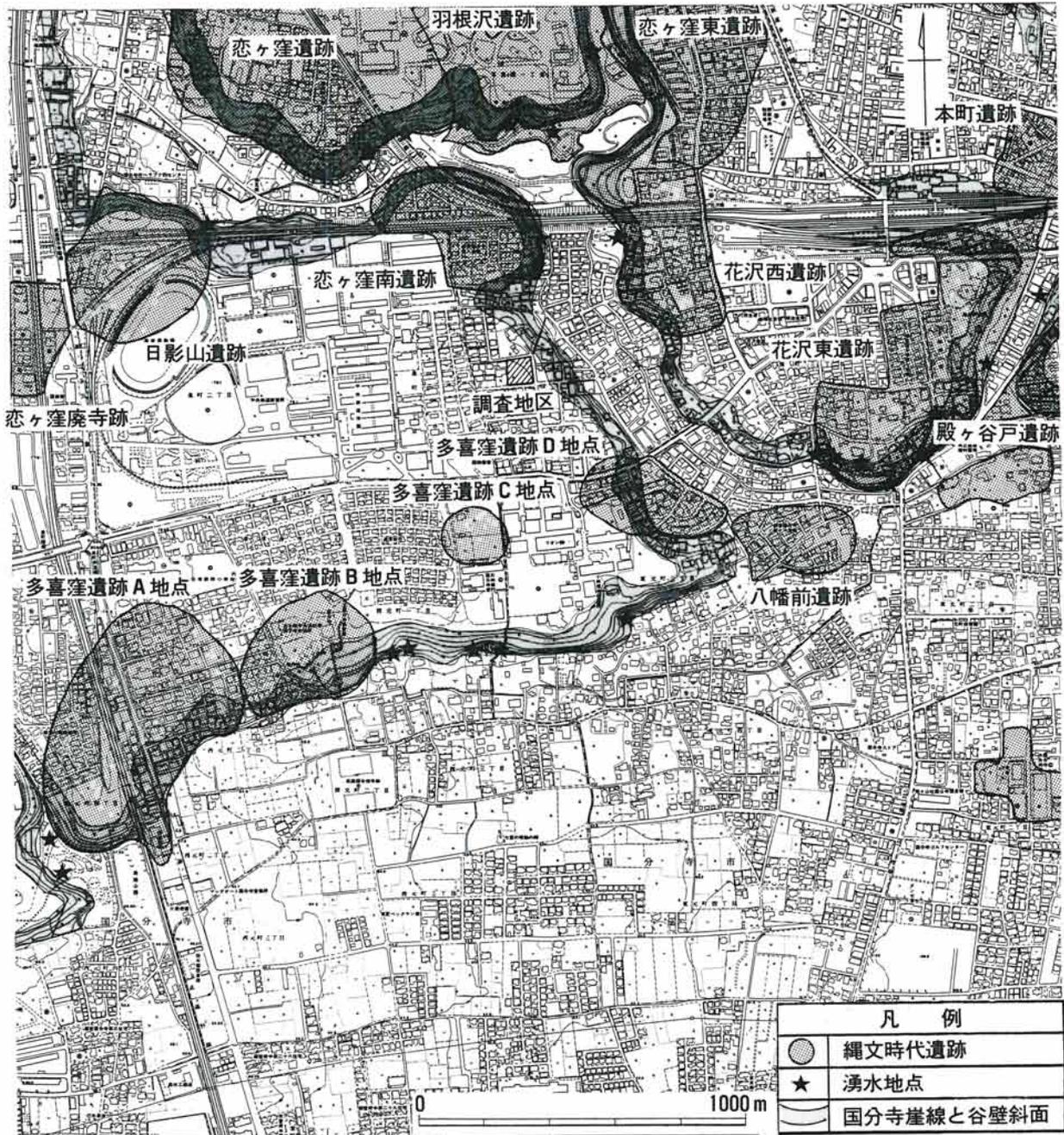
さらに、遺構確認面の高さからも裏付けられる。本調査地区付近では、縄文時代中期以降の遺構はⅢc層上面で検出可能となるが、今回の調査では遺構のいずれもがそのⅢc層ではなく、ソフトローム層であるⅣ層上面になって明瞭に検出された。一方、出土土器中には前期に比定されるものは見当たらない。よって検出遺構の早期に遡る蓋然性が高くなるのである。

今次調査では理化学的分析をおこなっていないので、以上述べた遺物の型式と層位の高さの点

から遺構の時期比定をおこなわざるを得ないのであるが、いずれの指標も縄文時代早期後葉を示している。

各遺構が同時期に存在したかについての検討材料は見出し得ない。しかしたとえ同時存在でないにしても、それぞれは早期後葉というひとつの時間枠のなかで構築され、そして廃棄されたのであろう。そういう点において、各遺構を単一的に扱うことがまた可能である。

では次いで、本調査地区の位置付けを、周辺地区の調査結果に照らし合わせながら考えてみた



第 8 図 縄文時代遺跡分布図

い。

既述のように、多喜窪遺跡C地点、同遺跡D地点、恋ヶ窪南遺跡が本調査地区周辺に広がっている（第8図、第13表）。

多喜窪遺跡C地点には、第51次、第107次、第200次（A地点）、第201次調査地区が地理的に位置している。第51次調査では燃糸文系土器期に住居跡1軒、集石5基（内4基は時期確実ではない）、土坑6基を数え、検出遺構の大半が当該時期に属している。その他では、押型文系土器期に集石1基、加曾利E式土器期に集石1基、埋甕1基が認められている。検出土器からみると燃糸文系土器片が最も多く49.4パーセントを占め、次いで加曾利E式土器片29.1パーセント、条痕文系土器片12.4パーセントとなる（註1）。このように第51次調査地区では、遺構・土器からも燃糸文系土器期が主体的時期であったといえよう。第107次調査地区では4基の土坑が検出されているが、いずれも時期不詳である。土器片についてみると、五領ケ台・勝坂・阿玉台式土器片59.9パーセント、燃糸文系土器片25.3パーセント、条痕文系土器片9.2パーセント、加曾利E式土器片2.8パーセントなどとなり、中期前半と燃糸文系土器期にピークを認めることができる。第200次（A地区）でも検出遺構のほとんどは時期不詳であるが、S X 38 堅穴状遺構が早期のいずれかの土器期に比定され得るものと考えた。時期を推定し得る遺構はそれ1基のみである。土器片では勝坂・阿玉台式土器片46.1パーセント、加曾利E式土器片16.6パーセントとなり中期の土器破片が過半数を占める。早期では、沈線文系土器片が9.3パーセントであるのをはじめ、条痕文系土器片3.1パーセント、燃糸系土器片1.6パーセントと他の調査地区に比べてやや少ない。第201次調査では、2基の土坑が早期に比定され、他の1基もその可能性が考えられている。がしかし、早期の内のいずれに属するかは明らかではない。土器についてみると、諸磯b式土器片46.3パーセントをはじめ、加曾利E式土器片37.5パーセント、五領ケ台・勝坂・阿玉台式土器片15.0パーセントとなり、早期に属すものとしては沈線文系土器片1.2パーセントがあるにすぎない。

多喜窪遺跡D地点における調査例としては、第200次調査（B地点）が挙げられる（註2）。検出された遺構は、集石2基、土坑5基にすぎず、集石がともに堀之内式土器期の可能性があるほかは、時期は全く不詳である。しかしながら、出土した土器片は比較的多く、型式の知り得るものだけでも338点を数える。その内勝坂・阿玉台式土器片が50.3パーセントと過半数を占め、次いで加曾利E式土器片16.6パーセント、沈線文系土器片13.6パーセントなどとなる。

恋ヶ窪南遺跡では、都宮国分寺第八住宅建設に伴う調査が挙げられる。24軒の住居跡のうち21軒が条痕文系土器期に比定されており、また当該時期とされているものには炉穴1基、土坑14基がある。一方五領ケ台式土器とされるものには住居跡3軒をはじめ、集石土坑11基、集石（下部に土坑を伴わない礫群）2基がある（註3）。このように、主として条痕文系土器期にピークが

認められるが、五領ケ台式土器期にも盛行がみられる。

以上の様相からわかるように、各遺跡で盛行する時期が異なっている。しかも調査地区を複数有する多喜窪遺跡C地点では、調査地区によってもその差がみられるのである。

まず多喜窪遺跡D地点をみると、中期が主体的であるが、早期の沈線文系土器期にも僅かなピークが認められる。恋ヶ窪南遺跡では先にみたように、条痕文系土器期が主体であり、五領ケ台

			早 期				前 期	中 期			後 期
			燃糸文系	押型文系	沈線文系	条痕文系		五領ケ台	勝坂・阿玉台	加曾利E	
多喜窪C	第51次	遺構	SI171, SS9(4, 5, 6, 8), SK297, 298, 301, 302, 323, 324	SS11						SS2埋甕	
		土器	2397点	5点	12点	603点			127点	1413点	294点
	第107次	土器	36点	1点		13点		85点	4点	3点	
	第200次 A地点	遺構	SX38								
		土器	3点		18点	6点	10点	13点	89点	32点	22点
第201次	遺構	SK865, 867									
	土器			1点		37点	12点		30点		
多喜窪D	第200次 B地点	遺構								(SS27, 28)	
		土器	5点	1点	46点	17点	5点	8点	170点	56点	30点
恋ヶ窪南	都営第八住宅地	遺構				住居跡21, 炉跡1, 土坑14		住居跡3, 集石2, 集石土坑11			

第13表 調査地区付近縄文時代遺跡一覧

式土器期になって再び盛行をむかえている。

多喜窪遺跡C地点では各地点ともまずは中期代に一つのピークをむかえている（但し第107次・第200次調査地区が中期前半、第51次・第201次調査地区が中期後半）が、第201次調査地区で前期（諸磯式土器期）にピークが認められるのを除くと、残りの3地点では早期にもピークがみられる。すなわち、第51次調査地区では燃糸文系土器期とやや弱いながら条痕文系土器期があり、第107次調査地区では燃糸文系土器期、第200次調査地区ではやはり盛行とはいえないまでも沈線

文系土器期がひとつのピークとして捉えられる。

したがって、本調査地区が条痕文系土器群を中心とするものであることから、恋ヶ窪南遺跡が近似した様相を示すものとして挙げられる。しかも両者の間には200mの距離しかなく、他の調査地区よりも近接している。

条痕文系土器期にひとつのピークがみとめられる遺跡には、多喜窪遺跡C地点の第51次調査地区が挙がり、第107次調査地区でも当期の土器片数は9.2パーセントを数えた。しかしより北方の第200次調査A地区や第201次調査地区では条痕文系土器片の検出率は低い。ゆえに本調査地区を第51次調査地区などと同一視することは困難である。

一方、近似した様相を示す恋ヶ窪南遺跡であるが、比較的近距离にあるとはいえ、両者の間には恋ヶ窪谷より派生した小支谷が西方に走行している。この小支谷は崖面より約120m奥にまで延びており、両遺跡は地形的に分断されることになる。したがって本調査地区を第168・190次調査地区の東側で検出された遺構や第218次調査地区などとともに一つの地点として認識する必要がある。しかしまた、本調査地区でも五領ヶ台式土器片が10.6パーセントを占め（註4）、その点でも恋ヶ窪南遺跡とやはり共通していることは、両者を無関係とすることはできない。少なくとも両者が緊密な関係にあったことは予測されよう。

（註1）時期不明土器を除いた土器片総数を母数とする。

（註2）第200次調査地区では、縄文時代の調査対象は、A地区298m²、B地区203m²にすぎなかった。

（註3）検出土器の型式別統計数が報告書中に明記されていないので、土器片の数量的傾向については触れないでおく。

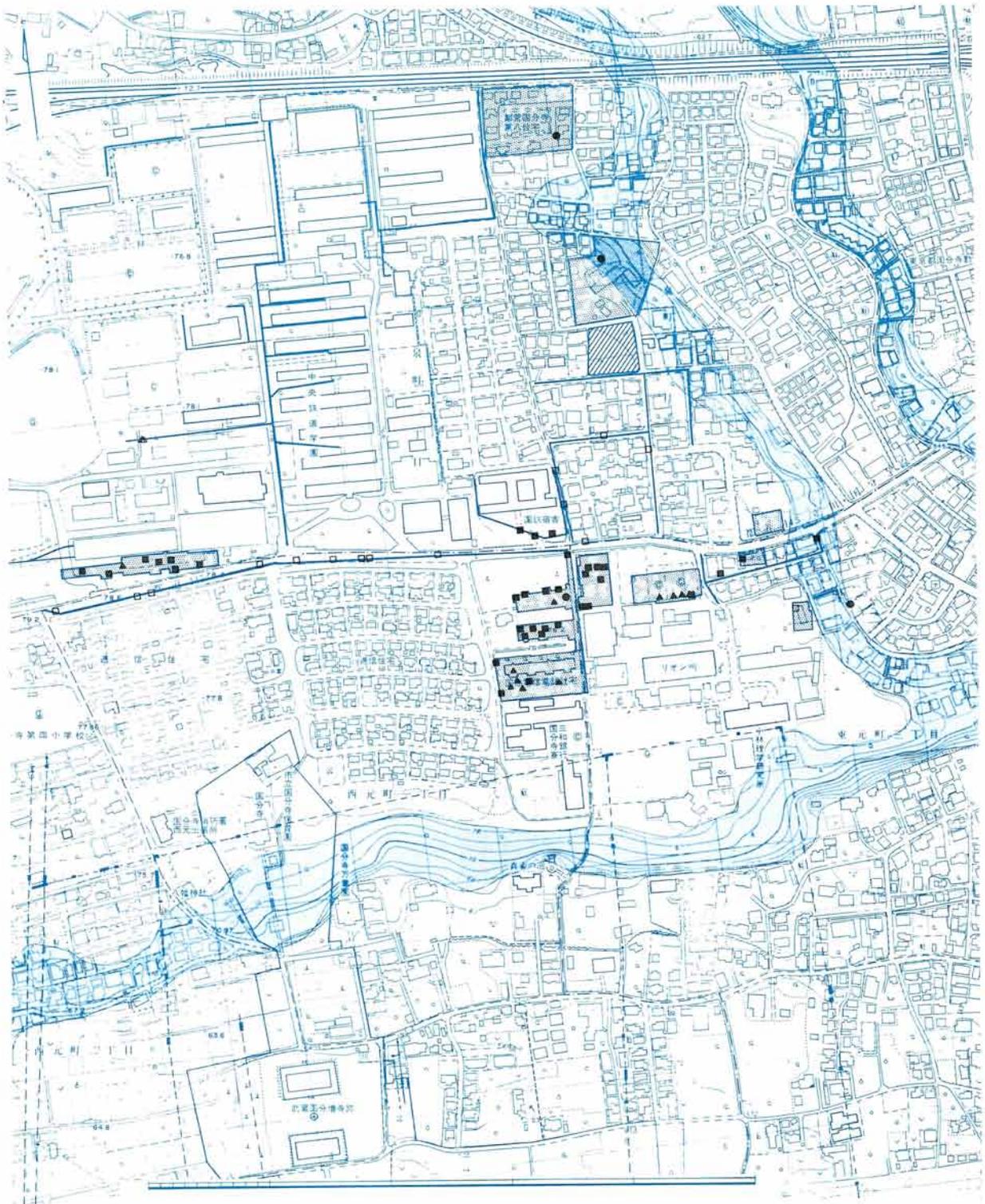
（註4）五領ヶ台式土器片と条痕文系土器片とを合わせると93.4パーセントに達する。

(2) 調査地区付近の歴史時代遺構の分布について

本調査地区にあっては歴史時代の遺構は検出されず、また歴史時代の遺物も皆無であった。寺域外北方付近では大規模な調査はこれまでなされていないが、この数年来調査件数は増大し、地点的な調査成果を結びつけることにより当該地域の様相が少しずつ判明してきたといえる。

つまり、住居跡をはじめとする遺構の密度は低く、時代的にも新しいものが多いという傾向が示されている。こうした中において本調査地区は遺構の空白地帯となっているが、このことは単に遺構分布の空間的な状況を示すに留まらず、その構造的な状況をも示唆するものといえよう。そこで当該地域の遺構の時・空的な在り方をみることで、その点についての見通しをつけたい。

ところで付近の遺構の検出状況は「Ⅱ. 調査地区の概要」で示した通りであるが、再度主要な



凡例		調査地区		住居跡		住居跡 (確認のみ)
		下水道工事に伴う調査		掘立柱建物跡		掘立柱建物跡(確認のみ)
		国分寺崖線と谷壁斜面		火葬墓		

第9図 寺域北方歴史時代遺構分布図

次 数	住 居 番 号	方 位	規 模		カマド位置	時 期
			南北長	東西長		
第3次	34	N	4.0	2.7	北東隅	G14古
	35	N	2.6	2.2~3.4	東	G14古
	36	N-5-E	2.7	3.1	東南隅	G14古
	37	N	2.6	3.3	東	G14古
	38	N-10-E	3.1~3.7	2.7~3.2	東南隅	G14古
	39	N-24-E	2.8	2.2	北	G14古
	40	N-22-E	2.6	2.4	東?	G14古
第51次	147	N-13-E	4.0~4.2	4.5	北	G5新~G14古
	148	N-17-E	3.5~3.9	4.9	東	G5新~G14古
	152	N-11-E	3.2	2.2~	東	G5新~G14古
	195	N-3-E	3.2	4.0	?	G5新~G14古
第72次	175	N-16-E	3.1	3.0	東	G14古
	176	N-20-E	2.9	2.8	東	G14古
	177	N-10-E	3.2	3.1	東	G14古
	178	N-26-E	3.8	3.1	北	G14古
	179	N-25-E	2.6	2.6~	東	G14古
	180	N-12-E	4.1	3.2	北	G14古
	190	N-8-E	3.4	3.6	北	G14古
第103次	224	—	—	—	北	~G5古
	227	—	—	—	北	G5古
第107次	228	N-19-E	3.2	3.0	東	G14新~
	229	N-13-E	2.8	3.8	東	G5新
	230	N	3.5	2.6	東	G14古
	231	N-42-W	3.0	2.2~2.4	南, 西	G14古
	232	N-8-W	3.6	2.7	北	G14古
第168・ 190次	304	N	2.1	2.7~3.1	北	G14新~
	305	N	3.3	3.0	—	G14新~
	321	N-6-E	2.9	3.1	東	G14新
第200次	323	N-66-E	3.2	3.8	東	不明
	329	N-11-E	3.5	3.9	北	G5新
第201次	325	N	3.1	4.3~5.0	北	G5新
	326	N-85-W	3.3	3.1	西南(2時期)	G14新~
	327	N-83-W	5.2	4.1	北, 南東	G14古
	328	N-92-W	3.4~3.9	3.0	北	G5新
第230次	338	N-18-E	3.0	4.0	東	G14新

第14表 寺域北方住居跡一覧

遺構について述べると、住居跡35軒、掘立柱建物跡13棟、火葬墓4基となる（第9図）。まずこれらの遺構の年代を明らかにする。

住居跡のうち年代の上がるものに、第103次調査で検出されたS I 224住居跡があがる（第14表）。この住居跡からは底部外周に回転ヘラ削り調整された須恵器坏が出土しており、9世紀代以前に遡る可能性がある。但し、土師質土器なども伴出遺物のなかに認められ、時期的問題がないわけではない。この時期の住居跡は他には認められていない。これに次ぐ時期のものとしてはS I 229住居跡（第107次調査）やS I 325, 328住居跡（第201次調査）がある。出土遺物からこれらの住居跡は南多摩窯址群出土須恵器編年のG 5 窯式（新）段階に位置付けることができる。また第51次調査の4軒の住居跡（S I 147, 148, 152, 195住居跡）やS I 329住居跡（第200次調査）はこの段階か、あるいはやや後出すると考えられる。とすれば、S I 224住居跡からかなりの時間を経たのち再び住居が構築されたことになる。しかし、S I 329住居跡近くからは底部外周に回転ヘラ削りされた須恵器坏が数個体分見つかっているため、いずれはその軒数も増加し、かつ時間的ミッシング・リンクとなる住居跡の発見もあろう。ともかくも、寺域外北方では、G 5 窯式（新）段階以降に住居跡が増えはじめたとみることができよう。G 5 窯式（新）段階に続くG 14 窯式段階になるとさらに住居跡は増加し、35軒中23軒を数える。但し、その中でもS I 228住居跡（第107次調査）、S I 304, 305, 321住居跡（第168・190次調査）、S I 326住居跡（第201次調査）、S I 338住居跡（第230次調査）は後出的なものといえる。

掘立柱建物跡は、住居跡と異なり伴出遺物の選択が困難で、時期比定が容易ではないが、いくつかのものについては予測がつく。まず第51次調査検出の5棟の掘立柱建物跡のうちS B 80掘立柱建物跡をのぞく4棟は方向性が等しく、しかも同時に検出された2軒の住居跡ともそろっている。したがって一定の計画性が予測され、住居跡とほぼ同時期のG 5（新）～G 14 窯式段階に比定される。一方、第200次調査で検出された4棟の掘立柱建物跡も方位をそろえて並んでおり、同時期の構築と考えられる。この4棟の場合、遺物の出土はほとんど認められなかったが、S B 82掘立柱建物跡がS I 329住居跡（G 5（新）～G 14 窯式段階に比定）に切られていることからG 5（新）窯式以前の段階に遡ると考えられる。このように掘立柱建物跡と住居跡の方向性の関係から、S B 51掘立柱建物跡（第72次調査）やS B 80掘立柱建物跡（第51・201次調査）、S B 78掘立柱建物跡（第210次調査）は方位をそろえて近在する住居跡の比定年代と対応できる可能性をもち、いずれもG 14 窯式段階に比定し得る。

火葬墓は納骨に用いられた容器の型式観によって年代比定が可能である。恋ヶ窪南遺跡発見の火葬墓の納骨容器は、肩の張りの強い薬壺型をなす須恵器である。口縁部は短く直立している。こうした特徴からほぼ8世紀後半に位置付けられよう。第218次調査出土の納骨容器は、肩の位

置が下がり、口縁部はゆるやかな「く」字状をなしている。したがって9世紀代に入るものと考えられる。第201次調査では土師器を納骨容器とした火葬墓が発見されており、9世紀代に位置付けられている。

以上のことから本調査地区付近（すなわち寺域外北方付近）の遺構の時・空的変遷が捉えられよう。ところで各窯式段階の実年代観であるが、G 5（古）窯式段階を10世紀中葉、G 5（新）窯式段階を10世紀後葉、G 14窯式段階を10世紀末～11世紀前葉に考えられており、現在も大きく修正する必要はなかろう。したがってここでもその年代観によることにする。

まず8世紀から9世紀にかけて、寺域北方は火葬墓にみられるように墓域として意識された一方、S I 224住居跡や間接的ながら第200次調査検出の底部外周ヘラ削り須恵器坏などからすると、恋ヶ窪谷西斜面では9世紀代には既に住居が構築されはじめていたと考えられる。但し、この頃はまだ北方地区全体に住居などの生活空間が広がっていたとは考えがたく、未検出のものを考慮にいれても点在的な分布にすぎなかったであろう。

10世紀中葉以降になると北方地区でも明らかに遺構の数は増加していく。その中でも古いと考えられるものに整然と並んだ4軒の掘立柱建物跡（S B 79・81・82・83掘立柱建物跡）がある。そしてそれらの南側には道路状遺構が建物の向きと方向をそろえて延びており、明らかに計画性のある集落構造がとられはじめていたことを物語っている。

10世紀後葉から11世紀初頭にかけて、建物は増加する。しかも建物方向を10度前後東方にとるという共通した傾きを示し、ここでも計画性のある景観が予測される。この時期には火葬墓などの墓葬遺構は検出されていない。また建物は崖線から約20m以内で認められている。この点からすると、今回の調査地区は、この段階では住居をはじめとした建物域の外にあり、居住域的空間からはずれていたと考えられる。

11世紀前葉にも建物は多く構築された。この段階になると建物の方向性は不均等（西42度から東26度までみられる）になり、また住居跡ではカマドの位置が多様となる。さらにまた、前段階よりも更に北側に建物が構築されるようになる。現在時期の判明するものでは、僧寺中軸線より北へ480mが北限（S I 175住居跡）であるが、第168・190次調査で検出されたS B 75・76掘立柱建物跡や、泉町において実施された下水道工事に伴う試掘調査（第185次調査）で検出された住居跡などを考え合わせると、北570mまでは居住空間が広がったものと考えられる。この段階における当該調査地区は丁度居住空間の北縁にあたり、建築物はそれ以南に位置するものといえる。だがまた、第168・190次調査では溝跡や土坑が僧寺中軸線より北820mまでの範囲で検出されている。それらの遺構の時期については不詳であるが、居住空間の北方の拡がりという点からすると、こうした北側の遺構も当該時期に属するかも知れない。したがって当該時期においては、居

住空間の外縁に位置するといえ、活動域の範囲にあり、日常的空間としての機能を高めていたといえる。

確かに、居住空間の拡大がその外縁に広がる日常空間の拡張を引き起こすことは当然の帰結ともいえる。がしかしここで留意すべきは、11世紀前葉における居住空間の拡大が、方位を初めとした住居跡や掘立柱建物跡にみられる規則性を消失するかたちでなされている点である。すなわち前時期まではある規範に基づいた集落構造が採られていたのに対し、11世紀前葉になるとその規範的結縛性は弛緩したのである。これは集落内における中核の脆弱化と、複数の小核の出現を暗示していよう。

したがって、本調査地区については次のようにみることができよう。まず、僧寺造営当時から11世紀初頭頃にかけては、漠然とながら墓域とされた時期は無論であるが、非居住域とはいえ、集落構造の中において一定の位置付けがなされていた可能性が考えられる。それに対して、11世紀前葉以降は、なお居住空間からはずれてはいるが、集落構造全体の中での空間的位置付けが崩れ、一部の集団により生活空間として利用され始めたであろう。

以上のことはなお推断の域をでるものではない。しかし、当地域における調査実績の累積から導き出される現時点での一定の評価でもある。集落構造をより実態的に捉えるには、住居跡の存否などで変わることなく、同様の意識の元に詳細な調査を進めていく必要がある。遺物の稀少的価値観や遺構・遺物の量的多さなどに左右されることなく、時間的・費用的制限が伴うとはいえ、常に調査方法を鍛え上げていかなければならないのである。

(3) 出土土器について

調査により得られた土器に関しては概述したとおりである。ここでは各土器群の時期的な問題などについて簡単にふれてまとめて変えたい。

まず、第Ⅰ群土器は早期前半撚糸文系土器様式に位置付けられる土器である。口縁部破片が存在しないため明確ではないが、第Ⅱ様式・第Ⅲ様式のY型といえよう。第Ⅱ群土器は沈線文系土器群で、田戸下層式に比定されよう。竹管または棒状工具による平行沈線文や鋸歯状あるいは矢羽根状の沈線文を構成している。貝殻腹縁文を施した例も存在する。周辺では本調査地の南方200m程の多喜窪遺跡D地点（第200次調査B地区）でややまとまって出土している。

第Ⅲ群土器は出土土器の中で資料的にまとまりのあるものである。装飾的な文様をもつa類～c類と非装飾的な条痕文・無文のd・e類とがある。a類は口唇部に刺突文を施しただけの土器である。類例を求めたいが、早期後半子母口式の仲間かもしれない。但し、他の類は茅山上層式以降の早期終末に位置付けられると考えられ、この類のみを分別できるのか疑問でもある。b

類は早期終末で打越系の土器群と呼ばれているものである。本遺跡出土例（8-1～3）は町田市小山田No.28遺跡、同藤の台遺跡出土例と同時期である。小山田遺跡では東海系の天神山式を伴っているが、本地区では明確な東海系土器は存在しない。Ⅲ群f類の内薄手の土器（10-64・65）は在地の土器とは考えがたく、東海地方を含む他地域の土器と思われる。しかし、その時期は明らかにはできない。c類の隆帯をもつ例も資料が少ないが、神之木台、下吉井系土器の一群ではないかと思われる。一方、非装飾的なd群貝殻条痕文土器やe類無文土器はa～c類に伴う土器群であろう。本調査地区と浅い谷を挟んで北側台地上に立地する恋ヶ窪南遺跡では該期の集落が検出されており、20軒を越す住居跡や多くの土坑が調査されている。出土土器は、東海系の入海式から天神山式を伴う土器群である。当遺跡では土坑が数基検出されたに留まり遺跡形成の差異が認められる。周辺域を含めた広い視野で検討していかなければならないであろう。

第Ⅳ群の五領ヶ台土器も恋ヶ窪南遺跡で住居跡や集石土坑に伴って検出されている。早期終末と同じ様な状況が中期初頭期にも現れている。出土土器には同一個体片も多く、個体数としてはさほど多くないのかもしれない。

(4) 抉入磨石について

本調査で検出された石器のうち第Ⅶ類は、両端部に抉りを入れるという形態的特徴と、側面および側面が磨耗するという使用上の特徴をもつ。

この石器に対し「抉入磨石」の名称を付した戸井晴夫氏は、着柄されて使用された磨石の一種であること、縄文時代早期後半の所産であること、主に多摩丘陵・武蔵野台地に分布することを指摘した。

また、小栗一夫氏は縄文時代早期後半における多摩川中流域右岸（左岸に存在することを考慮しつつも）の地域的特徴をなす石器であることを述べている。

この抉入磨石は出土遺跡が少なく、かつ宇津木台遺跡E地点や小山田No.23遺跡など若干例を除けば一遺跡（調査地点）で1～数点が検出されたに過ぎないのである。が、一方時期的・空間的に偏りがあり、時代決定の要因ともなりえている。このように時期的・空間的範囲がほぼ押さえられた現段階にあっては、抉入磨石に対する問題の所在はその使用方法にあるといえよう。その場合、先に挙げた2つの特徴が手掛かりとなるが、まずは本調査地区で検出された5点の抉入磨石を中心に観察を行っていく。

5点の抉入磨石のうち完形品であるAタイプは(23)と(24)の2点だけで、他はCタイプ(26)、Daタイプ(27)、Eaタイプ(25)各1点である。2点の完形品は形状を異にしており、23は通例みられるような扁平で長方形を呈している。一方24はやや厚みのある方形である。なお3点

の破片資料はいずれも前者に類似した形態であったと思われる。

ところで、多くの抉入磨石が扁平長方形の石材の両端に剝離を加える程度で、擦過部分は自然面のまま残しているのに対し、26は表裏面の一部を除いて多くの部分に剝離痕が認められる。石材を加工・調整して、長方形でかつ長辺を直線的に仕上げているのであるが、すなわちそうした形態が抉入磨石の求められた形態であるといえる。このことはまた24のような方形のものは例外的であり、長方形が主体であることにも裏付けられている。抉入磨石は長方形が基本形態であり、さらにいえば、意図的にその形態に作り出されたものがあるということは、それが機能的に最も有効な形態であったことを物語っている。

抉入部が2対のものもある。23は明らかに2対認められる。25は破片資料であるが、長辺、端辺に各1箇所の抉入部が認められるので、2対あったものと考えられる。26は磨耗のため長辺側の抉りは判然としないが、破損部近くに抉入部が作られていたとみれよう。2対の抉入部をもつものが存在することは、長辺を有効な使用部位としながらも、それ以外の部位を使用することも機能上可能であったことを示すものである。

なおいずれの抉入磨石も、対となる抉入部の主要剝離作業は逆方向からなされている。

24は既述したように石材本来の形状により、表裏面が凹凸面となっている。にもかかわらず、表裏面とも磨耗しているのは、表裏面を使用した擦過の対象が平坦面に限ったことではなく、凸曲面あるいは可変性のあるものでもあったかも知れない。

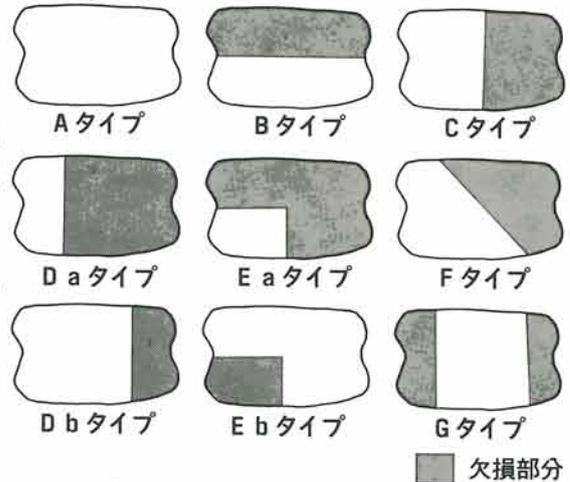
以上のことから、形態的には長方形を主とし、しかもそれが基本的に機能上の要件でもあること、側辺の使用では長側辺が主体であるが、必ずしも長辺に限定されないであろうこと、そして表裏面の使用では擦過対象が平坦面とは限らないことが推定される。

ところで5点の抉入磨石は、強弱や疑問の残る部分がないではないが、いずれも抉入部、長側辺および表裏面が磨耗しており、従来いわれているように擦過を目的とする機能を有していたことは明らかである。したがって磨石とほぼ同様の機能を考えることができる。しかしまた、形態的に磨石と異なることから、使用法や対象物に違いのあったことが想定されるのである。

そこで抉入磨石の一般的特徴をより明らかにするために、14遺跡17地点において出土した198点の抉入磨石について、各報告書に基づき、遺存状態、大きさ、石材などの点についてみていく(註1)。但し、198点のうち、宇津木台遺跡G地点とE地点を合わせると138点を数え、全体の約70パーセントを占めている。よって一律化された統計数値では宇津木台遺跡出土資料に引張られ、偏る恐れがある。そこで宇津木台遺跡出土資料をA群、宇津木台遺跡以外の遺跡出土資料をB群とし、まずは各群に分けて分析を進めていく。

遺存状況である(第10図)が、A群ではAタイプ23点(16.7%)、Bタイプ1点(0.7%)、C

タイプ50点 (36.2%)、D a タイプ34点 (24.6%)、D b タイプ10点 (7.2%)、E a タイプ6点 (4.4%)、E b タイプ2点 (1.4%)、F タイプ5点 (3.6%)、G タイプ4点 (2.9%) および2枚に剥離したものの3点 (2.2%) となり、中央部で折れたものが最も多く、次いで片側端部を欠くもの、完形品となる。一方、B群ではAタイプ25点 (41.7%)、Cタイプ12点 (20.0%)、D a タイプ10点 (16.7%)、D b タイプ3点 (5.0%)、E b タイプ1点 (1.6%)、Fタイプ9点 (15.0%) を数え、完形、中央部で折れたもの、片側端部を欠くものの順で多い。こうみてくるとA群とB群とでは量的順位は異なるが、上位3タイプはともにAタイプ、Cタイプ、D a タイプであり、その3タイプで約八割を占めるに至っている (註2)。したがって、加圧部分が挟入磨石の中央部あるいは端部近くにあったと判断される。

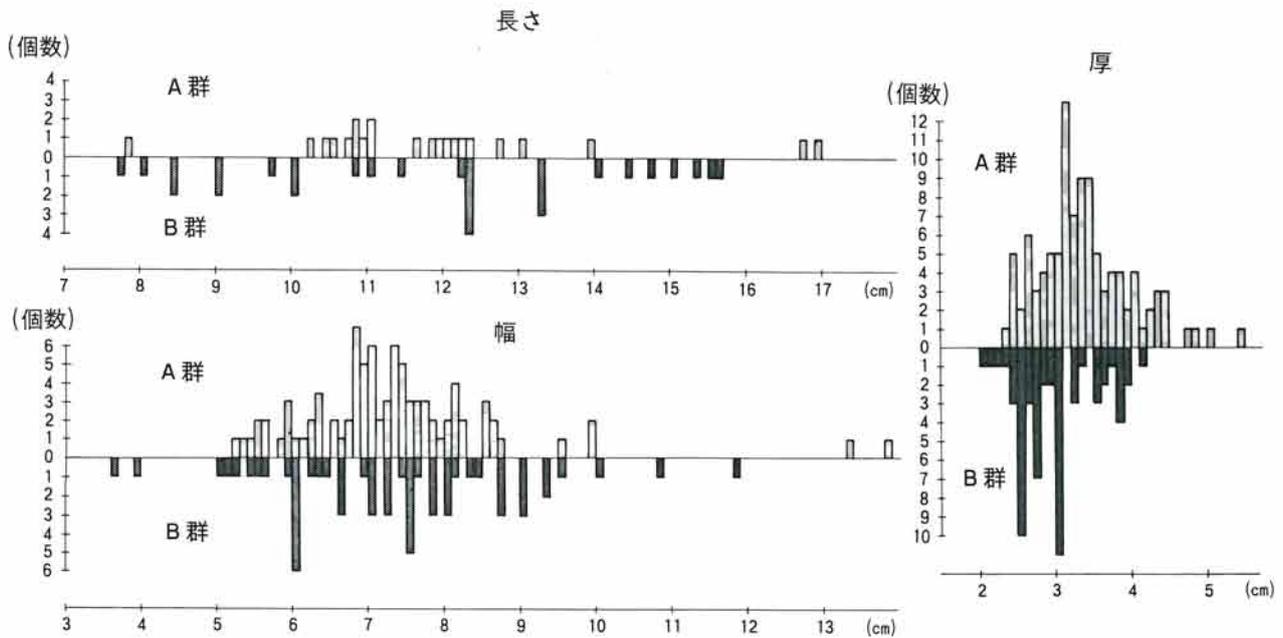


第10図 挟入磨石遺存状態概念図

次に大きさについてである (第15表)。長さでは、A群が平均11.9cm、B群が12.3cmである。A群では最小7.8cmから最大16.9cmまでの範囲にあるが、10.2cmから13.0cmの幅に集まる傾向がみられる。一方、B群では最小7.7cmから最大15.6cmまでとA群に比べ範囲幅は狭くなっているが、極めて分散的である。なお全数平均は12.1cmである。幅は、A群が平均7.3cm、B群が7.6cmである。ともに5.0cmから10.0cmの間にほぼ集まっており、ことに6.5cmから8.2cmに集中する。全数平均は7.4cmである。厚さは、A群が平均3.4cm、B群が2.9cmであり、A群のものがやや厚い傾向にある。とはいえ、厚さについても両群は類似した分布状況を示しており、2.4cmから4.0cmに集まる。全数平均は3.2cmとなる。こうしてみると、A群とB群とでは前者が僅かに小振りであるといえる。しかしまたそれを有意的な差とすることもできないほどである。したがってこの統計数値からすると、挟入磨石の平均的な大きさは、長さほぼ12cm、幅7.5cm弱、厚さ3cm強ということになり、片手で握って丁度良い程度の大きさといえる。

重量については、石材とほぼかわりなくその大きさと対応することから、平均的な大きさの挟入磨石の重量がその一般値を示すものといえる。すなわち400~500gが平均的であったと考えられるのである。

調整によって扁平・長方形の形態が作り出された明らかな例は198点中にはみられなかった。しかし、長側辺に剥離調整を加え、直線的に仕上げたものは神谷原遺跡602番をはじめ幾つか散見する。したがって長側辺の接着抵抗がより大きくなるような形状が基本的に求められていたと



第15表 挟入磨石大きさ分布

みることができよう。

2対の挟入部を有するものも198点の中では認められなかった。よって本調査地区出土の3点は例外的な存在ということになる。但し、端辺の磨耗した事例が少なからずみられることからすると、2対の挟入部をもったものは使用上より合理的に製作された挟入磨石と考えることもできよう。

挟入磨石の石材はバラエティーにとんでいる。すなわち、閃緑岩、石英閃緑岩、砂岩、玢岩、花崗岩、礫岩、安山岩、石英斑岩、凝灰岩、輝緑凝灰岩、玄武岩、砂質頁岩がみられるのである。しかしながら遺跡ごとにみると、石材はまとまる傾向にある。A群である宇津木台遺跡では138点中閃緑岩121点(87.7%)、砂岩12点(8.7%)、輝緑凝灰岩3点(2.2%)、安山岩1点(0.7%)、石英閃緑岩1点(0.7%)となり、閃緑岩が突出して多い。神谷原遺跡でも7点中6点(85.7%)までが閃緑岩である。また多摩ニュータウンNo.454地点では8点中7点(87.5%)が花崗岩である。小山田No.23遺跡では石材の種類が多く、総数27点に対し玢岩13点(48.1%)、閃緑岩5点(18.5%)、安山岩3点(11.1%)、礫岩2点(7.4%)、花崗岩1点(3.7%)、砂岩1点(3.7%)、石英斑岩1点(3.7%)、砂質頁岩1点(3.7%)となるが、玢岩が過半数近くを占めている。なお本調査地区では5点すべてが斑レイ岩であった。このように挟入磨石は、石材に絶対的な基準があるのではなく、むしろ機能さえ満たすものならば遺跡ごとで入手しやすいものが用いられたと考えられる。

では以上のことから、抉入磨石の使用方法はどのように考えられようか。たとえば戸井氏は、抉入磨石をL字形あるいは二股の枝に着柄して使用したのではないかと推定されている。また、安孫子昭二氏は、紐を懸けて使用したとされている。抉入磨石の使用方法の予測についてはこの両者の見解にほぼ代表され得るといえよう。

抉入磨石は長辺を主たる使用部位としていることから、磨石とは異なり一定の幅をもって擦過を行うことが意図されたものと考えられる。すなわち、より効率的な擦過を可能にする使用方法が採られていたであろうことは十分に考えられることである。ところで、その平均的な大きさは先にみたように片手で握れるほどのものであり、看見資料中の最大長でも16.9cmであった。無論その大きさの点から後者の見解を支持するには根拠が乏しすぎる。だが、磨耗部分に示されているように、強い力で使用されたと考えられ、一方着柄された状態では作用が不安定になりはしないかと疑われる。すなわち擦るといふ行為において、柄を握っておこなった場合、力が有効に働かないと思われる。また抉入部に磨耗がみられる点も、紐擦れの可能性が考えられるのであり、着柄状態では着柄部がどれほど磨耗するかは疑問である。さらに、欠損状態では、中央か片側に寄っているかは別にして、縦方向の折れである。もし着柄状態で衝撃が与えられれば、E a・E bタイプの遺存例が多くあってしかるべきだが、A・B群平均で、E aタイプは3.0%、E bタイプ1.5%にすぎない。このような点からすると、抉入部を紐懸けと見るほうがより適当といえよう。なお時代も用法も異なるが、石包丁のなかにも、紐孔をもたず両端に抉りをいれたものがあることを付け加えておきたい（註3）。

以上みてきたことからしても、なお抉入磨石の使用方法を決定付けることは難しく、また従来よりいわれていることの域を出るものでもないが、最後に次の2点を確認しておきたい。

まず第1は、磨石とは異なり面的に擦過をおこなう目的を有するものであろうということ。磨石が点的・線的であるのに対し、抉入磨石は一度にかつ平滑に面的な広がりをもって擦過をおこなうことが可能である。しかもスタンプ形石器など接着面に幅のあるものと異なり、作用部の幅が狭いことは、擦るといふ行為に限っていえば、より機能的であるといえよう。

第2に、抉入部に紐懸けをして、握り手に固定して用いるのであろうということ。これは、強く擦過されていることと対応しているといえる。

この抉入磨石についての次の中心的課題は、その使用対象の解明であろう。ここではそれに言及するだけの余裕もないが、その場合、抉入磨石の個別資料の微細な観察とその累積、そしてデータの比較と有関性の認定が作業として必要とされてこよう。

（註1）井の頭池遺跡A地点、羽根沢台遺跡（東京都三鷹市）、弁天橋遺跡、鞍骨山遺跡、神谷原遺跡、宇地木台遺跡G地点・E地点、栢田遺跡（東京都八王子市）、田中谷戸遺跡、小

山田No.23遺跡、藤の台遺跡（東京都町田市）、尾崎遺跡（東京都練馬区）、八幡山遺跡（東京都世田谷区）、多摩ニュータウンNo.454地点・No.540地点・No.790地点（東京都多摩市）、上浜田遺跡（神奈川県海老名市）

（註2）Aタイプ以外は破片資料のため、あるいは事例数が倍増している可能性がないとは限らない。したがって、今後は接合作業を基礎に据えた検討がより要求されよう。

（註3）瀬戸内沿岸や南九州にみられ、また長野県恒川遺跡でも発見されている。

小林行雄 「石包丁」『考古学』8-7 1937

小林正春ほか 『恒川遺跡群』 1986

(5) 貯蔵穴と陥穴

本調査地区においては、既述のように14基の土坑が検出されている。そのうち、平面形が円形で筒状あるいはゆるやかなフラスコ状の掘り込みをもつもの、平面長円形で壁がほぼ垂直に立ち上がるものも認められている。ともに深さは100cm前後である。

そして、この両形態の土坑については、贅否はあるものの、その機能的性格が推定されている。すなわち、前者を貯蔵穴、後者を陥穴とされているのである。それは民族例や、さらに前者については堅果類の出土例を主たる根拠としたものである。しかしながら、そうした事例が土坑の形態の特徴と用途目的とを対応させ得るだけの十分な検討資料たり得るかについてはなお疑問である。加えて、その場合に限っても、形態差が機能差を事実反映しているかの保証は確実にはなされてこなかったといえる。

ところで、本調査地区においては、両形態の土坑が同一地点で検出されている。こうした状況において、それぞれがもつ特徴の異同の所在、すなわち形態差以外の差異の存否はより明確になり、しかも、両者の機能的性格を判断する指標の存在についての手掛かりが得られる可能性も高くなるだろう。

なお、所属時期の同時性も両者を均等に捉える上では重要な前提条件となる。が、出土遺物が皆無、または僅少であるため、時期を確定することは難しい。しかしながら、条痕文系土器片が調査地区出土土器破片の80パーセントを占めるといふ顕著な多さに加え、両形態の土坑ともに縄文時代草・前期の遺構検出が可能となるIV層上面になって確認されているなどの点から、いずれも既述したように縄文時代早期後葉に比定できよう（註1）。

以下に、形態、規模、覆土の様子、遺物、位置の各点について両形態の土坑を比較検討していくことにする。

〔形態〕

これは両者を区別する根幹的な要素である。両者の形態上の差異は前提的に存在するといえるが、まずは検出された14基の土坑全ての平面形と断面形とについてみると、平面形・断面形ともに各々2つに分けることができる。すなわち、

平面形 (イ) 円形を呈する

(ロ) 長・楕円形を呈する

断面形 (a) 壁が垂直的に立ち上がる、或いは底面がオーバーハングシラスコ状を呈する

(b) 壁がゆるやかに立ち上がり断面スリバチ状、或いは椀状を呈する

したがってこの平面形と断面形との組み合わせから検出土坑を四類に分けることができる。

イー a 類 S K 1043, 1044, 1045, 1046, 1047 土坑

イー b 類 S K 897, 898, 901 土坑

ロー a 類 S K 900, 902, 1048, 1049 土坑

ロー b 類 S K 899, 903 土坑

そして、このなかでイー a 類が貯蔵穴、ロー a 類が陥穴と想定されているのである。

しかも両者をはじめ各類は、次にみるように規模の点においても明らかに区分することができ、こうした形態的特徴が規模と対応しているといえるのである。

なおロー a 類の底部にはなんらの施設も認められず、平坦な状態であった。

〔規模〕

各土坑の規模についてまとめると先の第5表になる。まず平面形からみると、イ類のものは長・短径比が1.0~1.2の間に収まるが、ロ類はS K 1049土坑を除くといずれも2.0前後となる。深さにおいてはa類が50cm以上で、100cmを越すものも4基認められる。これに対し、b類ではS K 898土坑の40cmが最高であるにすぎない。

このように、平面の長・短径比と深さの点から四類の土坑は明らかに独立した形態的特徴を有しているといえる。

さらに、イー a 類とロー a 類とについて比較を加えてみると、次の2点を指摘し得る。

まず、イー a 類の長・短径比が平均1.08、ロー a 類では1.78である。一方、長径はイー a 類が平均141cmであるのに対し、ロー a 類は180cmであり、後者のほうが長い傾向にある。しかしながら絶対的に上回ることはない。こうしてみるとロー a 類の形状は短径の相対比により作り出されているといえる。

次に、深さの点においては、イー a 類では平均126cm、ロー a 類は78cmであり、前者のほうが上回っている。これはロー a 類の場合、幅狭の形状のため掘削が困難であったことに起因しよう

が、また機能的な面からイー a 類が深く掘られたのかも知れない。

〔覆土の様子〕

形態的にも規模的にも差異の認められるイー a 類とロー a 類であるが、両類の覆土の様子について比較してみると次の 2 点を指摘できる（第 11 図）。

第一に、イー a 類では各々割合に単一的な土質（ローム粒・スコリア粒を含む黒褐色土）の堆積であるのに対して、ロー a 類ではいずれも堆積土の質にバラエティーがみられる。これは堆積の時間差と関わることもかも知れない。とすれば、前者の方が短い時間であったかも知れない。

第二に、イー a 類の土坑堆積土はいずれも中層が締まりを欠いているのである。この点は先に述べた堆積時間との関係が考えられる。すなわち、イー a 類は深さがある一方で、短時間で埋まったため、堆積土の中層が締まりの弱いものとなったのであろう。

では堆積時間の短さが何に起因するのであろうか。人為的な埋めもどしの状況ではないことからすると、浮遊土の多さということがいえる。だが、その根本的な原因となるとやはり判然としない。ただ、一つの可能性としては、ヒトなどの往来が頻繁で土の浮遊がおこりやすかったことも考えられる。

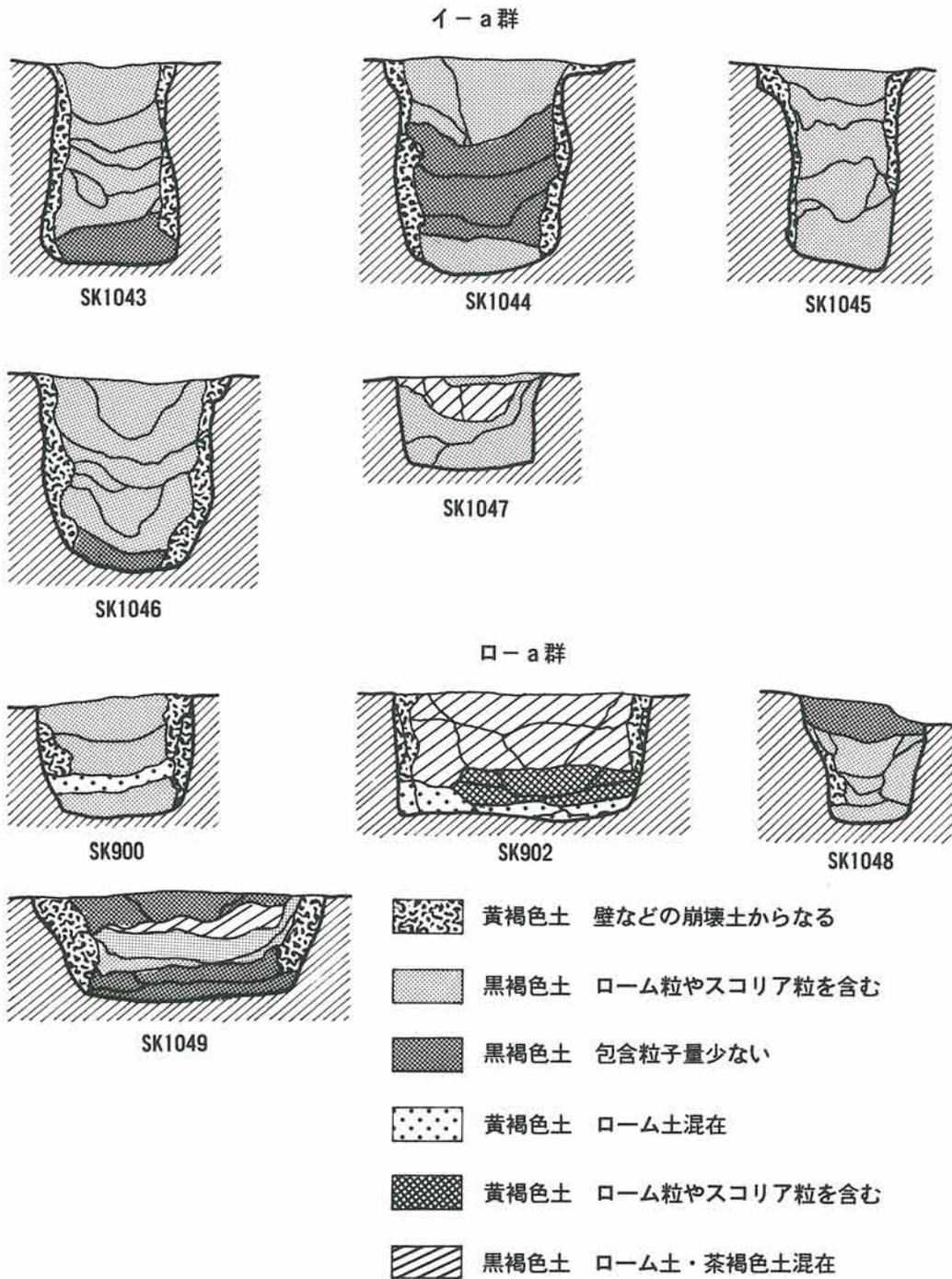
〔遺物〕

遺物の出土についても、イー a 類とロー a 類とは明らかに様相を異にしている。すなわち、土器片や礫を出土したのはイー a 類だけ（土器片は 3 基の土坑から、礫は全ての土坑から出土している）であり、ロー a 類からは遺物の出土は認められなかった。なお、ロー a 類のうち 2 基から炭化物が検出されたが、イー a 類では S K 1047 土坑 1 基だけから炭化物が少量検出されたにすぎない。しかし炭化物はいずれもまとまった出土ではない。

このように遺物の出土様相が異なるのは、イー a 類が日常生活空間内にあったか或いは近接していたのに対し、ロー a 類はそうした空間から離れていたためとできるかも知れない。

〔位置〕

位置的状況においてもイー a 類とロー a 類とは様相を異にしている。イー a 類はまとまってみられ、やや離れて位置する S K 1047 土坑までも 5 m ほどを測るにすぎない。一方、ロー a 類は散在的な在り方を示しており、最小でも 10 m の距離を測る。このように群集するものと散在的なものという異なった在り方がみられるのである。なおロー a 類の土坑は等高線に対し直交するように長軸を向けている。



第11図 土坑内覆土模式図

さらに、本調査区域付近における両形態の土坑の分布についてみると、イ - a 類は第185次（1988年度試掘調査）、第190次調査や第218次調査で発見されており、本調査地区付近を中心に、主として北方に広がっているようである。一方、ロ - a 類は多喜窪C地点で6基が検出されている（第3・51・107・201次調査）が、本地区周辺ではこの4基以外は検出されていない。したが

ってロー a 類は本調査地区付近以南に位置するものといえる。このように、ともに武蔵野台地面に所在するとはいえ、両類の土坑の分布の様子は異なっている。

以上のように、イー a 類とロー a 類とは形態的に異なるのみならず、規模、覆土の様子、遺物、位置の各点においても異なっているのである。したがって両類の土坑の機能が違うのではないかという予測は本調査地区検出の土坑をみる限りは容認されよう。加えて、両者の分布の違いもその可能性を高くしている。そしてさらにいえば、覆土の様子、遺物、位置の点からイー a 類の方がより日常空間に近い場所にあったと判断され、より生活活動と結び付いた機能を有していたと推定されるのである。

本調査地区検出例に限ってみれば、それ以上の機能性を限定する根拠は見い出せない。しかしまた、以上の点は、両類の土坑に付された機能上の仮説と抵触することもないのであった。

(註 1) 当該時期の多摩川以北所在の稀少な例を加えたことになろう。

引用・参考文献

(1) 検出された遺構と遺物

小藁一夫「縄文時代早期後半における石器群の様相」

『東京都埋蔵文化財センター研究論集』Ⅱ 1983

広瀬昭弘・福田信夫「第2章 縄文時代」『国分寺市史』上 1986

(2) 調査区域付近の歴史時代遺構の分布について

服部敬史・福田健司「南多摩窯址群の須恵器とその編年」『神奈川考古』6 1979

服部敬史・福田健司「南多摩窯址群における須恵器編年再考」『神奈川考古』12 1982

福田信夫「第4章 武蔵国分寺」『国分寺市史』上 1986

(3) 出土土器について

小林達男「No.52遺跡、縄文時代に関する問題」『多摩ニュータウン遺跡調査報告』Ⅱ 1966

三木 弘『武蔵国分寺跡発掘調査概報』X 1987

実川順一他『恋ヶ窪南遺跡発掘調査概報』I 1987

(4) 抉入磨石について

戸井晴夫「抉入磨石について」『神谷原』Ⅲ 1982

小藁一夫「縄文時代早期後半における石器群の様相」

『東京都埋蔵文化財センター研究論集』Ⅱ 1983

安孫子昭二「小山田No.23遺跡」『小山田遺跡群』Ⅱ 1983

梶原 勝 「2. 遺物(2)石器」『宇津木台遺跡群』Ⅲ 1983

(5) 貯蔵穴と陥穴

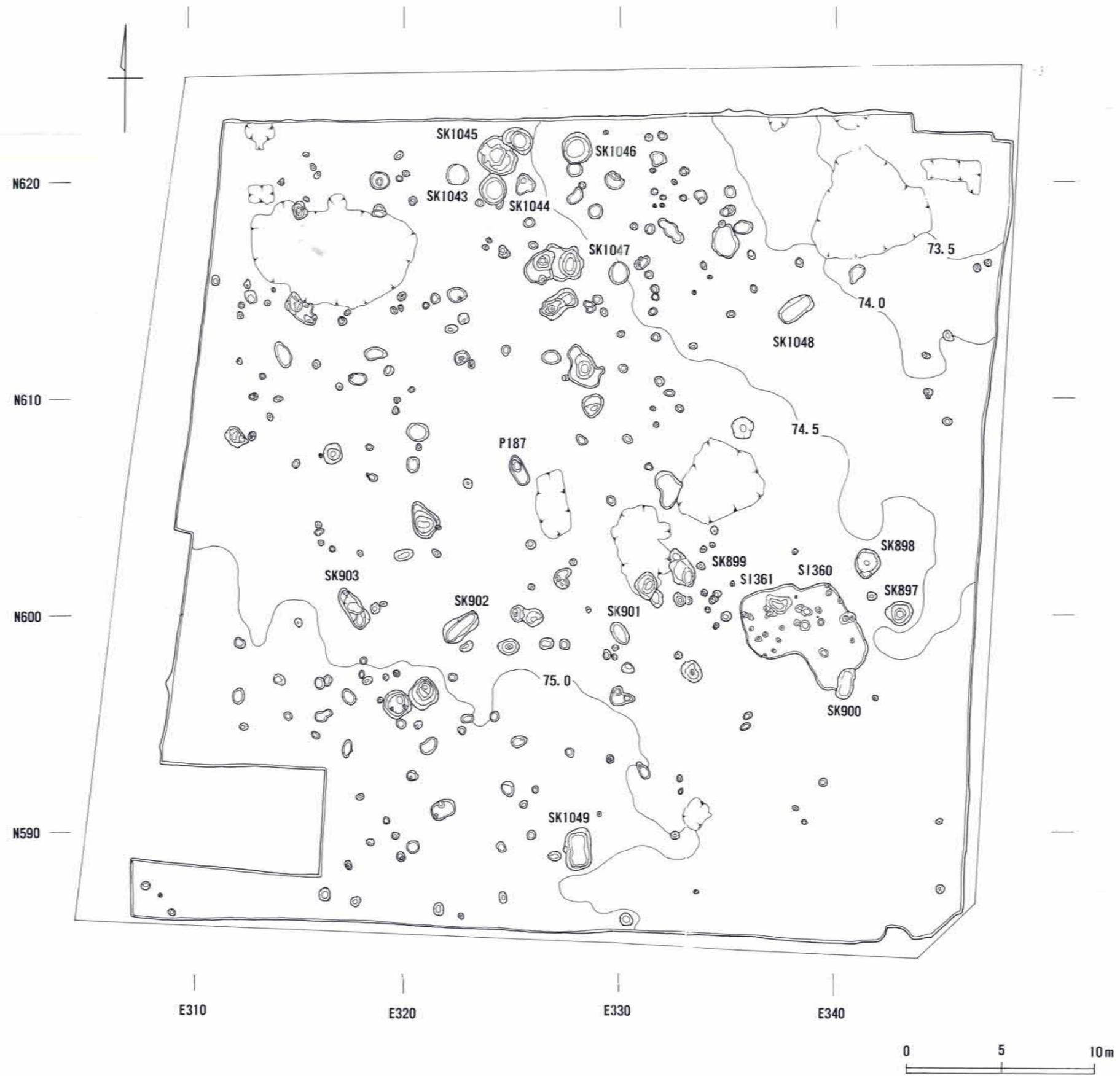
今村啓爾「陥穴（おとし穴）」『縄文文化の研究』2 1983

桐生直彦「東京都における縄文時代の袋状土坑」『東京考古』3 1985

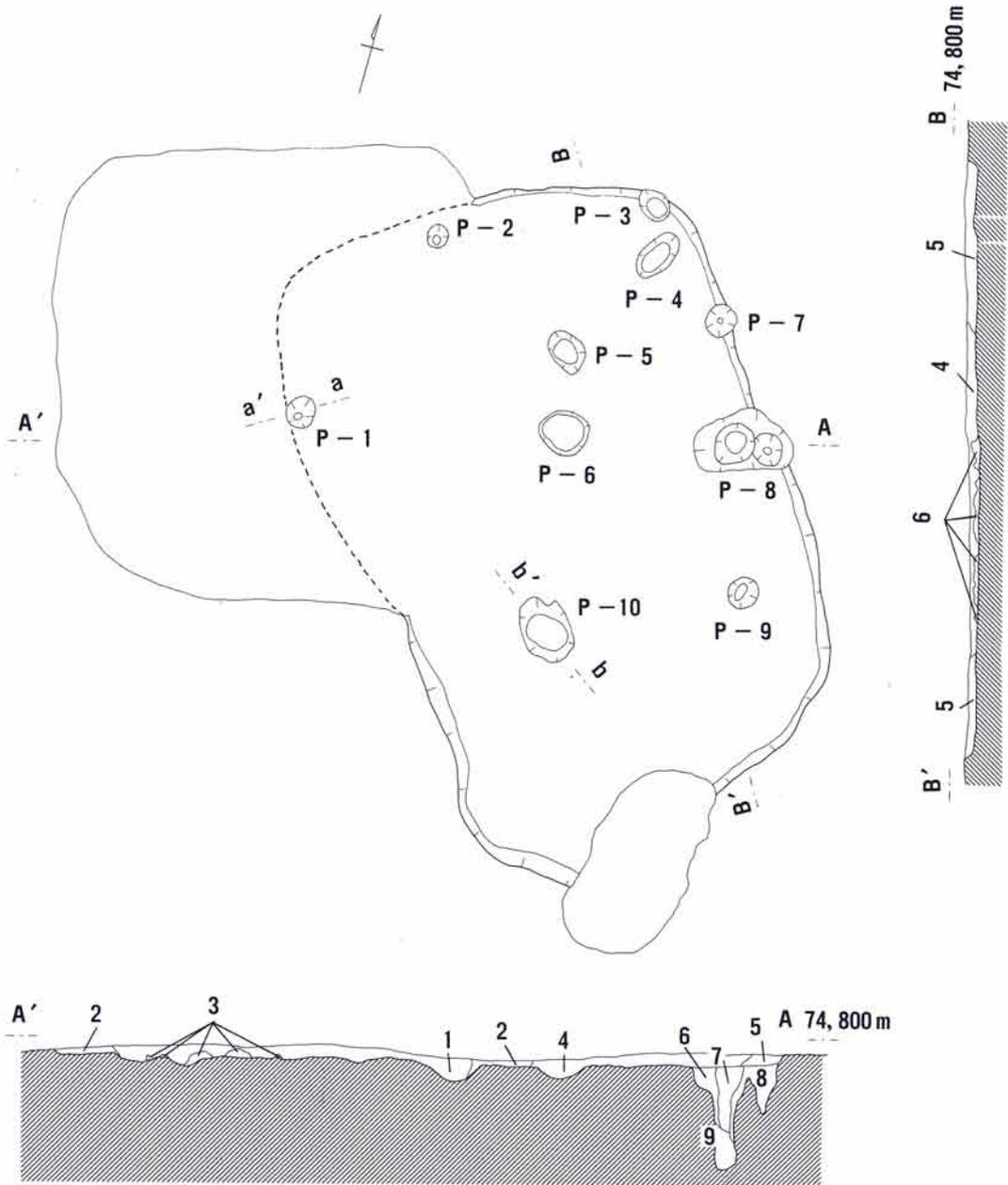
桐生直彦「新・東京都における縄文時代の袋状土坑」『東京考古』6 1988

面 図

図面1 遺構配置図



図面2 S I 360 住居跡実測図



P-1

a' 1 a 74,700 m



1. 暗黄褐色土 (堅固)
2. 暗黄褐色土 (堅固、やや粗質)

P-10

b' 1 2 b 74,700 m

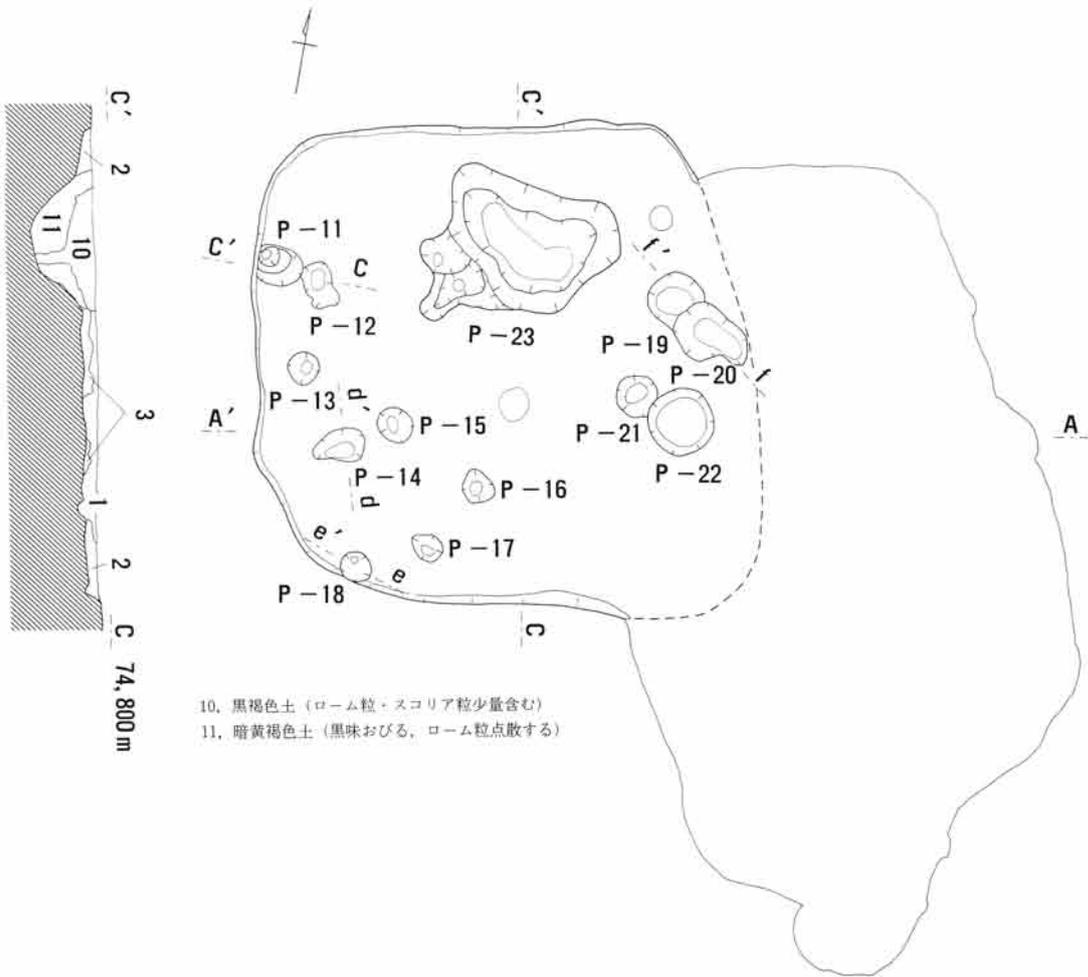


1. 暗黒褐色土 (ローム土混入)
2. 暗黄褐色土 (スコリア粒・ローム細粒含む)

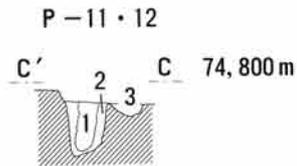
1. 黒褐色土 (ローム細粒多い、明るい色調呈する)
2. 黄褐色土 (ロームブロック多い、黒褐色土含む)
3. 暗黄褐色土 (ロームブロック多い)
4. 黒褐色土 (ローム細粒および少量のロームブロック含む)
5. 黄褐色土 (黒褐色土やや混入、壁・床ぎわはロームブロックが主体的)
6. 暗黄褐色土 (ローム土と黒褐色土の混合層)
7. 黒褐色土 (ローム粒・スコリア粒含む)
8. 黒褐色土 (ローム粒僅かに混入、粘性あり、締まり良い)
9. 黒褐色土 (ローム粒僅かに混入、粗質)

0 1 2m

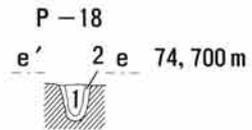
図面3 S1361 住居跡実測図



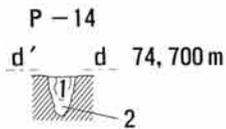
- 10. 黒褐色土 (ローム粒・スコリア粒少量含む)
- 11. 暗黄褐色土 (黒味おびる, ローム粒点散する)



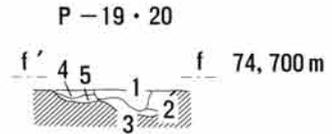
- 1. 黒褐色土 (スコリア粒多包する)
- 2. 黒褐色土 (ローム土混入, 堅固)
- 3. 黒褐色土 (ローム土混入, 粗質)



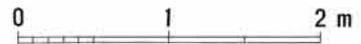
- 1. 黒褐色土 (ローム土僅かに混入)
- 2. 暗黄褐色土 (締まりやや弱い)



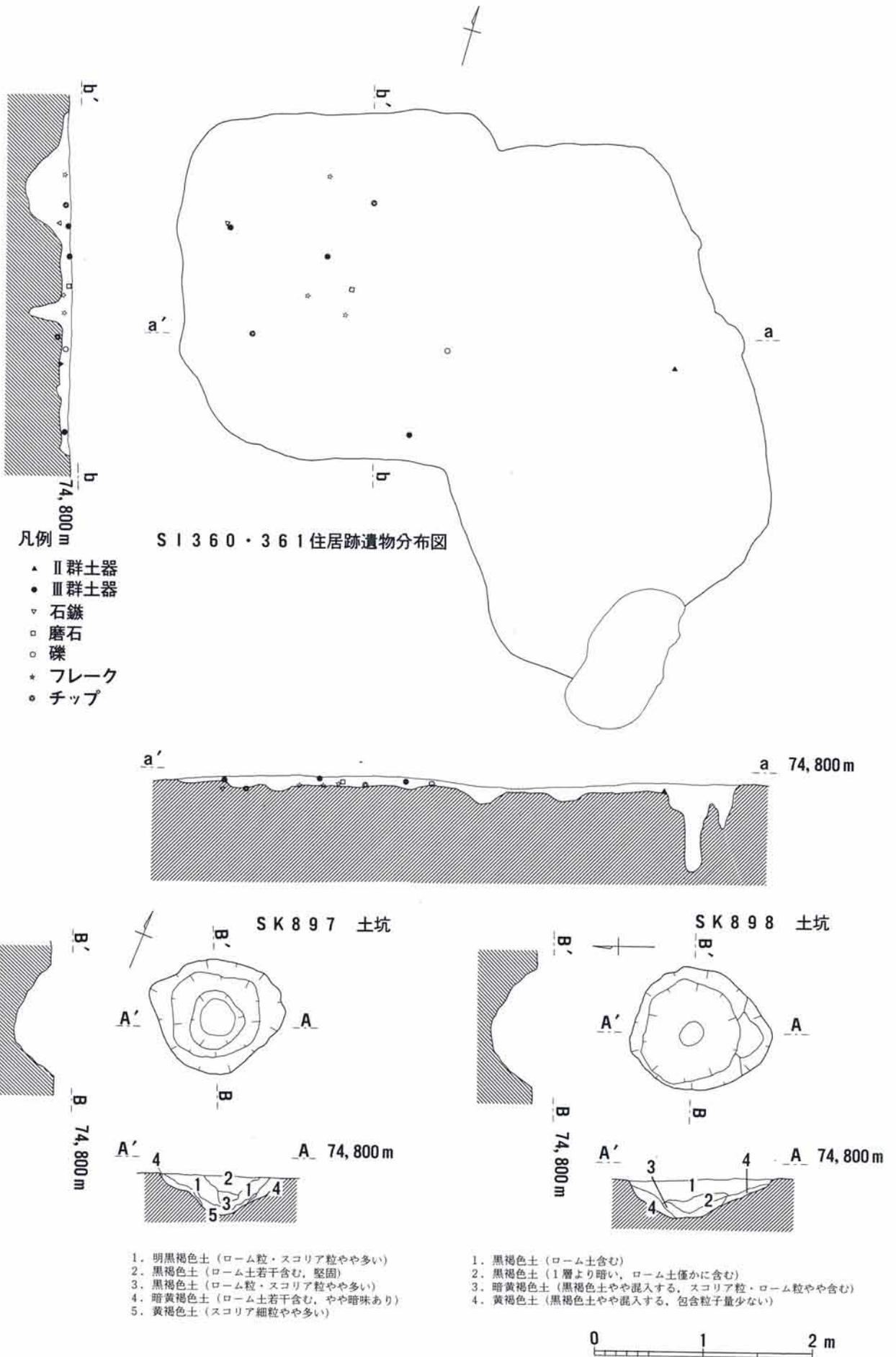
- 1. 黒褐色土 (スコリア粒・ローム粒微量に含む)
- 2. 暗黄褐色土 (黒褐色土僅かに混入)



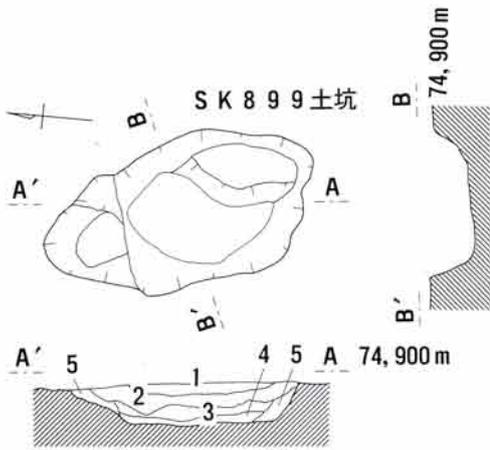
- 1. 明黒褐色土 (ローム土混入, 粗質)
- 2. 黄褐色土 (締まりやや弱い)
- 3. 暗黄褐色土 (スコリア粒, ローム粒含む)
- 4. 黒褐色土 (ローム土僅かに混入)
- 5. 暗黄褐色土 (カーボン粒微量に含む, 締まりよい)



図面4 S1360・361住居跡・土坑実測図



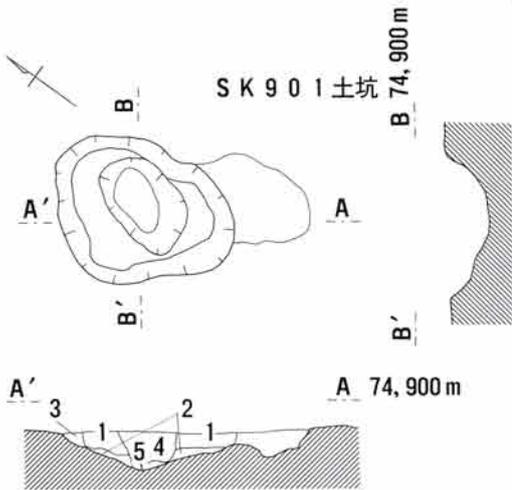
図面5 土坑実測図



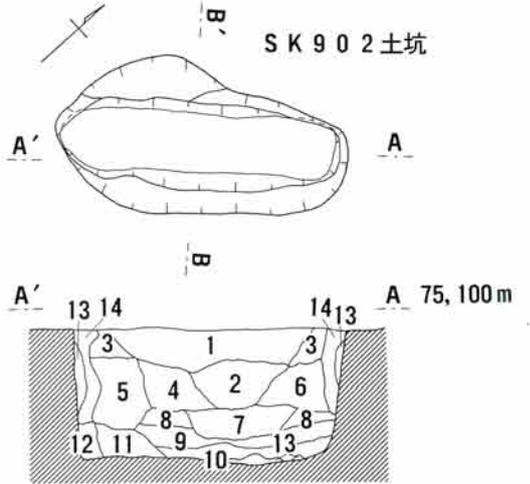
1. 黒褐色土 (やや暗味強い)
2. 黒褐色土 (スコリア粒・ローム粒多い)
3. 黒褐色土 (ローム土多包, 黄色味やや強い)
4. 黄褐色土 (包含粒子量少ない, 堅固)
5. 黄褐色土 (4層より暗味あり)



1. 黒褐色土 (茶褐色土ブロック含まれる)
2. 黒褐色土 (スコリア粒多包, 下部にローム粒多い)
3. 暗黄褐色土 (ローム土多く混入)
4. 黒褐色土 (ローム細粒多包)
5. 暗黄褐色土 (壁ぎわにローム粒多い)
6. 黄褐色土 (ロームブロック主体とする)

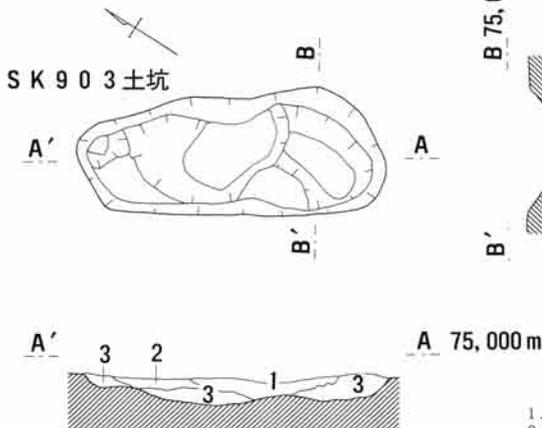


1. 明黒褐色土 (ローム土若干混入する)
2. 暗黄褐色土 (包含粒子量少ない)
3. 暗黄褐色土 (やや暗味あり, きめ細かい)
4. 黒褐色土 (スコリア粒多い)
5. 明黒褐色土 (色調明るい)

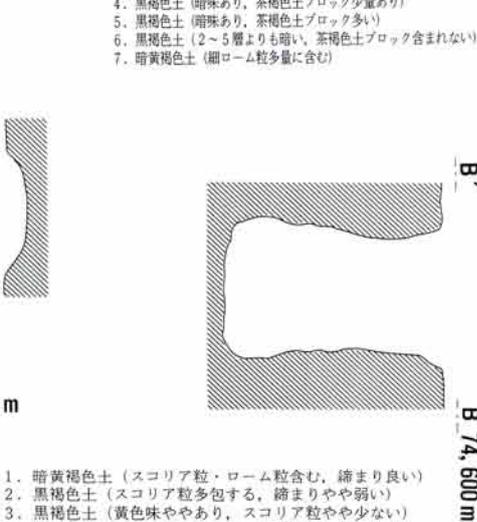


1. 黒褐色土 (茶褐色土ブロック多く含む)
2. 黒褐色土 (暗味あり)
3. 黒褐色土 (暗味あり, 茶褐色土ブロックみられない)
4. 黒褐色土 (暗味あり, 茶褐色土ブロック少量あり)
5. 黒褐色土 (暗味あり, 茶褐色土ブロック多い)
6. 黒褐色土 (2~5層よりも暗い, 茶褐色土ブロック含まれない)
7. 暗黄褐色土 (細ローム粒多量に含む)

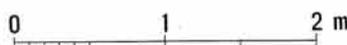
8. 暗黄褐色土 (ローム細粒少量含む)
9. 暗黄褐色土 (ローム細粒やや多い)
10. 暗黄褐色土 (暗味強い, ローム細粒多い)
11. 暗黄褐色土 (ロームブロック少量含む)
12. 暗黄褐色土 (ロームブロック多い)
13. 黄褐色土 (ローム細粒主体の)
14. 暗黄褐色土 (黒褐色土混入, ロームブロック含む)



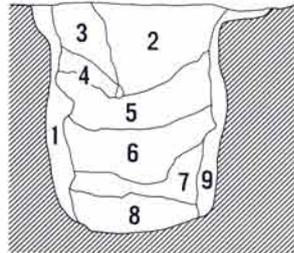
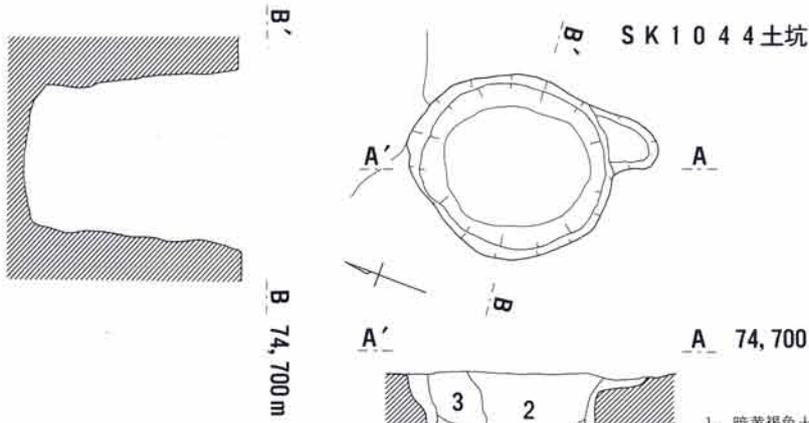
1. 暗黄褐色土 (ローム土混入する)
2. 暗黄褐色土 (ローム土やや少ない)
3. 暗黄褐色土 (スコリア粒多い)



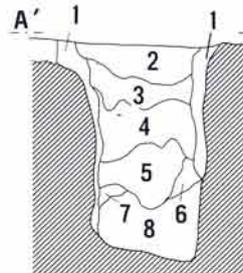
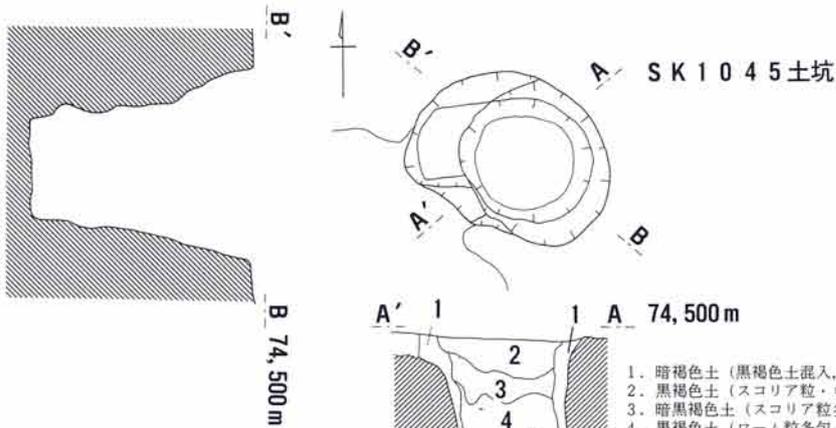
1. 暗黄褐色土 (スコリア粒・ローム粒含む, 締まり良い)
2. 黒褐色土 (スコリア粒多包する, 締まりやや弱い)
3. 黒褐色土 (黄色味ややあり, スコリア粒やや少ない)
4. 暗黒褐色土 (スコリア粒・ローム粒含む, 粘性あり)
5. 黒褐色土 (黄色味ややあり, 粘性あり)
6. 黒褐色土 (スコリア粒やや少ない, 締まり弱い)
7. 暗黒褐色土 (スコリア粒・ローム粒含む, 締まり弱い)
8. 黒褐色土 (包含粒子量少ない)
9. 明黒褐色土 (包含粒子量やや少ない, 粘性あり)



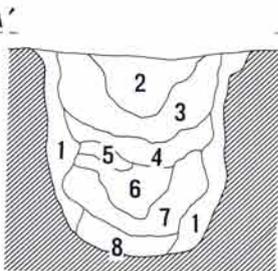
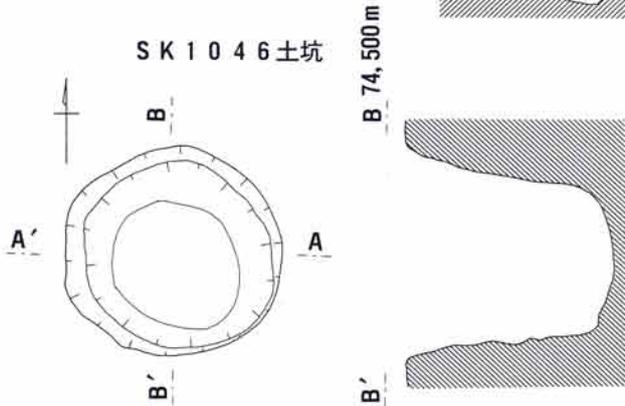
図面6 土坑実測図



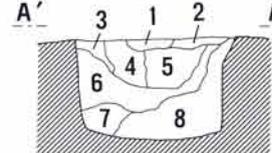
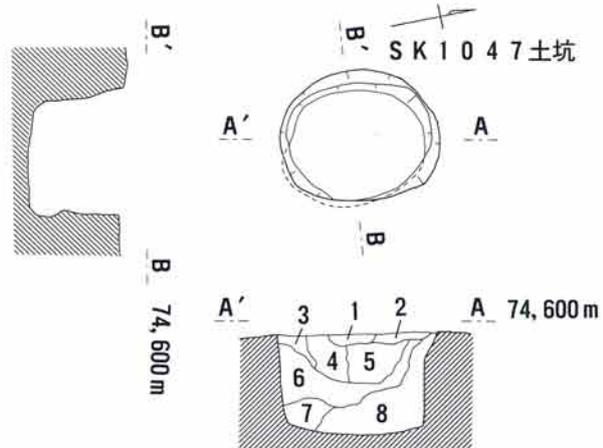
1. 暗黄褐色土 (スコリア粒少ない, 締まり良い)
2. 黒褐色土 (スコリア粒・ローム粒多包する)
3. 黒褐色土 (スコリア粒や少ない)
4. 黒褐色土 (ローム粒多包するが, スコリア粒少ない)
5. 暗黒褐色土 (包含粒子量少ない, 締まりやや弱い)
6. 暗黒褐色土 (スコリア粒少ない, 粘性あり, 締まり弱い)
7. 暗黒褐色土 (包含粒子量少ない, 粘性あり, 締まり弱い)
8. 黒褐色土 (スコリア粒少ない, 締まり良い)
9. 黄褐色土 (粘性欠ける, 締まり良い)



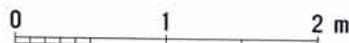
1. 暗褐色土 (黒褐色土混入, スコリア粒少ない)
2. 黒褐色土 (スコリア粒・ローム粒多包する)
3. 暗黒褐色土 (スコリア粒多包, 締まり良い)
4. 黒褐色土 (ローム粒多包, 堅固)
5. 暗黒褐色土 (スコリア粒・ローム粒含む)
6. 黒褐色土 (ローム粒多包, 締まり弱い)
7. 明黒褐色土 (スコリア粒・ローム粒多包, 締まり良い)
8. 黒褐色土 (包含粒子量多い, 色調明るい)



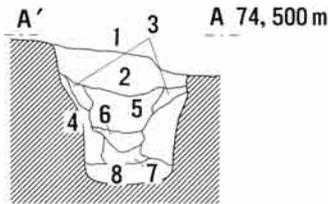
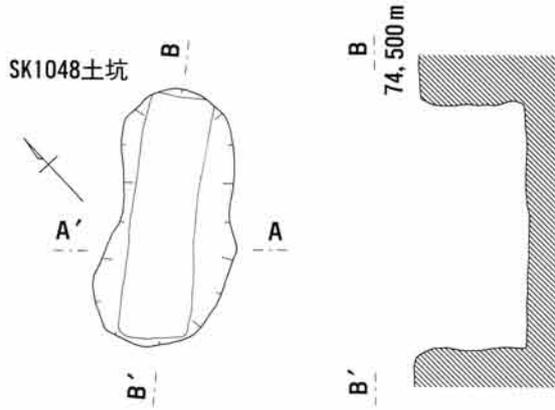
1. 暗褐色土 (包含粒子量やや少ない, 締まり弱い)
2. 黒褐色土 (スコリア粒・ローム粒多包する, 締まり良い)
3. 暗黒褐色土 (スコリア粒・ローム粒多包する, 締まり2層ほどはない)
4. 暗黒褐色土 (ローム粒やや少ない, 締まり良い)
5. 黒褐色土 (ローム粒少ない, 締まりやや弱い)
6. 黒褐色土 (色調明るい, 締まりやや弱い)
7. 暗黒褐色土 (スコリア粒・ローム粒多包する, 締まりやや弱い)
8. 黒褐色土 (包含粒子量やや少ない)



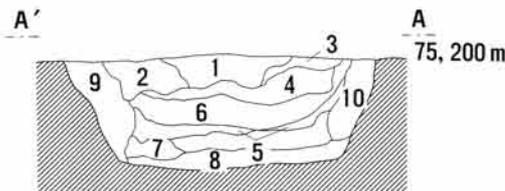
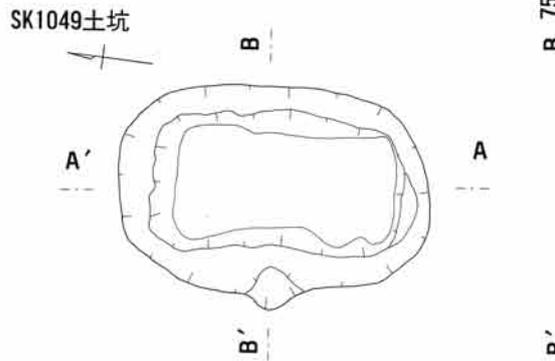
1. 暗黒褐色土 (スコリア粒・ローム粒含む, 粘性欠く, 締まり良い)
2. 黒褐色土 (包含粒子量少ない, 粘性欠く, 締まり良い)
3. 暗褐色土 (スコリア粒含む, 締まり良い)
4. 黒褐色土 (スコリア粒・ローム粒多包する, ローム土若干混入)
5. 明黒褐色土 (黄色味あり, ローム粒多包する, 締まり良い)
6. 明黒褐色土 (ローム粒多包する, 粘性あり, 締まり良い)
7. 黒褐色土 (ローム粒含むのみ, 粘性あり, 締まり良い)
8. 暗褐色土 (ローム粒多包する)



図面7 土坑、炉穴実測図

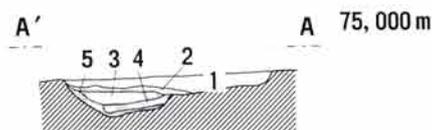
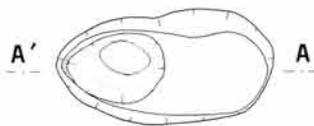


1. 暗黒褐色土 (包含粒子量少ない, 締まり良い)
2. 暗黒褐色土 (スコリア粒含む, 粘性あり, 締まり良い)
3. 黒褐色土 (褐色味やや強い, ローム粒少ない)
4. 暗褐色土 (包含粒子量少ない, ローム土若干含む)
5. 暗褐色土 (ローム粒多包するが, スコリア粒少ない, 締まり良い)
6. 黒褐色土 (スコリア粒多包する, 粘性あり, 締まり良い)
7. 黒褐色土 (スコリア粒やや少ない, 締まり良い)
8. 黒褐色土 (スコリア粒・ローム粒含む, 締まり良い)

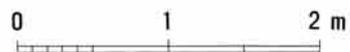


1. 黒褐色土 (包含粒子量少ない, 締まりやや弱い)
2. 黒褐色土 (スコリア粒・ローム粒含む, 粘性あり, 締まり良い)
3. 黒褐色土 (ローム土僅かに含む, スコリア粒やや少ない)
4. 暗黒褐色土 (スコリア粒・ローム粒多包する, 締まり良い)
5. 黒褐色土 (スコリア粒・ローム粒多包する, 粘性あり, 締まり良い)
6. 明褐色土 (ローム土若干含む, スコリア粒・ローム粒含む)
7. 黒褐色土 (スコリア粒・ローム粒やや少ない, 粘性あり, 締まり良い)
8. 暗褐色土 (暗味強い, 包含粒子量やや少ない)
9. 暗褐色土 (ローム土若干含む, 包含粒子量やや少ない)
10. 暗褐色土 (ローム土若干含む, 包含粒子量少ない, 締まりやや弱い)

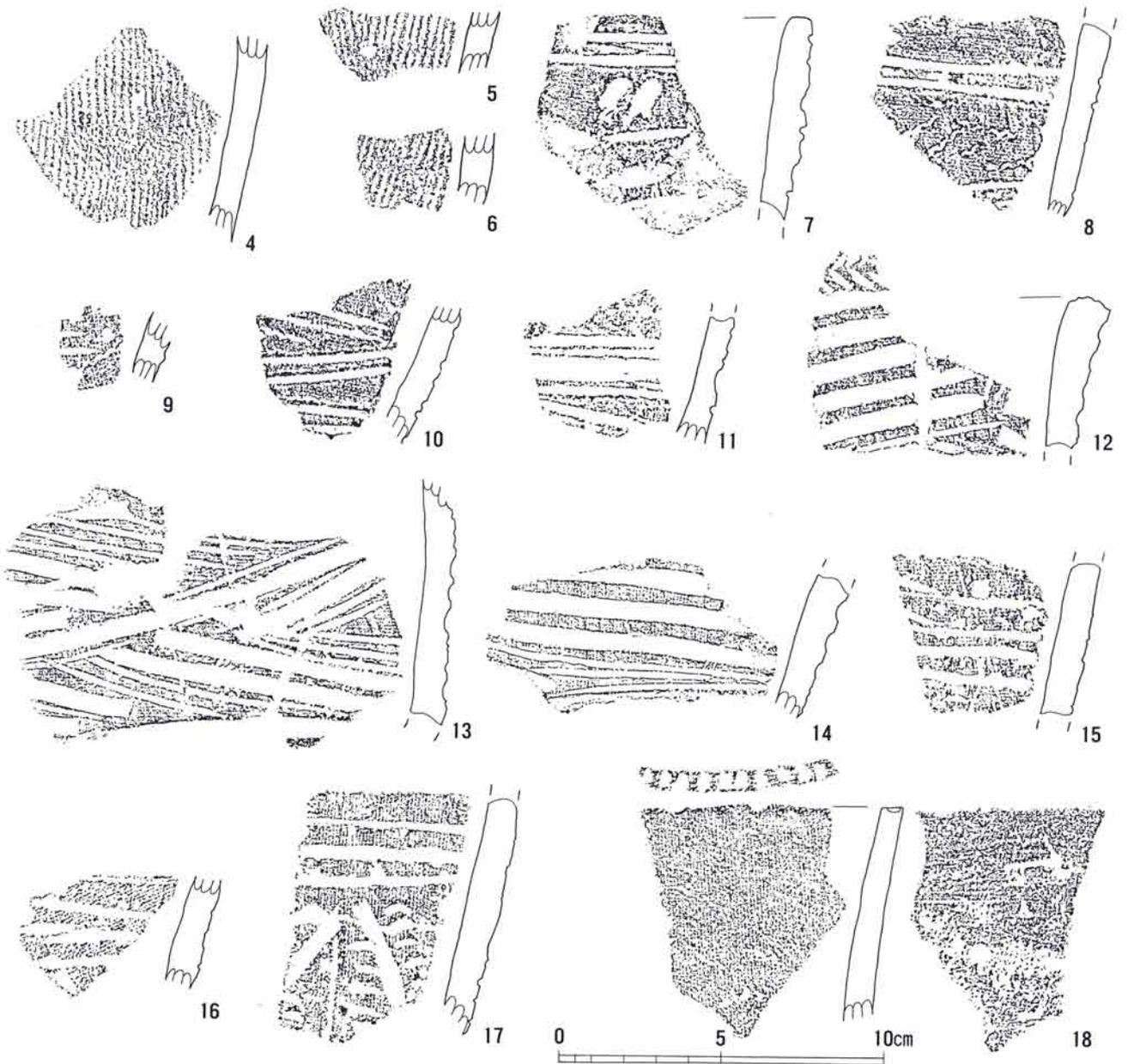
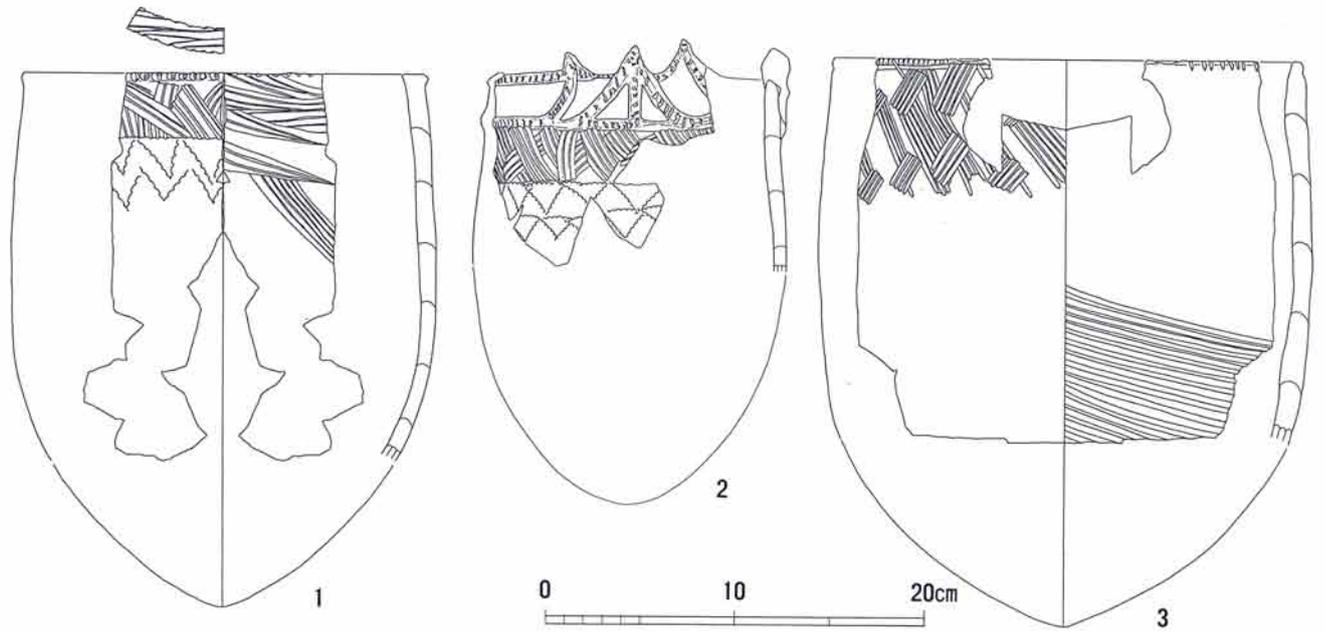
P187炉穴



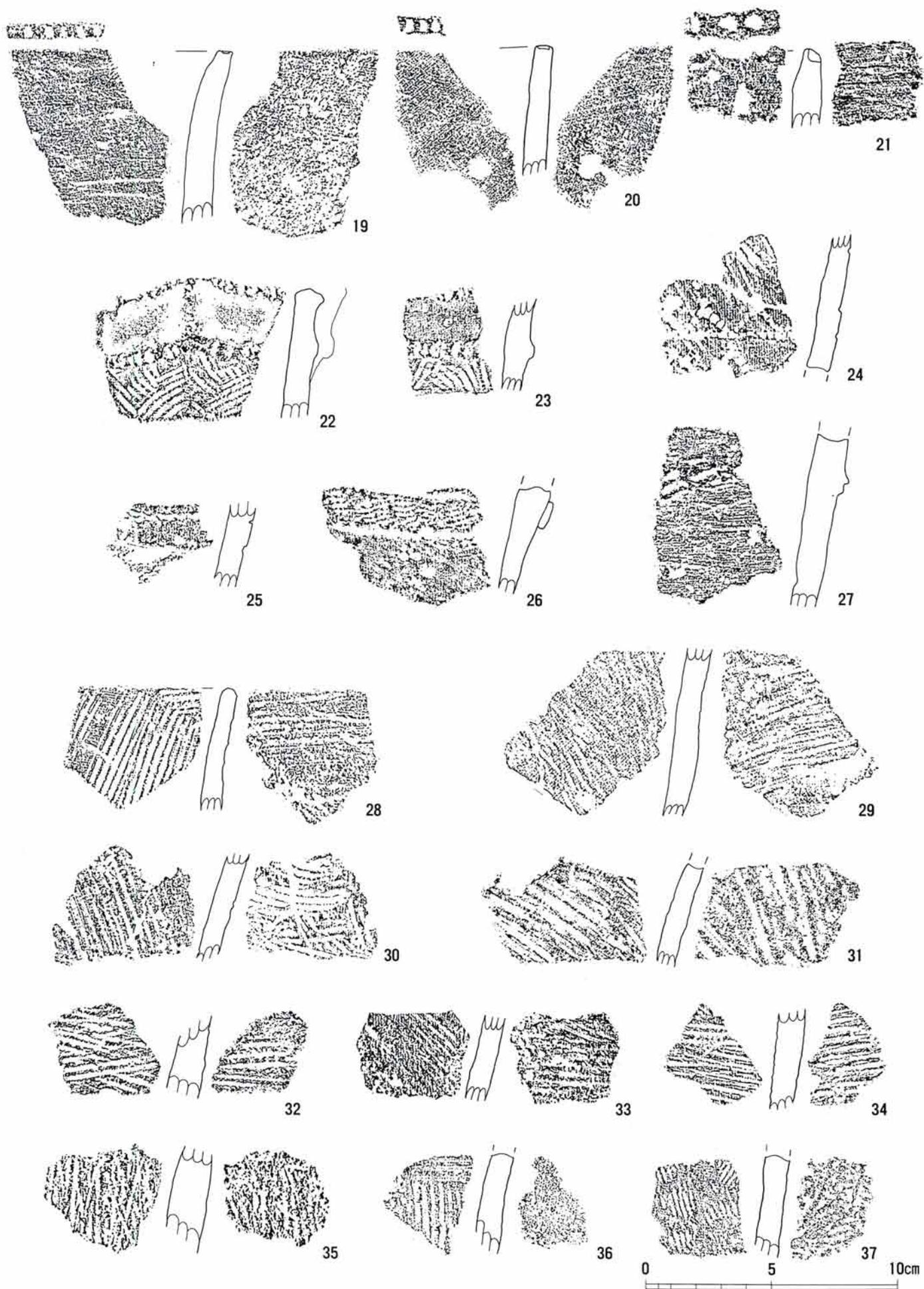
1. 黒褐色土 (包含粒子量少ない, 締まり良い)
2. 黒褐色土 (包含粒子量やや少ない, 粘性あり, 締まり良い)
3. 黒褐色土 (焼土粒若干含む, 炭化物含む, 包含粒子量少ない)
4. 赤褐色土 (焼土多包する, 炭化物含む, 締まりは良い)
5. 暗黄褐色土 (焼土粒僅かに含む, 炭化物含む, 粘性あり, 締まり良い)



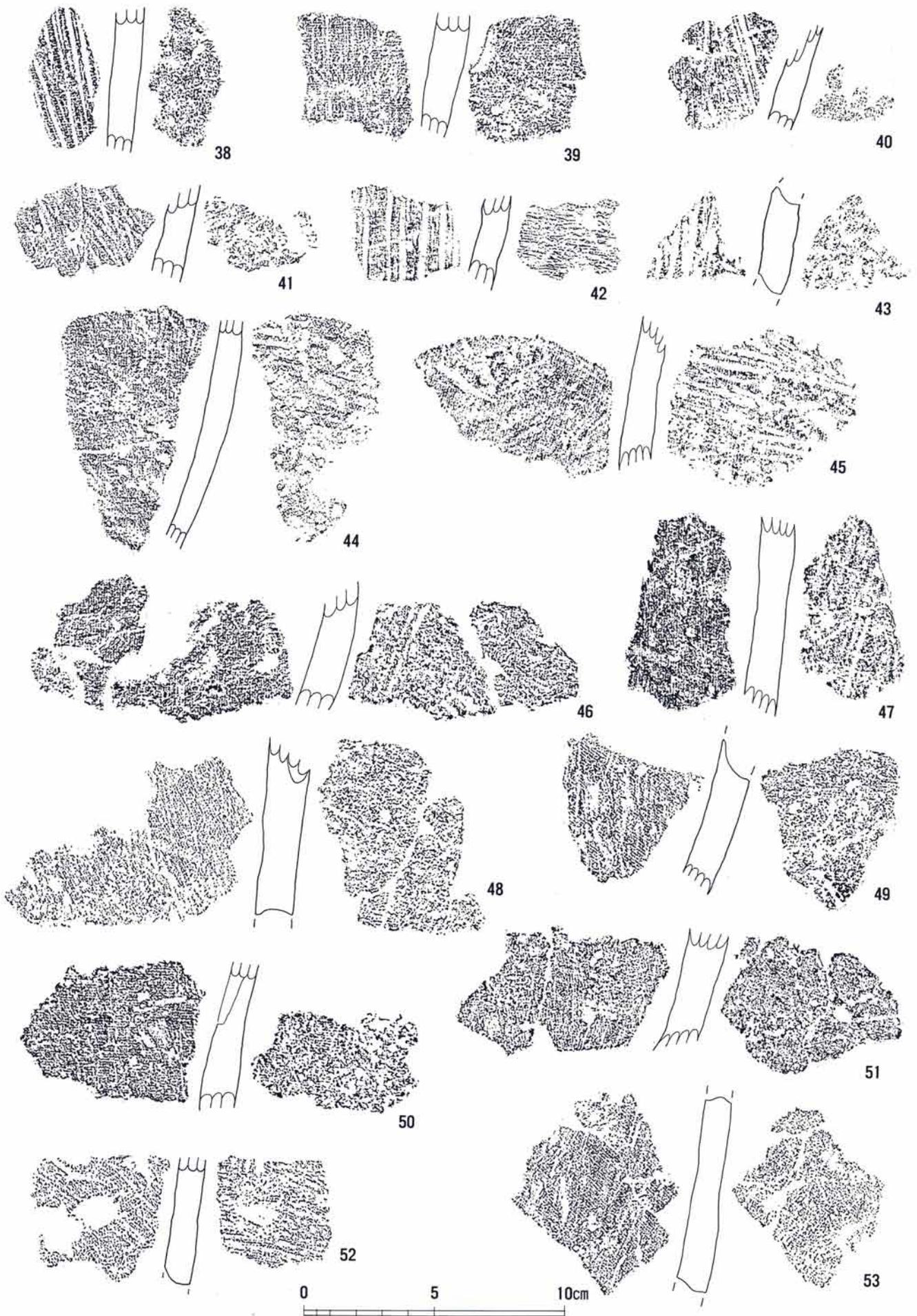
図面 8 縄文土器(1)



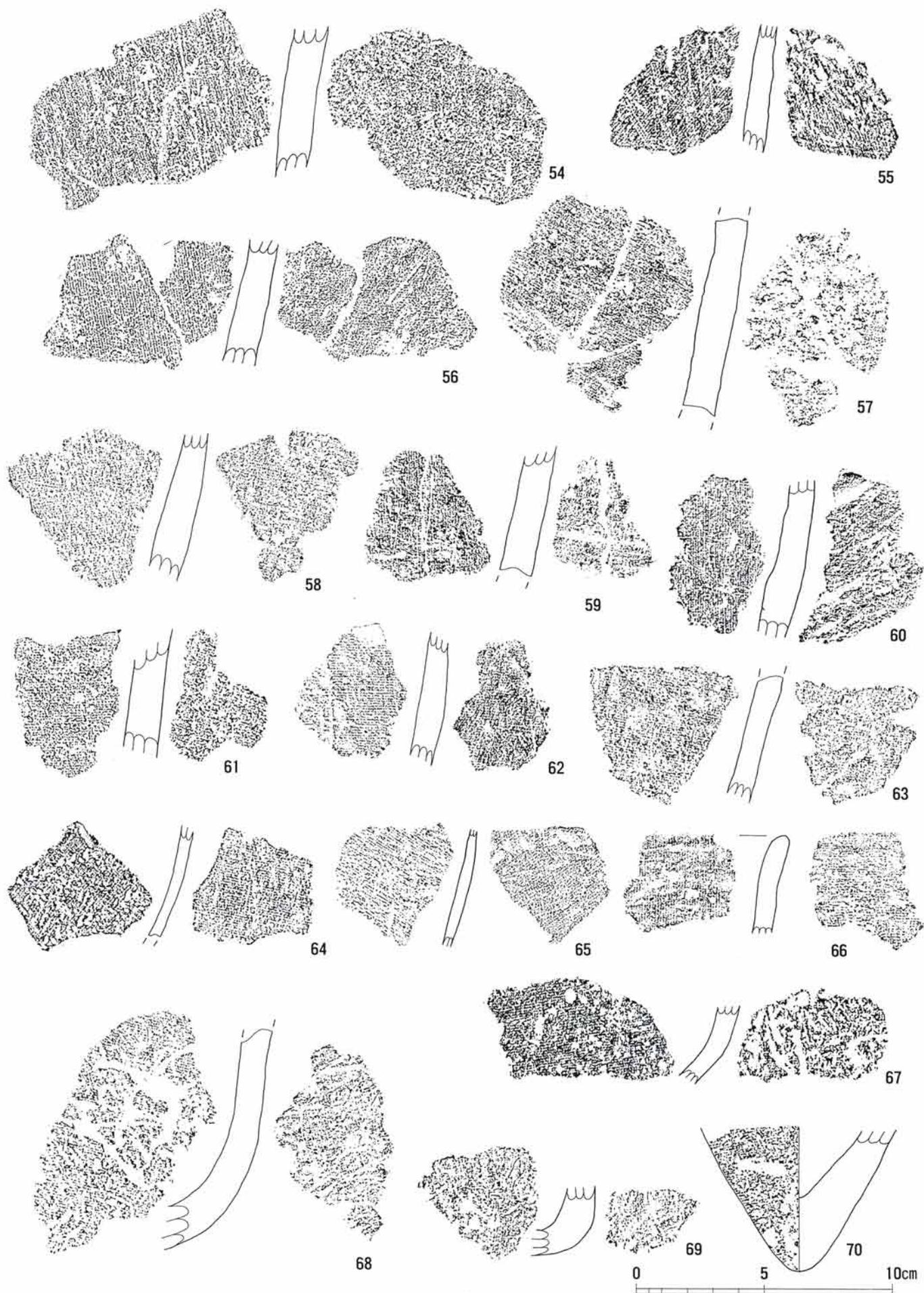
図面 9 縄文土器(2)



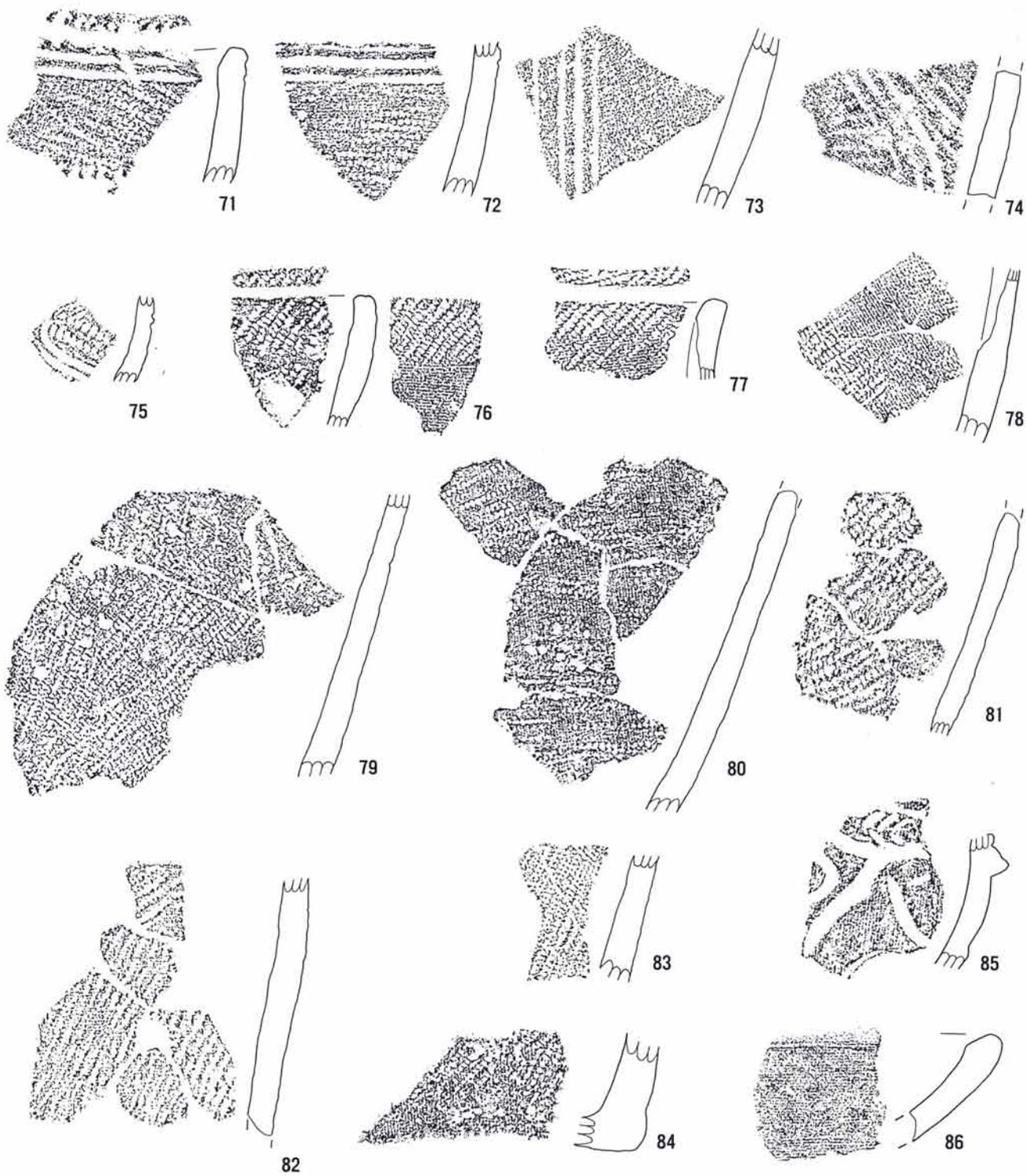
図面10 縄文土器(3)



図面11 縄文土器(4)

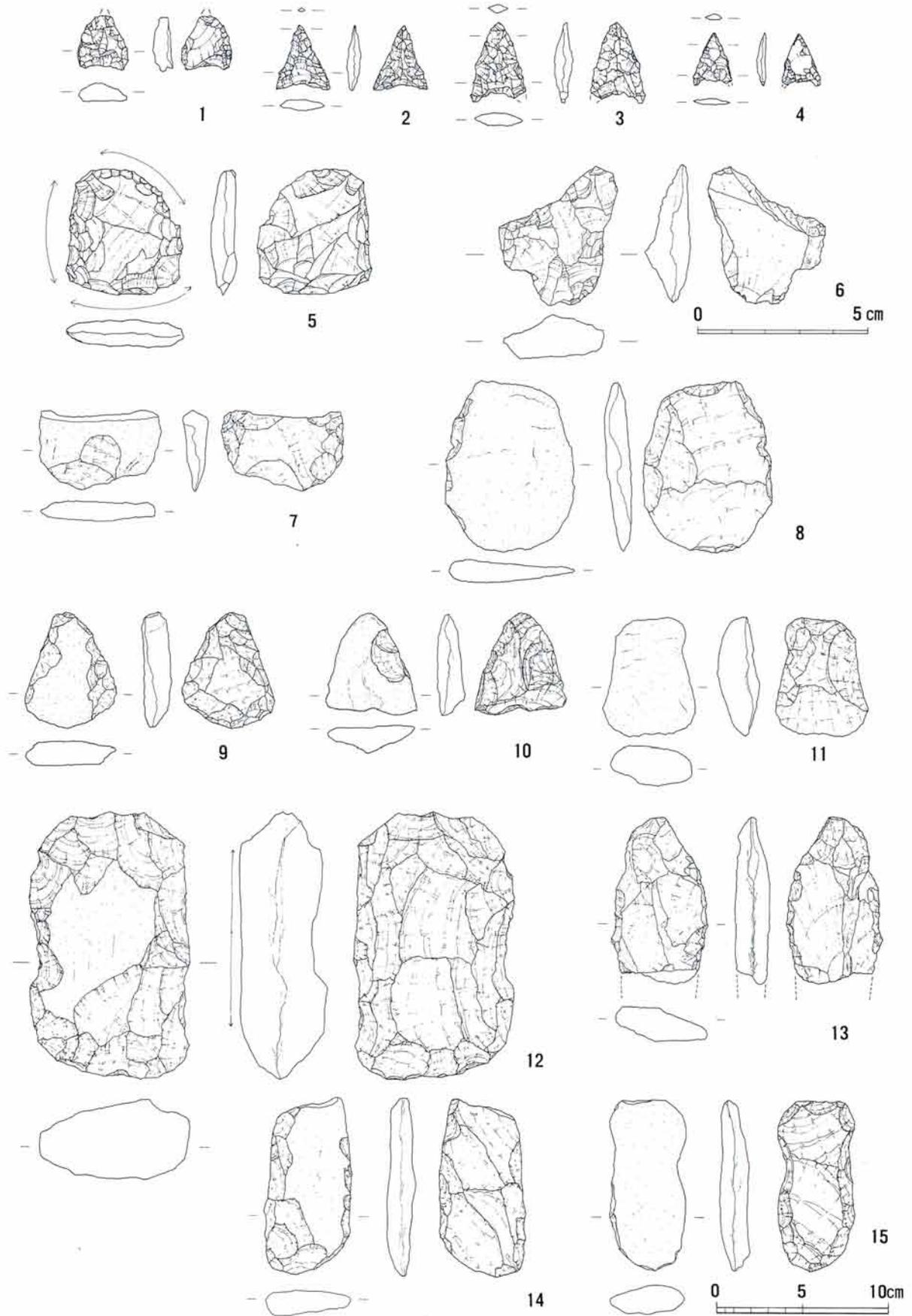


図面12 縄文土器(5)

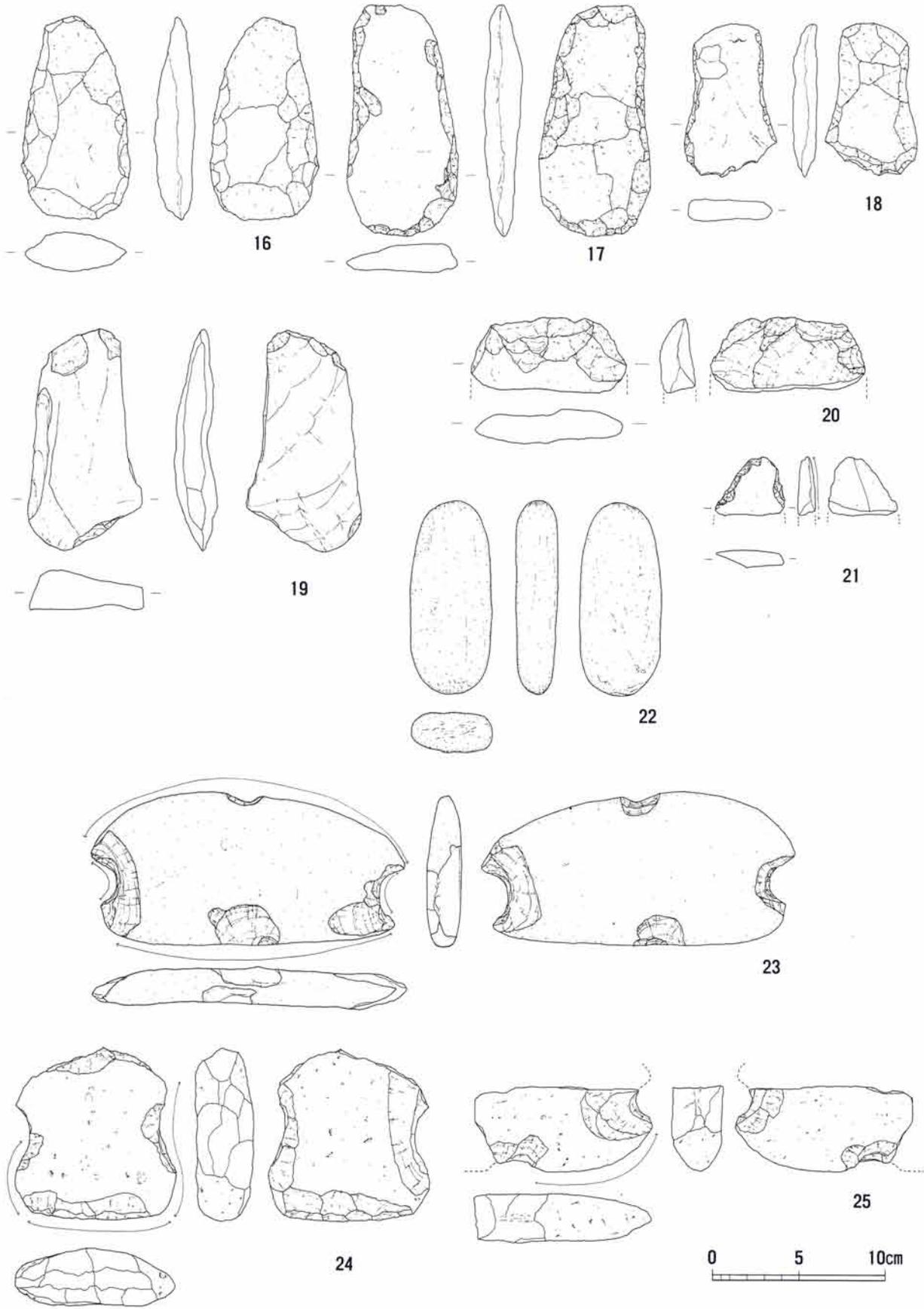


0 5 10cm

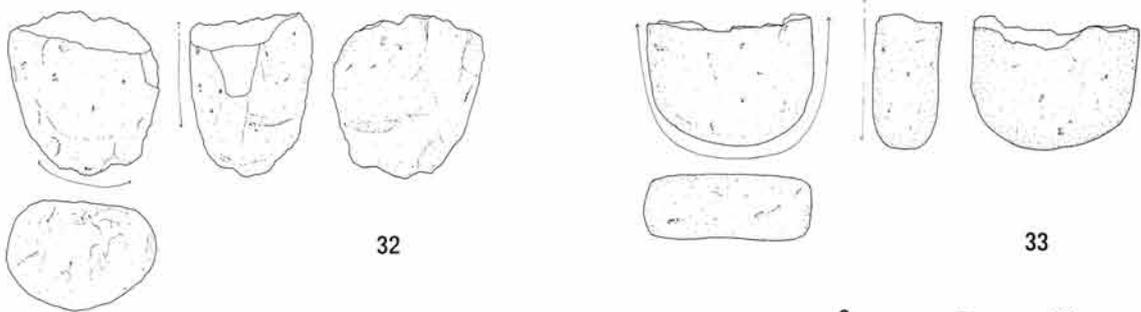
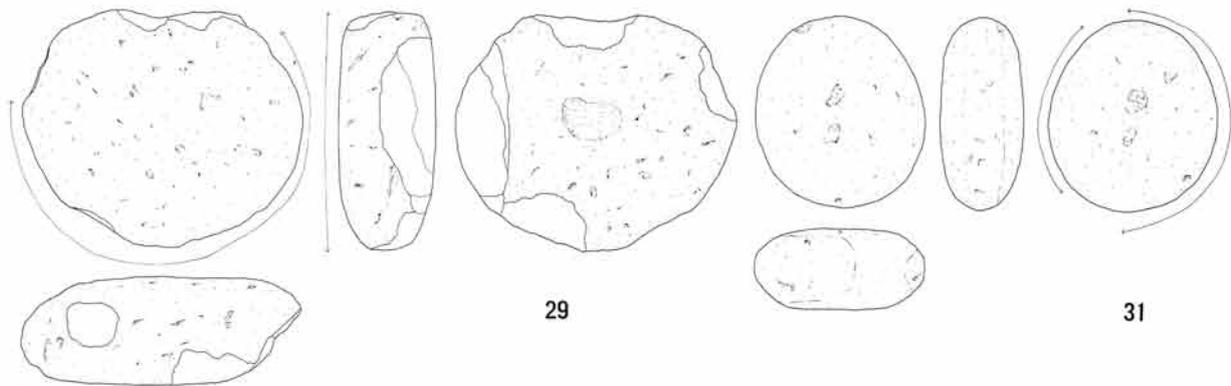
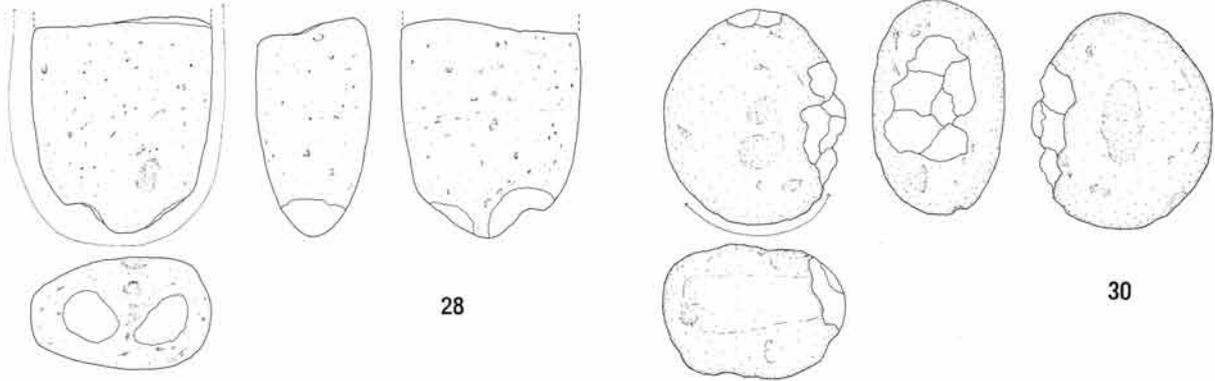
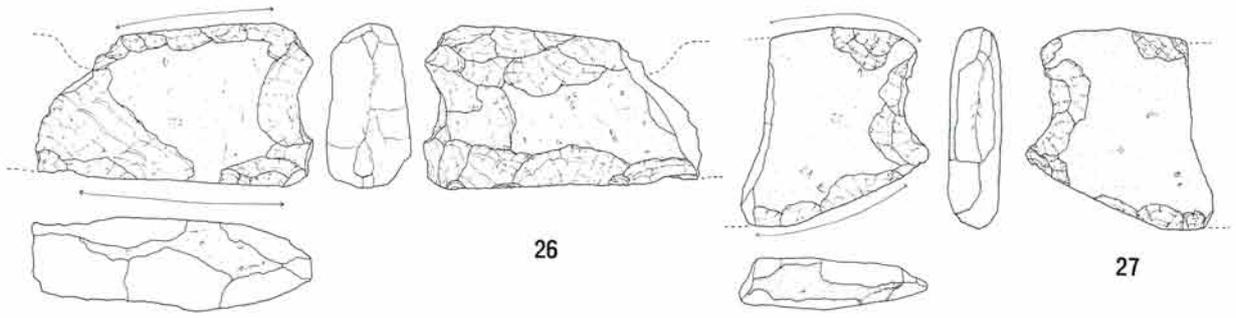
図面13 縄文時代石器(1)



図面14 縄文時代石器(2)

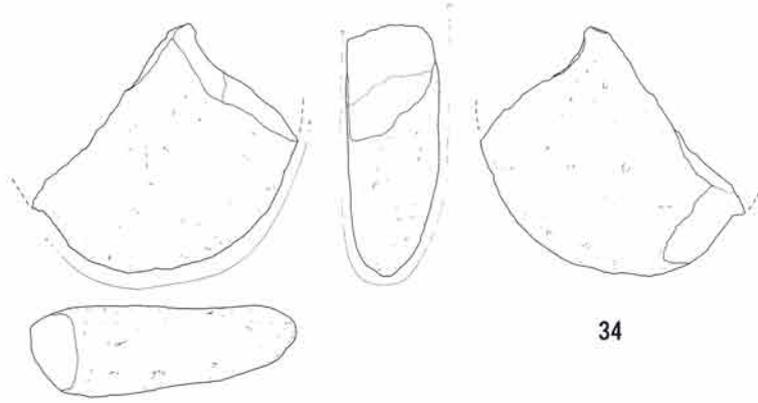


図面15 縄文時代石器(3)

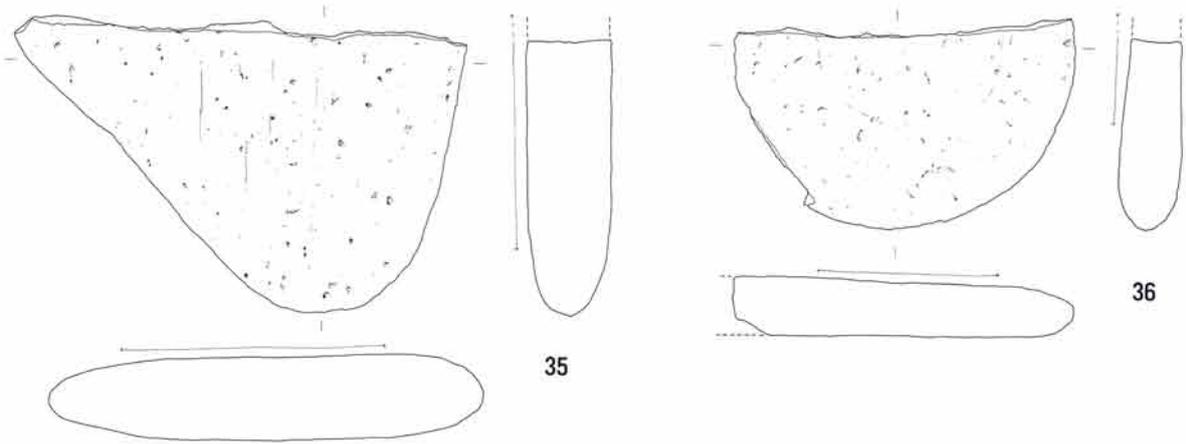


0 5 10cm

図面16 縄文時代石器(4)

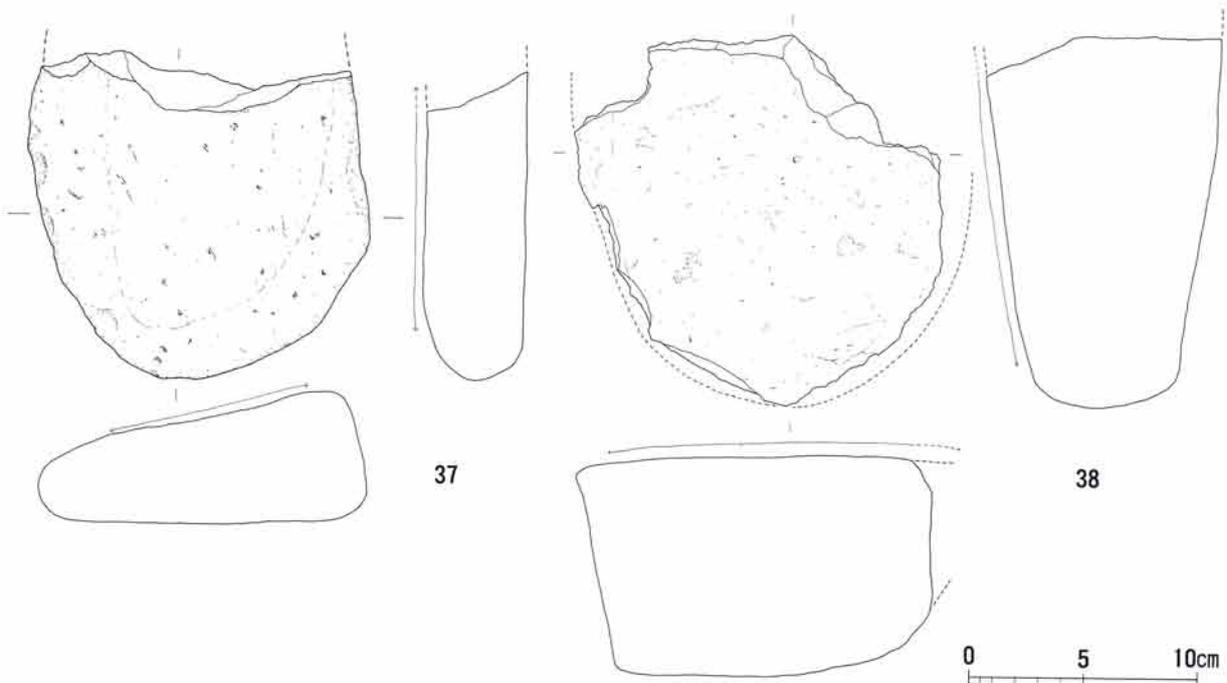


34



35

36



37

38

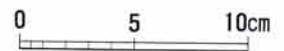


圖 版



1. 調査地区全景

図版2 調査地区全景

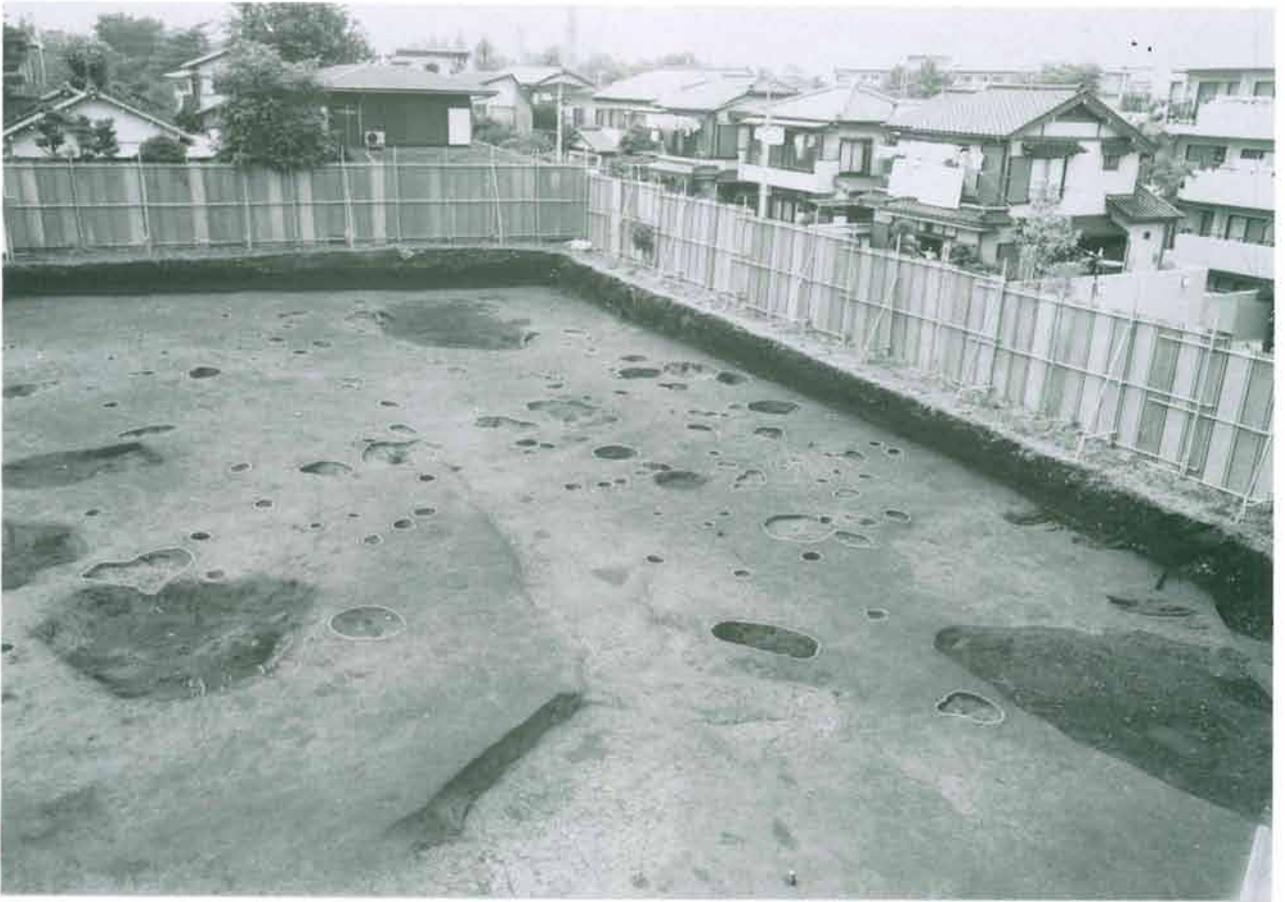


1. 調査地区全景



2. 調査地区全景

図版3 調査地区全景



1. 調査地区全景



2. 調査地区全景 (第249次)

図版4 調査風景



1. トータルステーション (南から)



2. 写真実測 (西から)



3. ゴンドラ撮影 (西から)



4. 覆土水洗



5. 調査風景 (南から)



6. 調査風景 (北から)

図版5 遺物出土状況



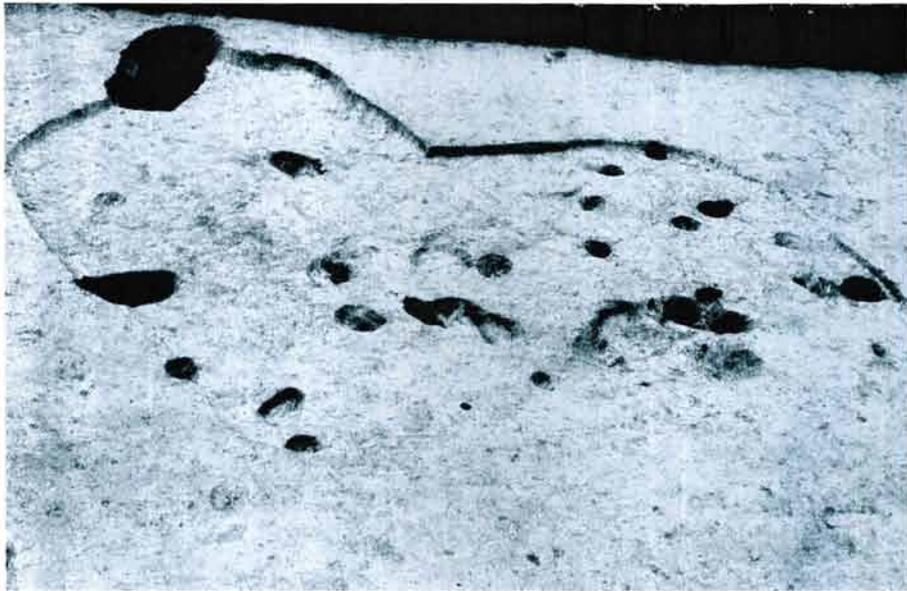
1. 遺物出土状況 (南から)



2. 遺物出土状況 (西から)



3. 遺物出土状況 (北から)



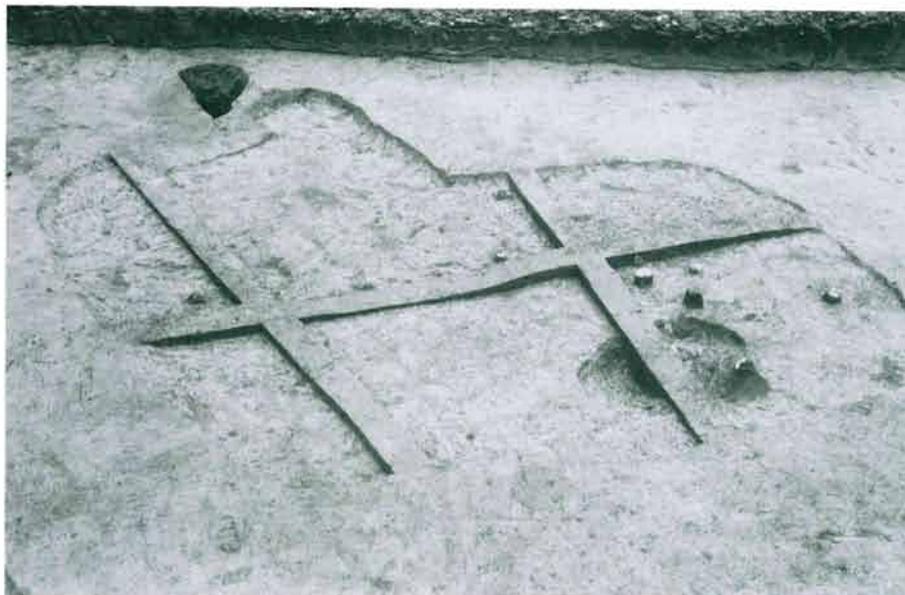
1. 全 景 (北から)



2. 全 景 (南から)



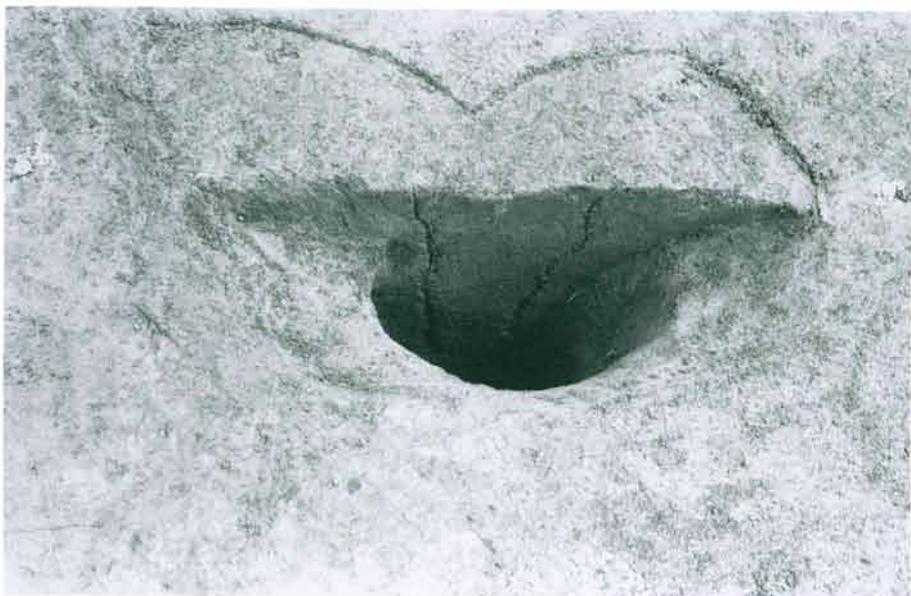
3. 全 景 (東から)



1. 遺物出土状況（北から）



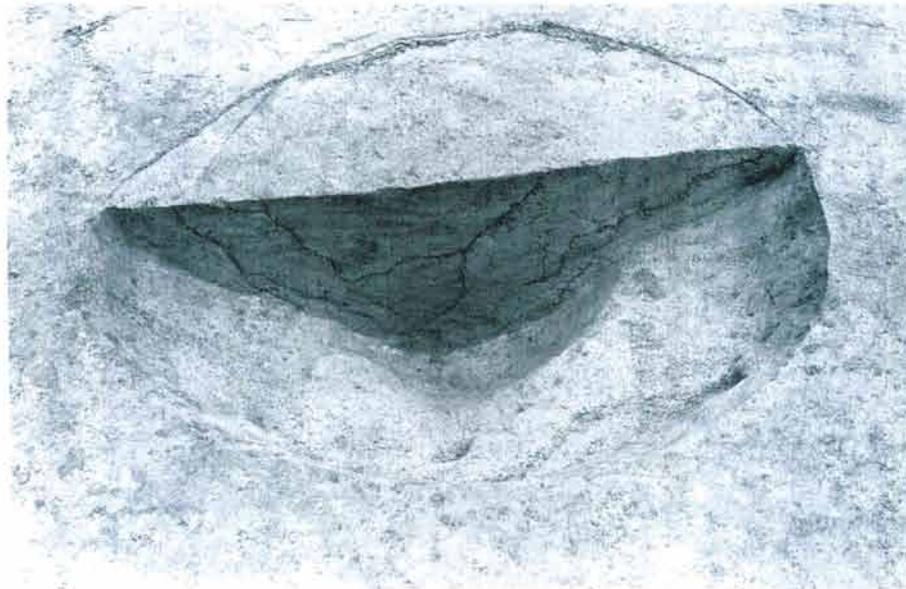
2. 遺物出土状況（西から）



3. 住居内小穴（P-2）（北から）



1. SK897土坑全景（北から）



2. SK897土坑東西土層断面（北から）



3. SK897・898土坑全景（北から）



1. SK898土坑全景（北から）



2. SK898土坑南北土層断面（西から）



3. SK899土坑全景（西から）



1. SK900土坑全景（西から）

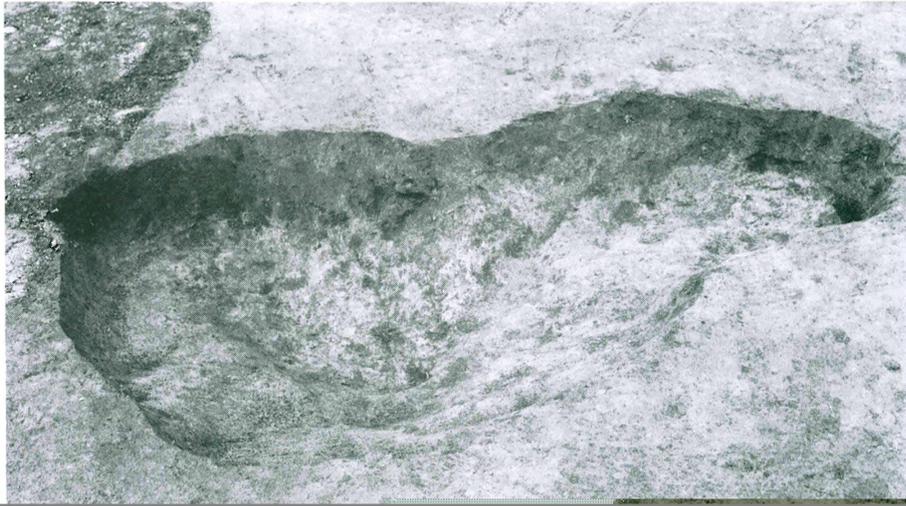


2. SK900土坑全景（北から）



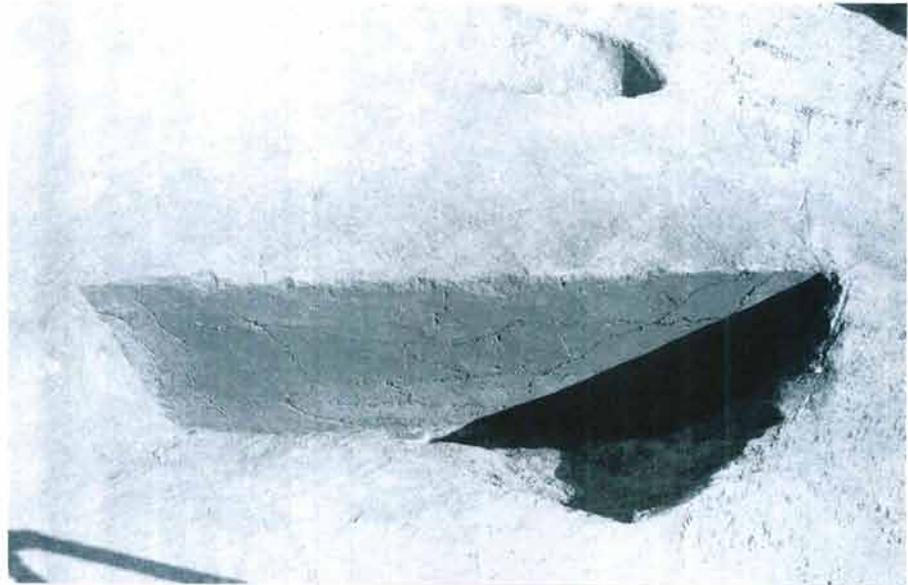
3. SK900土坑東西土層断面（南から）

图版11 SK901土坑





1. SK902土坑全景（西から）



2. SK902土坑南北土層断面（西から）



3. SK903土坑全景（北西から）



1. 全 景 (南から)



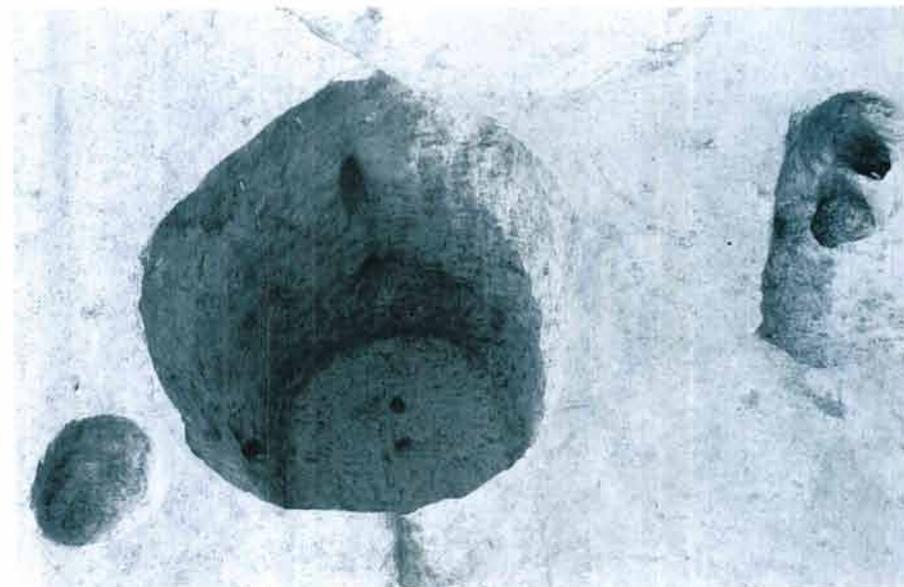
2. 全 景 (北東から)



1. SK1043土坑全景（南から）



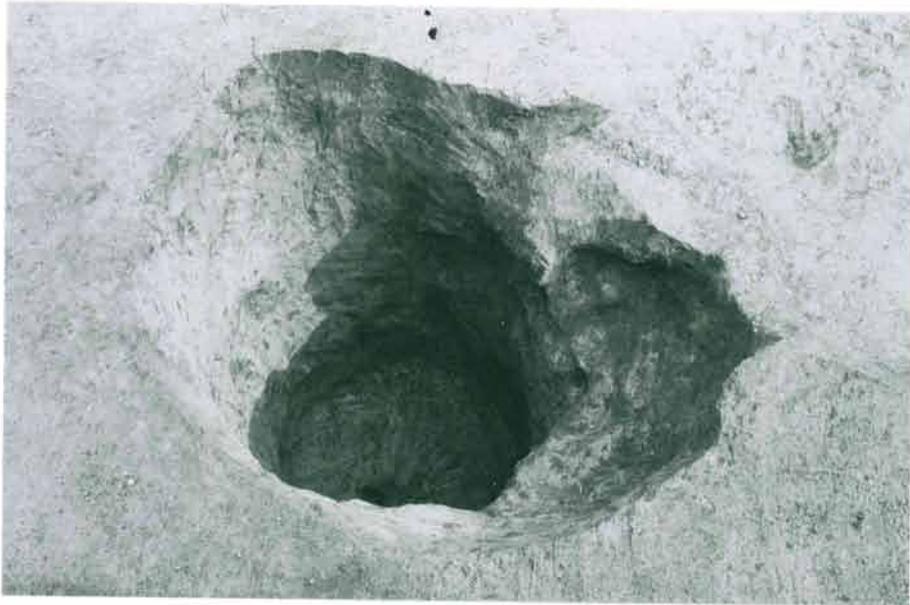
2. SK1043土坑南北土層断面（西から）



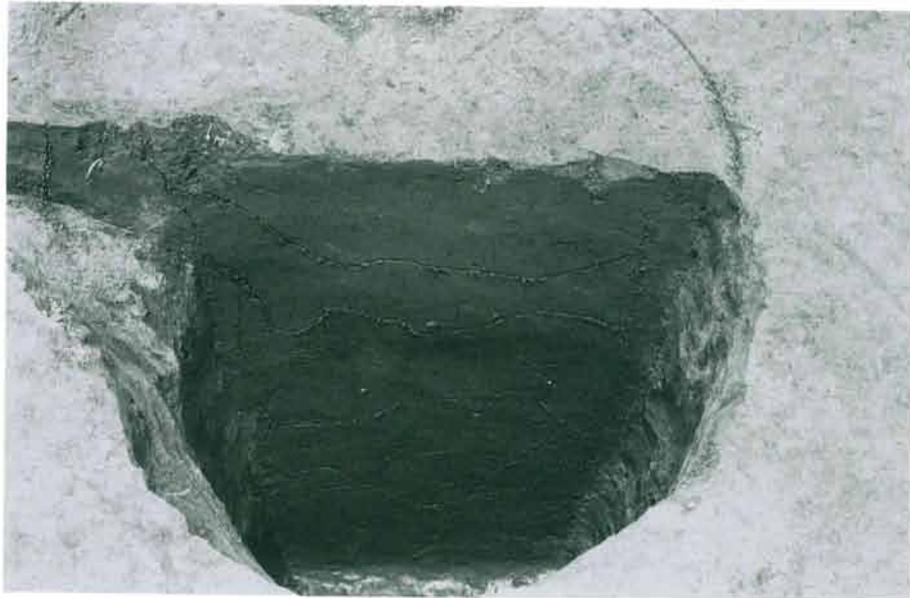
3. SK1044土坑全景（南から）



1. SK1044土坑南北土層断面（東から）



2. SK1045土坑全景（北から）



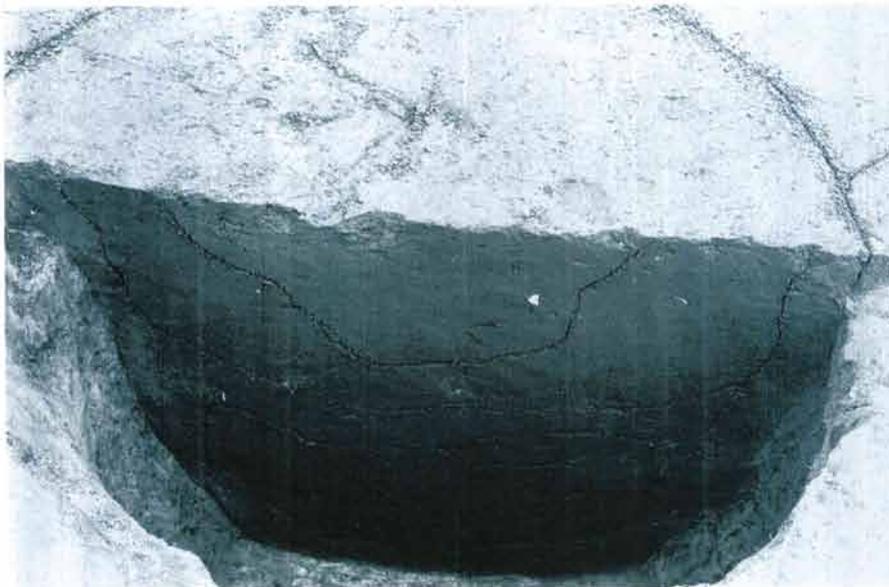
3. SK1045土坑東西土層断面（南東から）



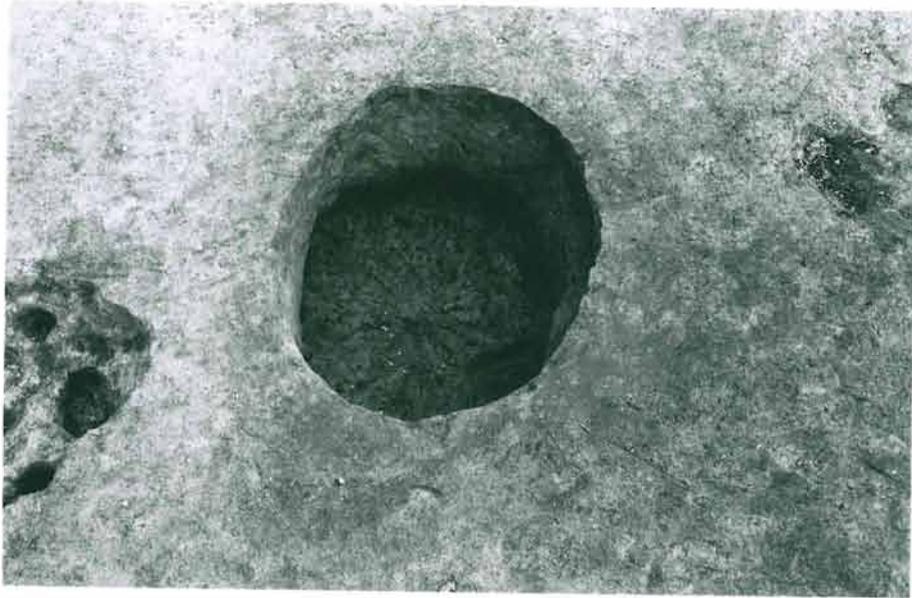
1. 全 景 (北から)



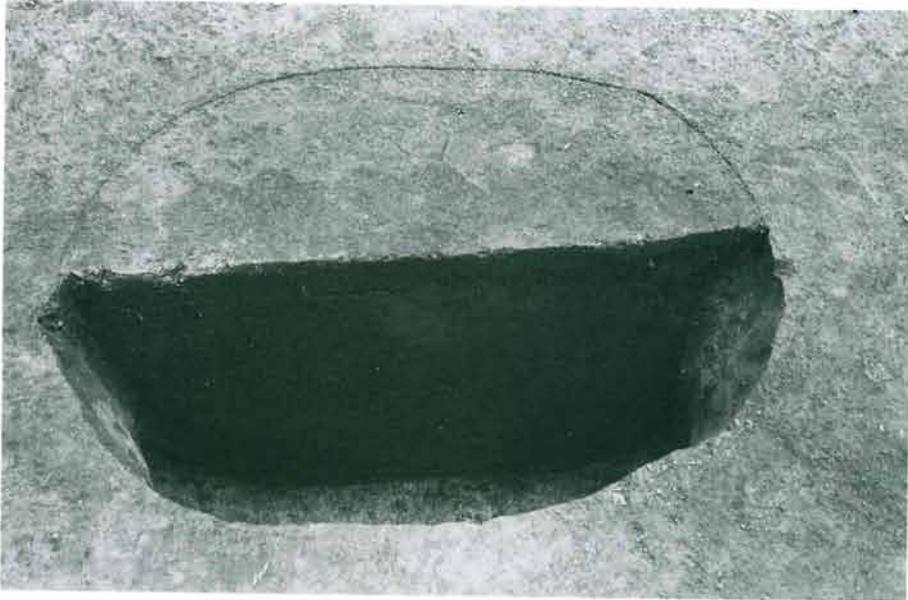
2. 全 景 (東から)



3. 南北土層断面 (西から)



1. SK1047土坑全景（北から）



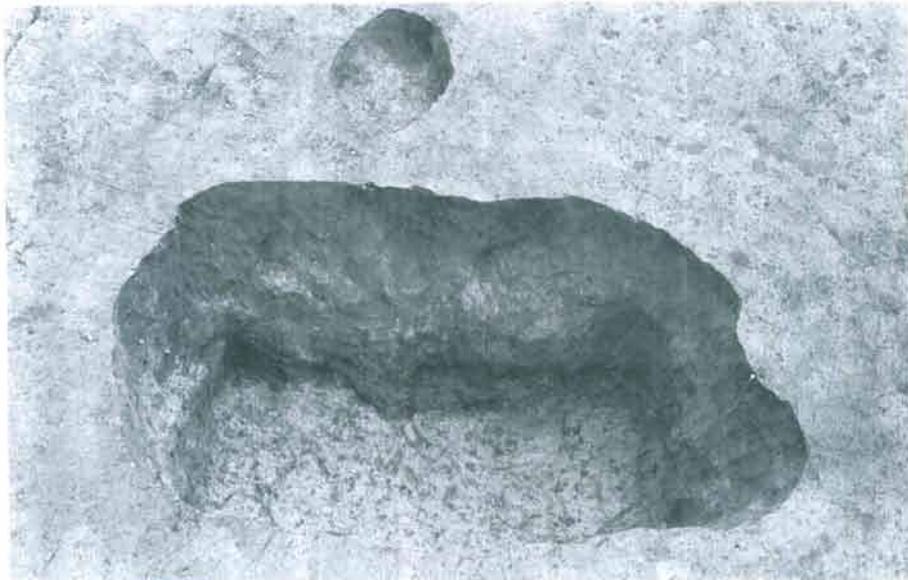
2. SK1047土坑南北土層断面（西から）



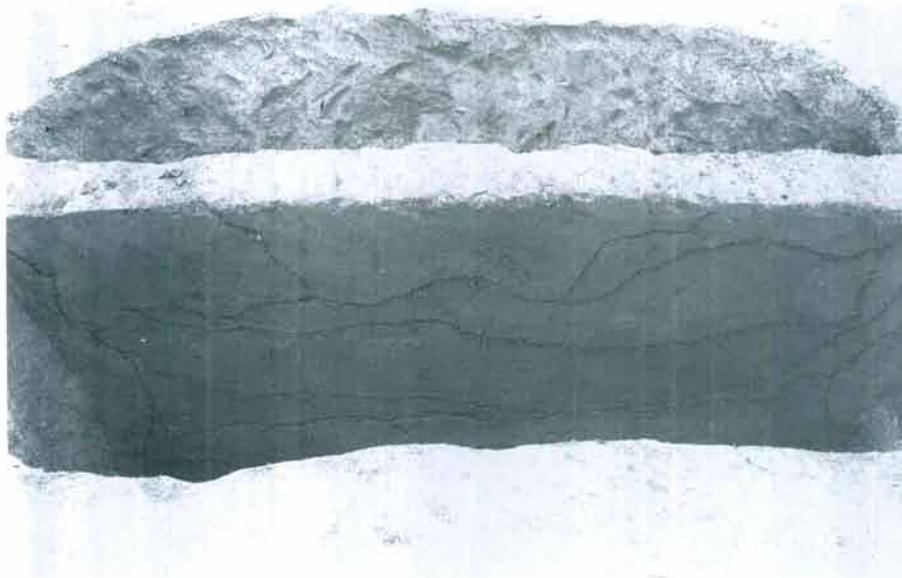
3. SK1048土坑全景（北から）



1. SK1048土坑南北土層断面（南西から）



2. SK1049土坑全景（東から）



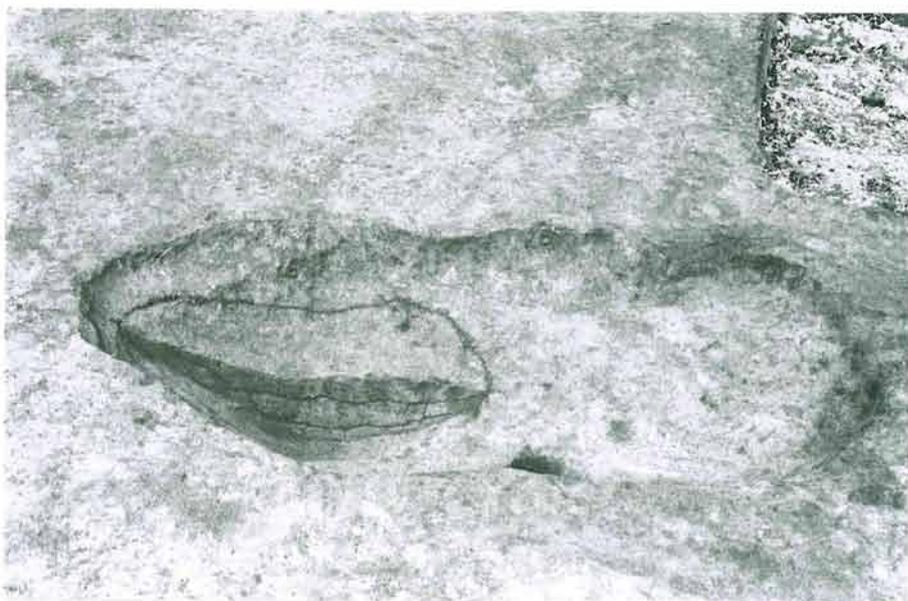
3. SK1049土坑南北土層断面（西から）



1. 焼土検出状況（南西から）



2. 完掘状況（南西から）



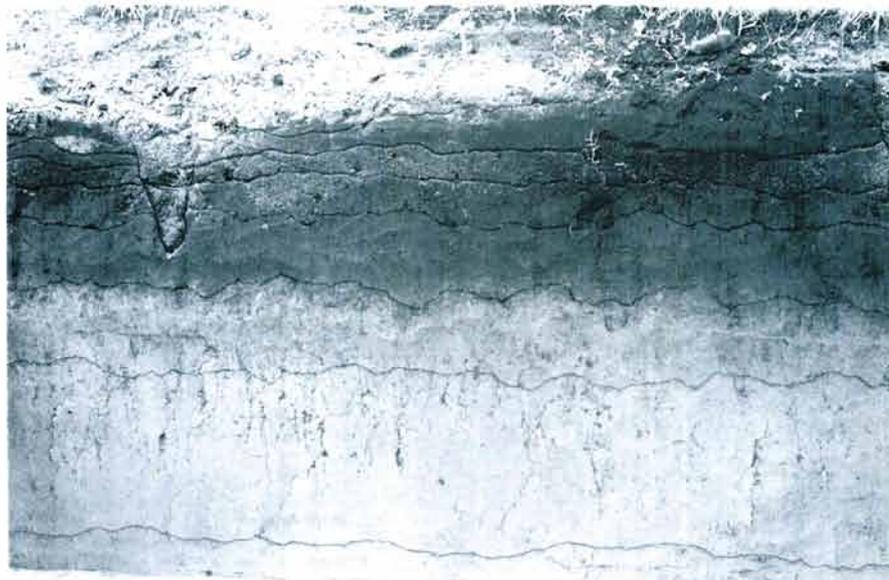
3. 南北土層断面（南西から）



1. 深掘り区全景 (南から)



2. 深掘り区全景 (東から)



3. 標準土層 (No.17深掘り区) (東から)



8-2



8-1



8-4



8-5



8-6



8-7



8-8



8-9



8-10



8-11



8-12



8-13



8-14



8-15



8-16



8-17

図版22 縄文土器(2)



8-18



9-19



9-20



9-21



9-22



9-23



9-24



9-25



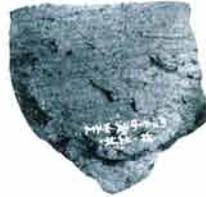
9-26



9-27



9-28



9-29



9-30



9-31



9-32



9-33



9-34





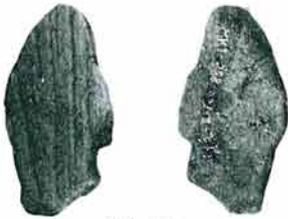
9-35



9-36



9-37



10-38



10-39



10-40



10-41



10-42



10-43



10-44



10-45



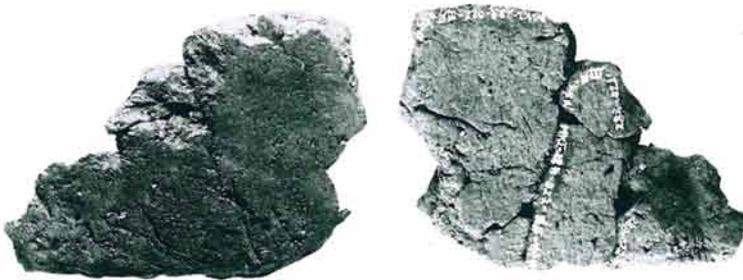
10-46



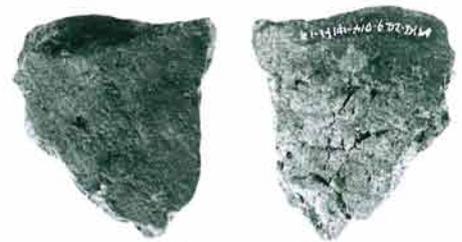
10-47



10-48



10-49





10-50



10-51



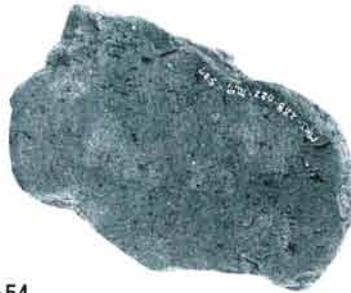
10-52



10-53



11-54



11-55



11-56



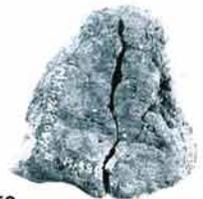
11-57



11-58



11-59



11-60



11-61



11-62



図版25 縄文土器(5)



11-63

11-64

11-65



11-66

11-68



11-67

11-69



11-70



12-71

12-72

12-73

12-74



12-75

12-76

12-77

12-78



12-79

12-80

12-81

12-82



12-83

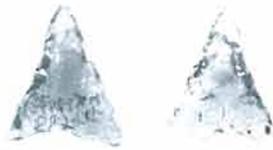
12-85

12-84

12-86



13-1



13-2



13-3



13-4



13-5



13-6



13-7



13-9



13-8



13-10



13-11



13-13



13-12



13-14





13-15

14-16

14-18



14-17

14-19



14-20

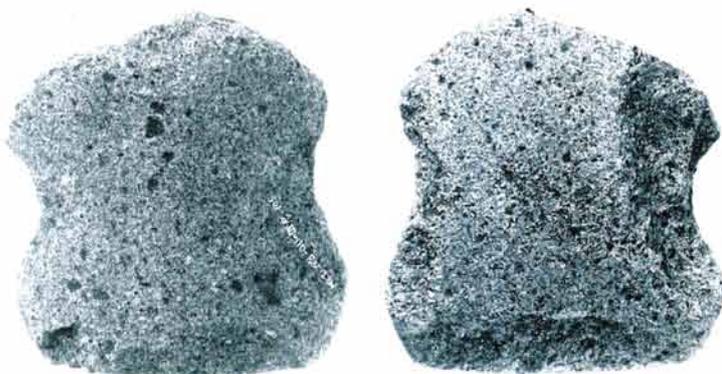
14-21



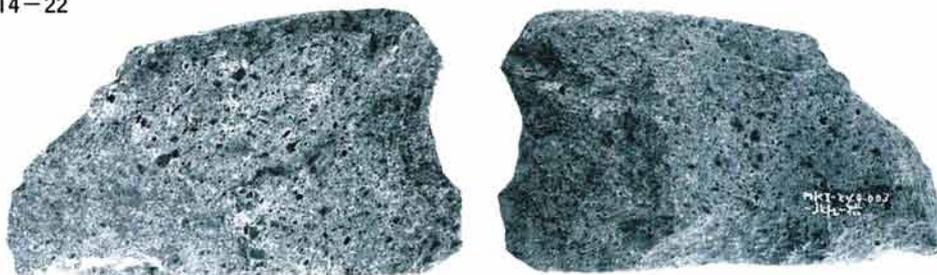
14-23



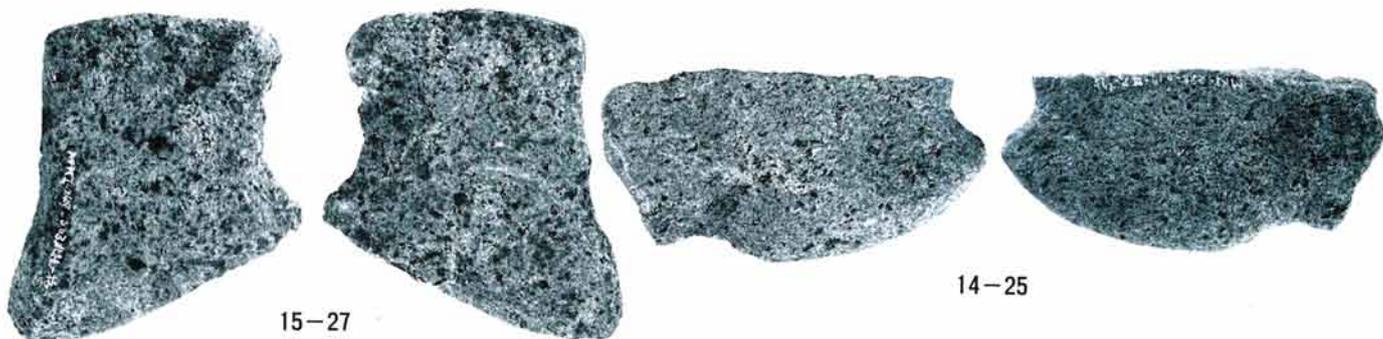
14-22



14-24

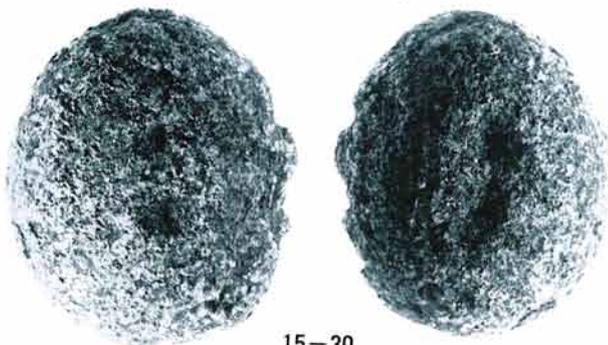


15-26



15-27

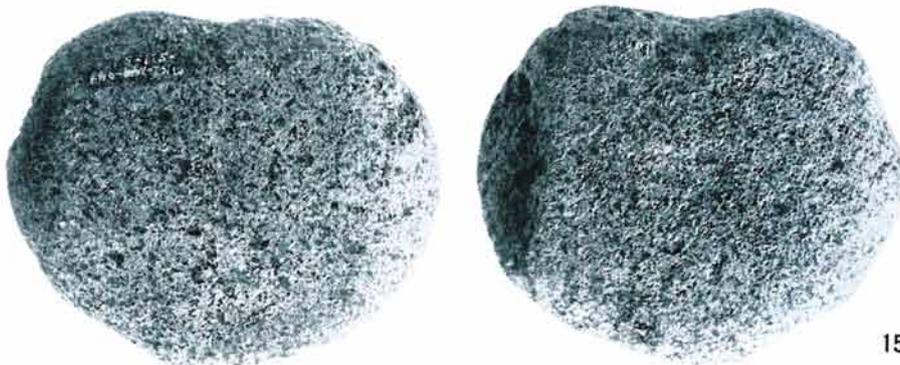
14-25



15-30



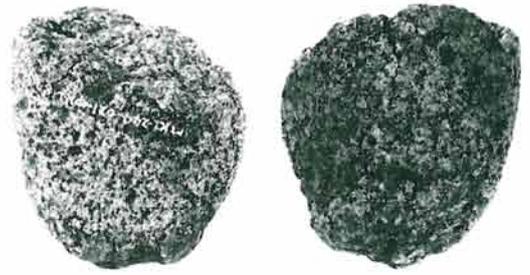
15-28



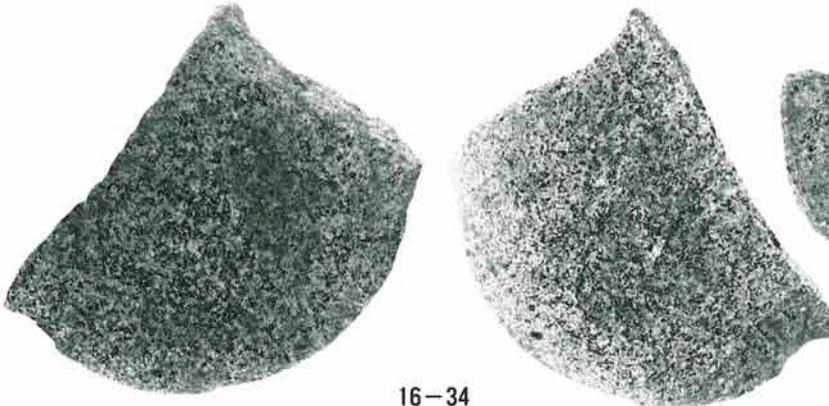
15-29



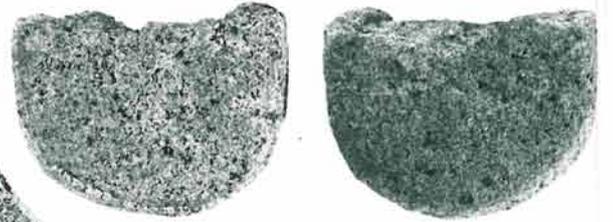
15-31



15-32



16-34



15-33



16-35



16-36



16-37



16-38

武蔵国分寺跡発掘調査概報 XIII

ーリクルートコスモス建設に伴う調査ー

発行日	昭和63年 9 月30日
編著者	武蔵国分寺遺跡調査団 © (団長 滝口 宏)
発行所	国分寺市遺跡調査会 〒 185 国分寺市戸倉 1 - 6 - 1 TEL 0423-25-0111 (代表) 東京都国分寺市教育委員会内
印刷所	第一法規出版株式会社

令和 4 年 (2022) 3 月10日 デジタル版作成